

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇一二年 第六五号



九州沿海図 巻第20 伊能忠敬作(重要文化財)

引用元: 東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

九州沿海図は、第七次測量(第一次九州測量)が終了し、第八次測量(第二次九州測量)の開始前に作成した地図である。このとき、西九州と壱岐・対馬、屋久島・種子島などは未測量であったが、それらの地域を除いた大図21図幅、中図1図幅、小図1図幅が作成された。これらの図は幕府に上呈され、浅草文庫に伝わり、東京国立博物館が所蔵している。浅草文庫の朱印がある。現在は、九州国立博物館に長期貸与されているようである。

ここに示した大図は、第20阿蘇の図である。全体に濃色で、特に山系を描く緑が濃い。田畑は、かなり桃色に傾いた色で、国会大図に比べると暗色で、桃色が強い印象を受ける。おそらくこの九州沿海図は、最終版の姿を想定しながら配色などを考えたのであろう。しかし、だいたい濃暗色となり、注記が読みにくい部分もあるので、最終版では改良し、国会大図のような明るい色遣いになったのであろう。

阿蘇山の描き方が秀抜である。鬼嶋山(杵島岳)、高岳、根古岳の注記があり、高岳からは噴煙が立ち上っている。これは、阿蘇谷(阿蘇カルデラの北側)から見た山景である。鬼嶋山の背後などにはたなびく霞雲が描かれ、大和絵風の描き方も見られる。根古岳は、霞雲に浮かんでいるようにも見える。

描かれている測線は、熊本と竹田を結ぶ測線で、文化7年の師走に測量した。12月14日に熊本城下を先手、後手に分かれて出立し、大津町に止宿した。大図には、大津町に至る間、上立田村弓削から新町まで杉並木が、新町から入道水村まで松並木が測線に沿って描かれている。これらの地名は、すべて現在も集落名に残っている。大津からの豊後街道は、清正公道と呼ばれ高尾野、新小屋を通り、二重峠に達して阿蘇谷に降りていったが、大図にも両側を山に挟まれた街道を通る測線の状況がよく表現されている。

大津から内牧村に止宿し、夜は天測を行い、翌日宮地村の阿蘇神社の鳥居まで測り、坂梨村まで測量してその日も天測を行った。天測地点まで分岐した測線を確認できる。

星埜由尚(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)



函館山展望台のレリーフ（版碑）

「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」
(東京カートグラフィック(株)猪原紘太氏作成)

伊能忠敬の第一次測量は、北海道函館市の函館山から始まった。寛政十二（一八〇〇）年五月十九日、陸奥国三厩村から箱館へ八日間風待ちをして渡航したが、吉岡に着船してしまった。風向きがよくならないため、結局陸行して箱館に二十二日に到着した。

箱館では、前年に松前藩から上知した東蝦夷地を管轄する箱館役所（蝦夷奉行は未だ置かれていなかった）に諸手続を行い、その間太陽や恒星を測った。

二十八日には天気がよく、箱館山に所々の方位を測ったと「測量日記」には記されている。これにより函館市が設置したのがこの碑板である。

アメリカ議会図書館所蔵の陸軍模写図においては、箱館山の半島を一周する測線が描かれており、函館山を廻る海岸が測量されたことがわかる。

しかし、寛政十二年の蝦夷地図第一（東京国立博物館所蔵）には、函館山の北側の測線がわずかに描かれているのみで、箱館山へ登った跡も描かれていない。箱館山の名称も見当たらない。模写図であるから、正本に描かれていなかったとは即断できないが、蝦夷の他の地域の大図の測線から見ても（例えば襟裳岬）、最終成果である「大日本沿海輿地全図」の編集にあたって、蝦夷地については、第一次の蝦夷地測量の成果はほとんど使われていないと見るべきではなかろうか。

蝦夷の地図は、大部分のデータは間宮林蔵によるものと言ってよく、「間宮図」であると言っても過言ではないだろう。もっとも、箱館山からの方位線は中図に描かれており、これは、第一次測量の時のデータであると思われる。

目次

65 号

グラビア

● 伊能図の旅

大図一〇四号より 三宅島
大図四七号より 綾里付近
大図一二九号より 木曾川河口

星埜由尚

1

話題

● 伊能図はどう利用されたか

その1 江戸時代

鈴木純子 6

● 伊能測量現地史料紹介⑧

長州藩毛利家の伊能測量記録

河島悦子・鈴木純子・
伊藤栄子・渡辺一郎

15

● 忠敬旧宅雑録（二）

伊能洋 22

● 伊能三郎右衛門家を再興した伊能源六景文と
海保家について

海保英之 24

ノート

● 伊能忠敬関係基本図書紹介

渡辺一郎 27

● 京都大学図書館蔵伊能大図稿本・天理大学図書館蔵
伊能中図の閲覧調査の報告

31

資料 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二回
伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

渡辺一郎監修・井上辰男編著

35

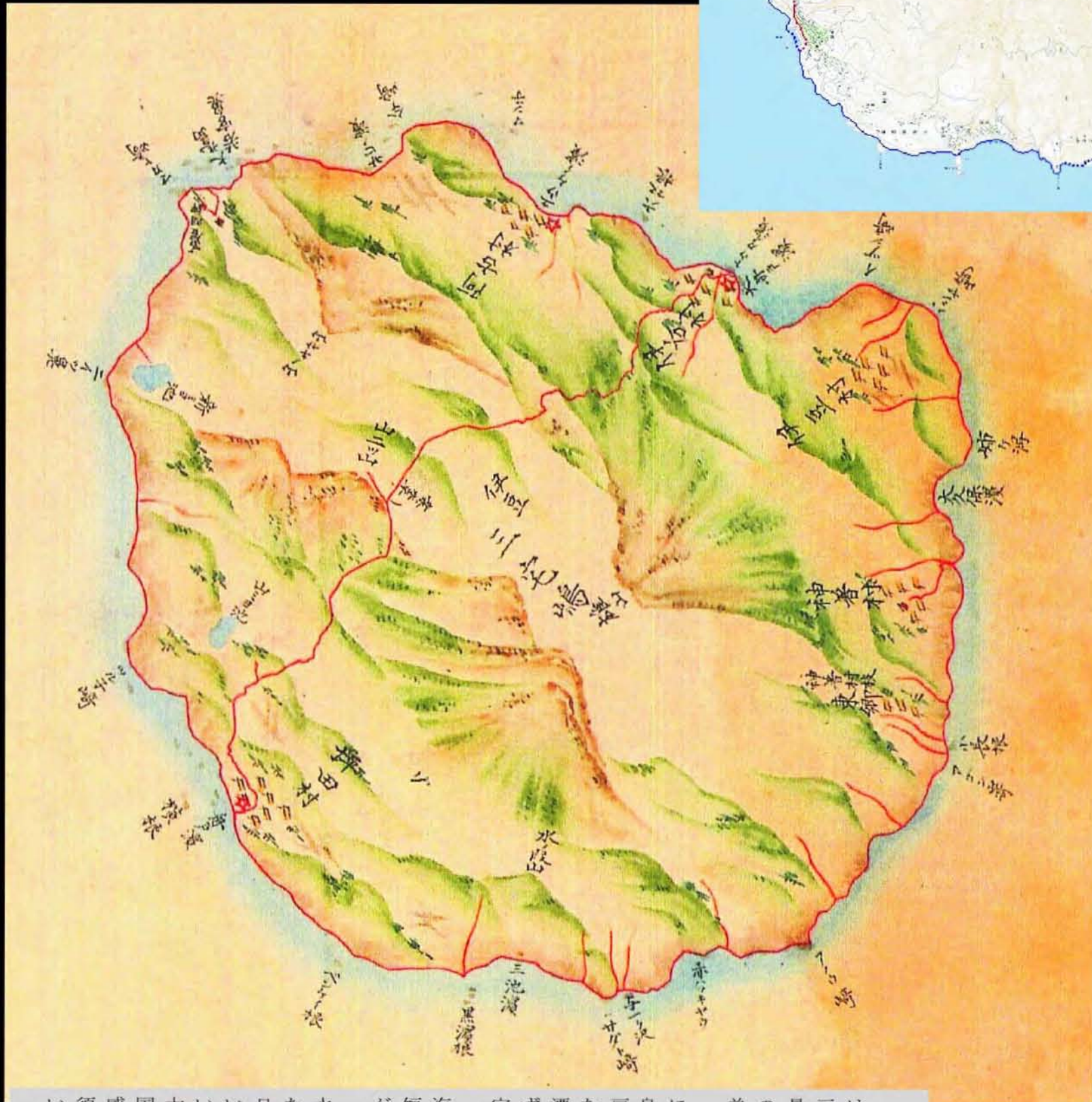
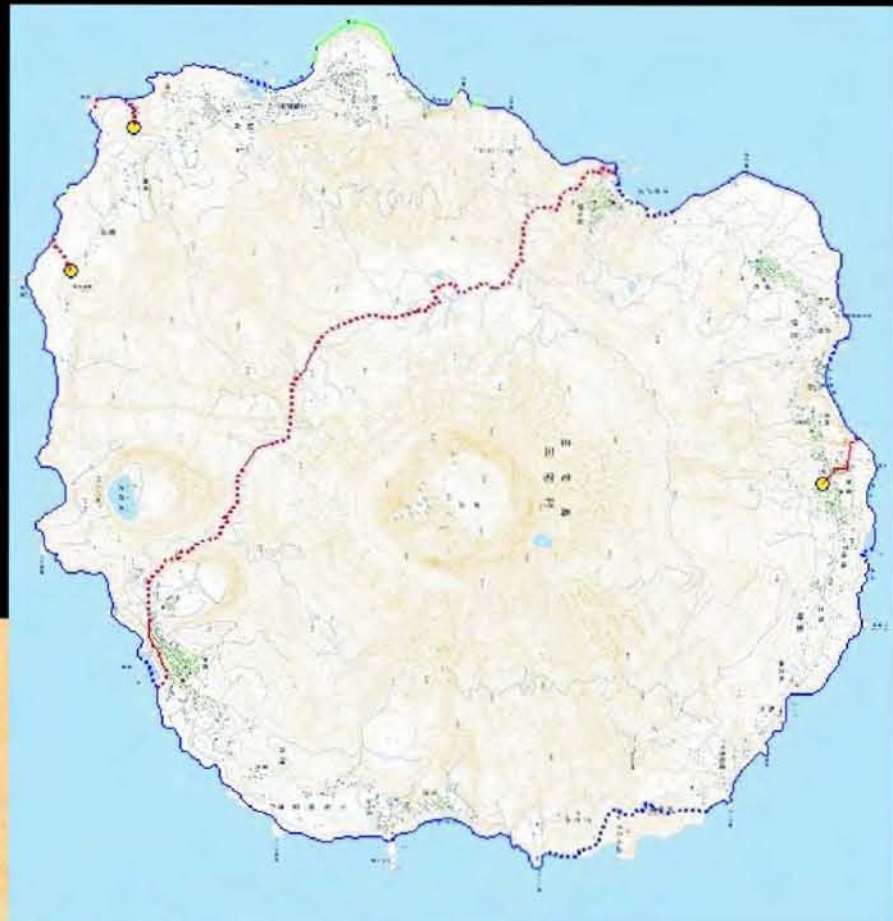
ニュース・お知らせ

ニュース・談話室・新入会員紹介・会員便り・
会報アンケート調査結果 ほか

編集部 44

表紙解説・伊能忠敬ゆかりの地めぐり 星埜由尚

伊能図の旅



大図第一〇四号より 三宅島

伊能大図第104号三宅島の部分
「国会図書館蔵」から転載）

右上
「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」
(東京カートグラフィック株式会社
猪原紘太氏作成)

両地図とも右が北

文化十二、十三年の第九次測量は、伊豆七島を測量し、その後伊豆半島、富士山麓、関東西部を測量するものであった。忠敬は老齢のため参加せず、天文方下役と内弟子により測量作業は行われた。伊豆七島の測量は、まず三宅島に渡り、一部を測量したのち八丈島に渡って測量し、再び三宅島に戻って測量を完結させるはずであったが、三日三晩漂流し三浦三崎に漂着した。しかし、それにもめげず、三崎から三宅島に渡り測量を完結した。

大図を見ると、朱の測線のほか、海岸線に直行する方向に引かれた短い朱線が多数見られることに気がつく。これは河川である。

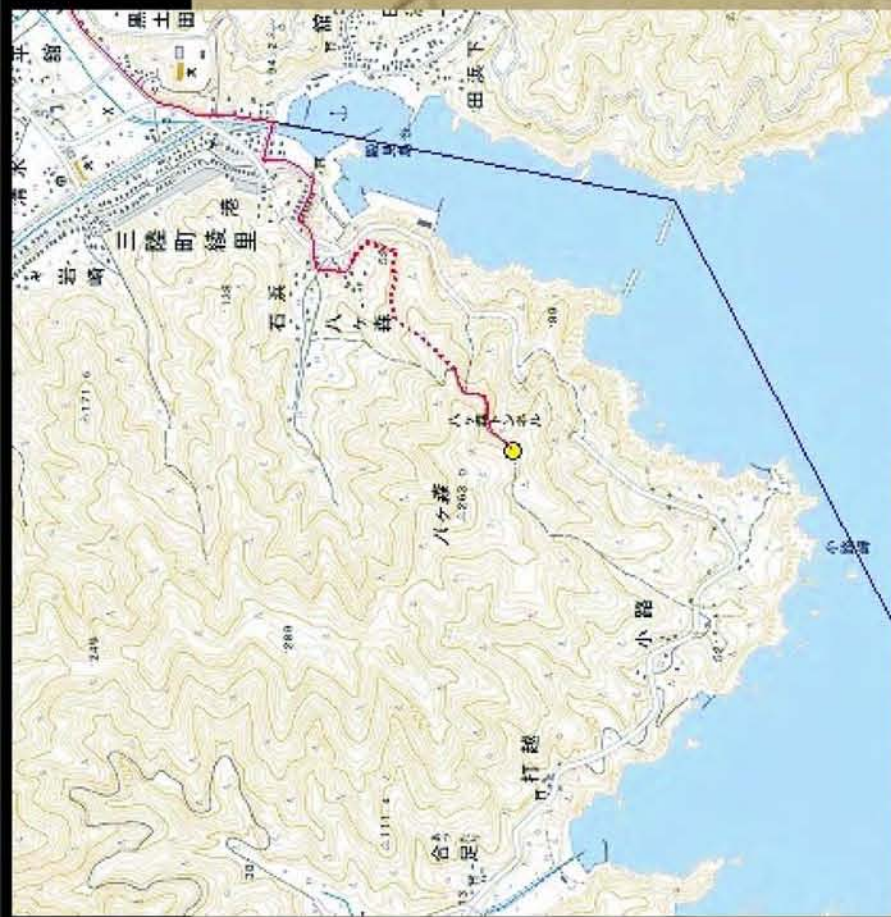
三宅島は火山で火山砂礫など透水性の良い堆積物に覆われているため、普段は枯川が多い。「測量日記」にも「川水無」と記されている。そのことを示すため朱で描いたのであろう。但し、アメリカ大図では黄褐色に描かれており、国会大図の朱は、やや行き過ぎの感もある。国会大図でも、第二図須坂付近の水無川は、黄褐色に描いている。(星 塾)

綾里付近

伊能測量の動機は、子午線一度の長さを知ることであったことはよく知られたところだが、蝦夷地へのロシア艦船の来訪など北辺をめぐる幕府の危機感がひとつの契機であったことも事実であろう。この図は、そのことを物語っているのではないかと思われる。

「測量日記」には、忠敬と平山郡蔵、伊能秀蔵が「唐船看所」から所々測ったと記され、大図には、「唐船番処」と注記され測線が延びている。

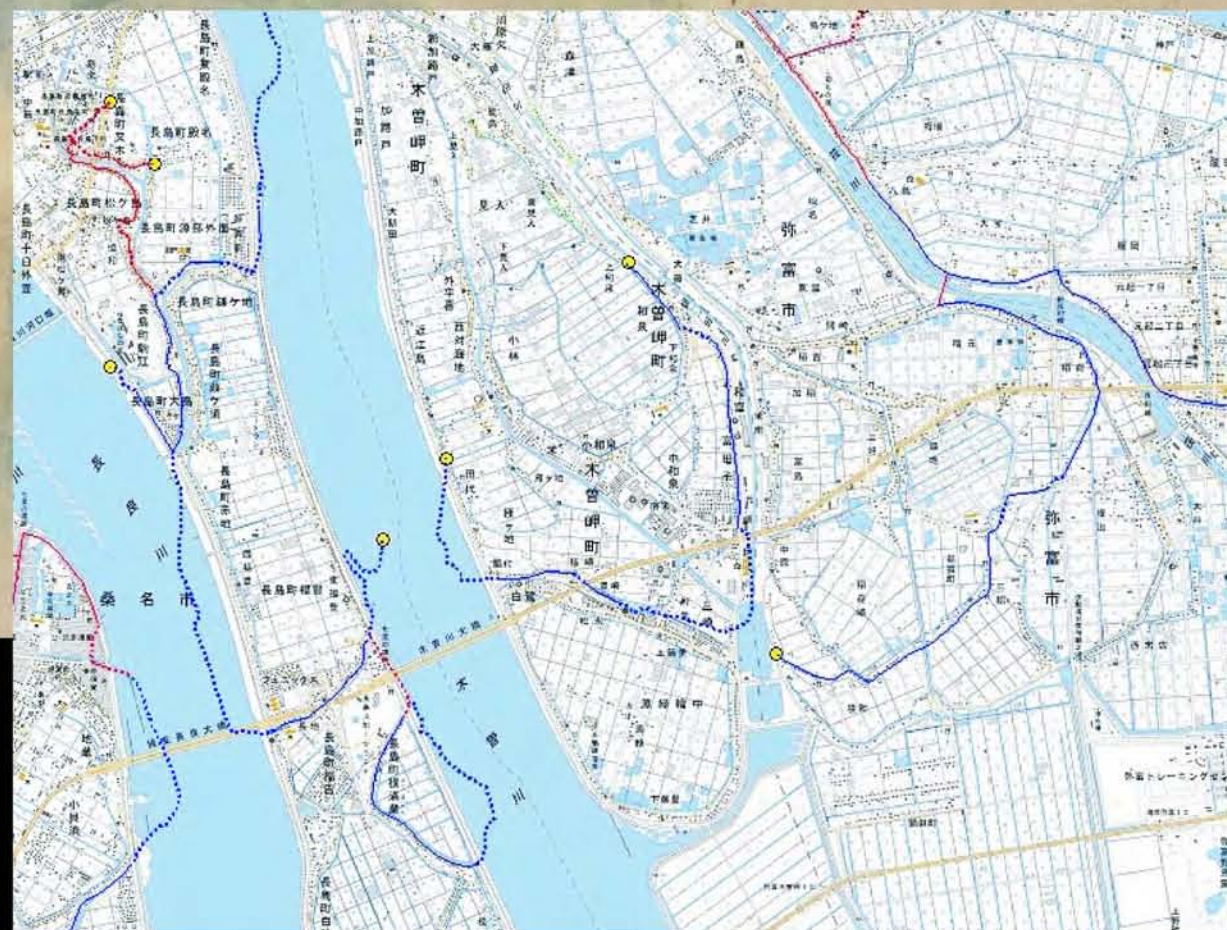
三陸沿岸の測量は、海中引縄によるものが多く、峻険な海蝕崖のため、海岸線の測量ができなかったところが多い。それにも拘わらず「唐船番処」をわざわざ測量しているのは、「唐船番処」を測量する必要があったからであろう。「唐船番処」は、おそらく伊達藩が設けたものであろうが、その所在地についてはよくわからないが、八ヶ森の中腹にあったものと思われる。一方、永寄濱からの綾里までの海中引縄測線は、長さ3kmを超えている。どのように縄を引いたのであろうか。（星埜）



木曾川河口

尾張国と伊勢国の国境を流れる木曾三川は、輪中で知られた大河である。大図には、河口の三角州の様子がよく描かれている。三角州の中でも開墾され新田となった所を測量している。新田の先には、州が多数描かれており、輪郭をぼかし、青い点描が施されている。木曾川の河口には、蘆華の生い茂った泥質の未利用地が広がっており、そこには足を入れることができなかったであろう。

新田の地名は、地形図を見ると現在もその地名が残っており、それをたよりに現在の地形と比較すると、筏川、鍋田川は、ほぼ現在の河流と同じであるが、加路戸川は木曾川本流に当たる。長良川は、大図では木曾川に合流しているが、現在は、掛斐川と併流して桑名で掛斐川に合流する。「測量日記」には、川を渡り、川幅を測ったとの記事が見られるが、測線は川で途切れることもあり、行き止まりの測線などからも低湿地での測量の苦勞の跡が見える。木曾三川は、日本有数の制御の困難な河川で、伊能図を見ても先人が新田を開発し、治水に苦闘してきたことが偲ばれる。（星埜）



木曾川河口（伊能大図第129号木曾川河口の部分 アメリカ議会図書館蔵）『伊能大図総覧』から転載）
右下：「国土地理院地形図と伊能測線の重ね図」（東京カートグラフィック株式会社猪原紘太氏作成）

伊能図はどう利用されたか

— その1 江戸時代 —

鈴木 純子

はじめに

完成した伊能図が江戸時代から明治初期にかけてどのように利用されたかについては、日本の地図作成史の上からも重要なテーマであるが、伊能家文書など作成者側の史料とくらべて史料も散在しており、わからない部分が多い。

明治期における活発な参照、利用や、幕末期の「官板実測日本地図」、イギリスの測量艦への贈与などが知られているものの、それらは個別に言及されるにとどまり、全体像はなかなかとらえにくい。近年存在が明らかになったいくつかの写本（二〇〇八年九月例会報告）や、記録などの情報もまじえながら、現在わかっていることをまとめておきたい。明治期に関してはスペースの関係もあり、稿をあらためることとする。

一 伊能図は幕府の秘図であったか？

伊能図が幕府の秘図であったのかという点についてひとことふれておこう。伊能忠敬と伊能図に関する基本文献の一つとしての保柳（一九七四）は、上呈された伊能図の利用について、幕府内部に限定されたとはしながらも、海防や地誌編纂の資料としての伊能図の利用はあったはずであり、その実証が必要であるとし、むしろ一定の利用の可能性を示唆している。幕府内部における利用に終わっていたことが、「幕府の秘図」という、秘密性のやや強調されたイメージにつながっているようである。シーボルト事件が影響している面もあるだろう。

幕府が伊能図についてことさら機密扱いをしたかどかについては今のところ確認はできないが、諸侯の依頼にこたえて作られた伊能図員による写本が残っていることなどからみても（渡辺一九九六・一九九七など）、

そこまでのことはおそらくなかったのではないかと思われる。商業出版とのかかわりについてすら、忠敬自身の念頭には地図完成後の出版もあったことを思わせる書状の下書きが残っている（日本経済新聞 二〇〇四）。断片が残るのみで詳しい事情はこれだけではわからないが、出版などもつてのほかという状況ではなかったようだという推定は可能であろう。進展がなかったのは最終図完成前の忠敬の死去や、当時の市井の需要には一般的な正確さという点で十分需要にこたえられる長久保赤水の「日本図」があったことなどによると思われる。

正確な実測図ではあっても、測量しなかった部分は描かれていないという特色をもつ伊能図は、そのままの形で商業出版にはなじまなかったという面もあっただろう。のちの『官板実測日本地図』は別として、江戸期の出版図への伊能（間宮）図の利用の例として知られるのは、安政六年（一八五九）刊の、松浦武四郎『東西蝦夷山川地理取調図』である。

二 伊能図利用の概要

広く利用の局面にふれるため、視野がさまざまに移動することから、まず、全体の流れを俯瞰した上で、個別の事情について紹介することとしたい。利用の早い例として佐渡における大図の利用がある。

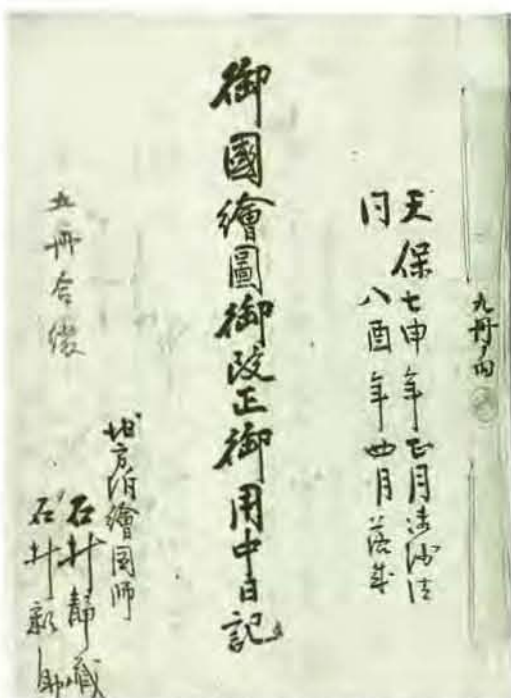


図1 「御国繪圖御改正御用中日記」表紙（佐渡市教育委員会蔵）

佐渡奉行所における『佐渡志』の編纂、幕府の命による天保期の佐渡国絵図などへの利用である。天保国絵図は天保七〜八年（一八三六・三七）のことで時代もかなり下るが、『佐渡志』は文化一三年（一八一六）に完成しており、利用例としては早い。したがって利用された図の原図は文化元年上呈大図ということになる。また、嘉永はじめごろの、江戸湾の海岸防備の資料としての利用の形跡も残っており、これも文化元年上呈大図をベースにしたものと考えられている。

このうち、安政ごろからは最終上呈小図の写本作成の記録がみえはじめ、文久元年（一八六一）、イギリスへの小図写本譲渡、開成所による『官板実測日本地図』出版などに続く。イギリスに小図写本が譲渡されるきっかけとなった測量艦アクテオン号ほかによる日本沿岸の測量活動の翌年に行われた、幕府海軍による伊勢湾沿岸の測量においても伊能図（おそらく大図）が基図として使われた可能性が高く、また、この測量にも参加している福岡金吾が慶応三年（一九六七）に幕府に提出した「沿岸測量につき答申」にも海岸線についての伊能図利用を提起している。

三 佐渡奉行所における大図利用

「天保七申年正月御沙汰／同八酉年四月落成／御国繪圖御改正御用中日記」「地方附繪圖師／石井静蔵／石井彩助」（佐渡市教育委員会蔵 相川郷土博物館）に、幕府による天保期の国絵図改訂作業にあたった佐渡奉行所の地方附繪圖師石井静蔵（夏海）とその息子彩助（文海）の作業経過が記録されている（図1）。ただしこの日記は、のちに修正・増補したもので逸失部分もあるという付記がある。この記録から国絵図改訂にあたっての伊能図利用とその図の由来を知ることができる。

天保六年一二月、幕府勘定所は官庫収蔵の国絵図改訂についての通達を、関係各大名（絵図掛・絵図元）に下す。一国全域が天領の佐渡は在府の佐渡奉行

利用の好条件であり、島がちようど大図一枚におさまる大きさだったことも便宜であつたにちがいない。実際、何枚もの大図を組み合わせなければ地域全体

をカバーできないとすれば、各地方における利用は現実的でない。しかし、最終上呈図でないとはいえ、同時代に伊能勘解由の測量図、天文方の測量御用による

地図という認識のもとに伊能図が使われたことが記録に残っていることは興味深い事実である。伊能測量の地方での認知度を示すひとつの例ともいえよう。

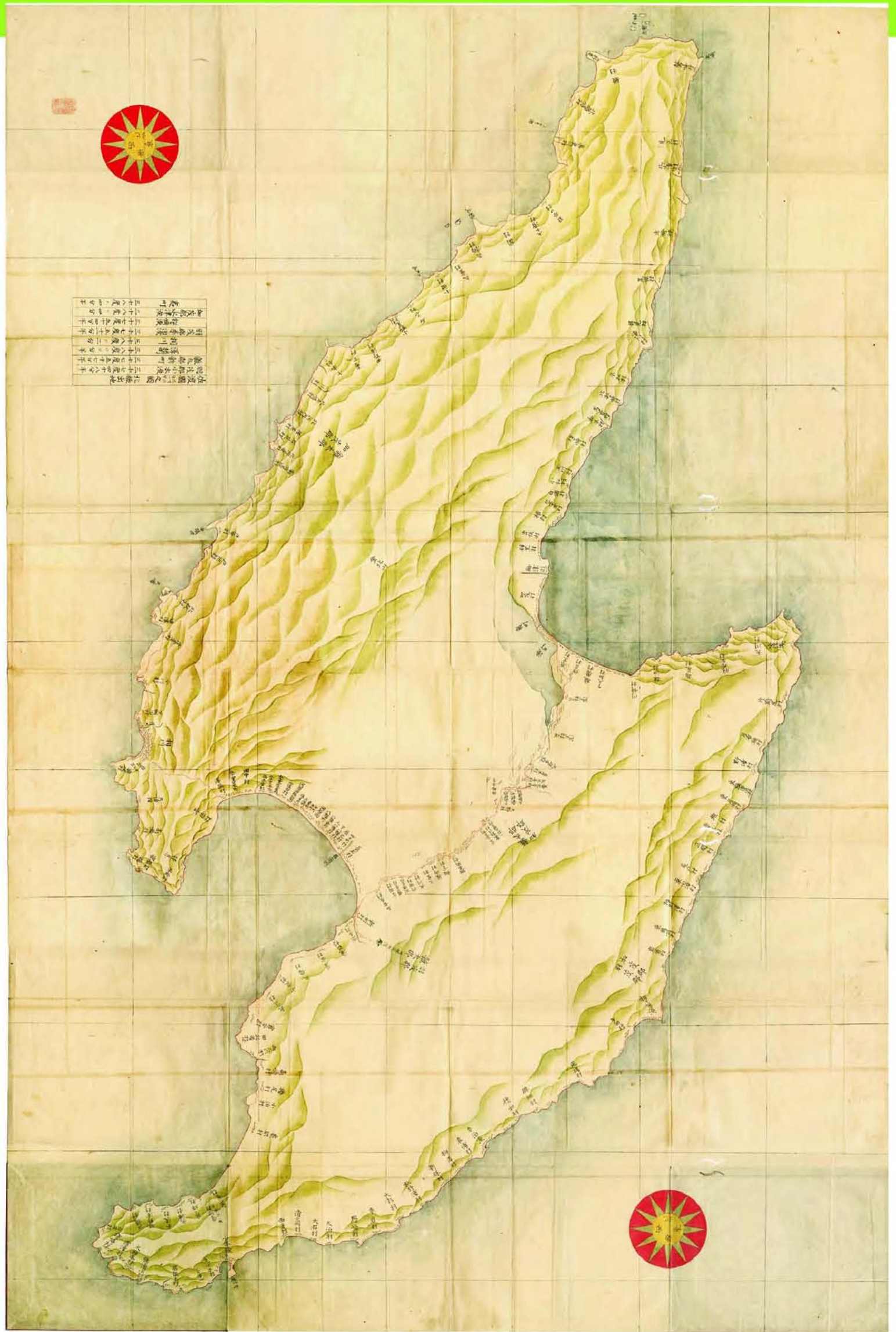


図3 「佐渡国三寸六分壹里之図」 (ゴールデン佐渡株式会社所蔵、画像は同社提供)

四 江戸湾海防と伊能図

早稲田大学図書館所蔵の「海岸要地之図 武蔵相模 安房 上総下総」(甲・乙二鋪)は江戸湾沿岸を描く大図の集成写本である(図4・6)。この図の存在は藤原(二〇〇七)によって報告された。早稲田大学図書館においては、第二次測量後の中図、文化元年上呈の沿海地図小図の所蔵が知られていたが、本図についてはそれまで知られていなかった。目録カードには伊能図の写本であると注記されていたが、標題が伊能図のものとは異質なため看過されてきた。データベース構築のための点検により所在が明らかになったものという。藤原報告(前掲、以下報告とする)によれば、本図は二鋪からなり、それぞれ折りたたんだ状態の上下に厚手の渋引の表紙を付し、その中央に「武蔵相模・安房・上総下総 海岸要地之図 甲(乙)石川控」と墨書した題簽を貼付、甲・乙二鋪がまとめて一つの帙に収められている。報告には図の特色として ①鋭角的な朱の測線の上に、道路・海岸線をあらためて墨、彩色で描く ②針穴本(ただし裏打ちのため不鮮明) ③二枚続きだがコンパスローズはない ④描画は沿岸部のみ ⑤地名には大図と異同あり ⑥方位線がある ⑦江戸湾防備・海上交通関係情報が豊富という七項目があげられている。また、江戸周辺の描画内容などから原



図4 海岸要地之図表紙

図は文化元年上呈大図であろうとしている。

二枚続きの甲は江戸湾奥、乙は三浦半島、房総半島南部をおさめ、甲は縦図、乙は横図でL字型に接続する。二分割の図であるが大図の図割とは異なる。これはコンパスローズの不在ともつながるだろう。地図は北が上でなくほぼ北東を上にしており、上端中央部は船橋辺にあたる。方位表示としてコンパスローズが役立つはずであるが。

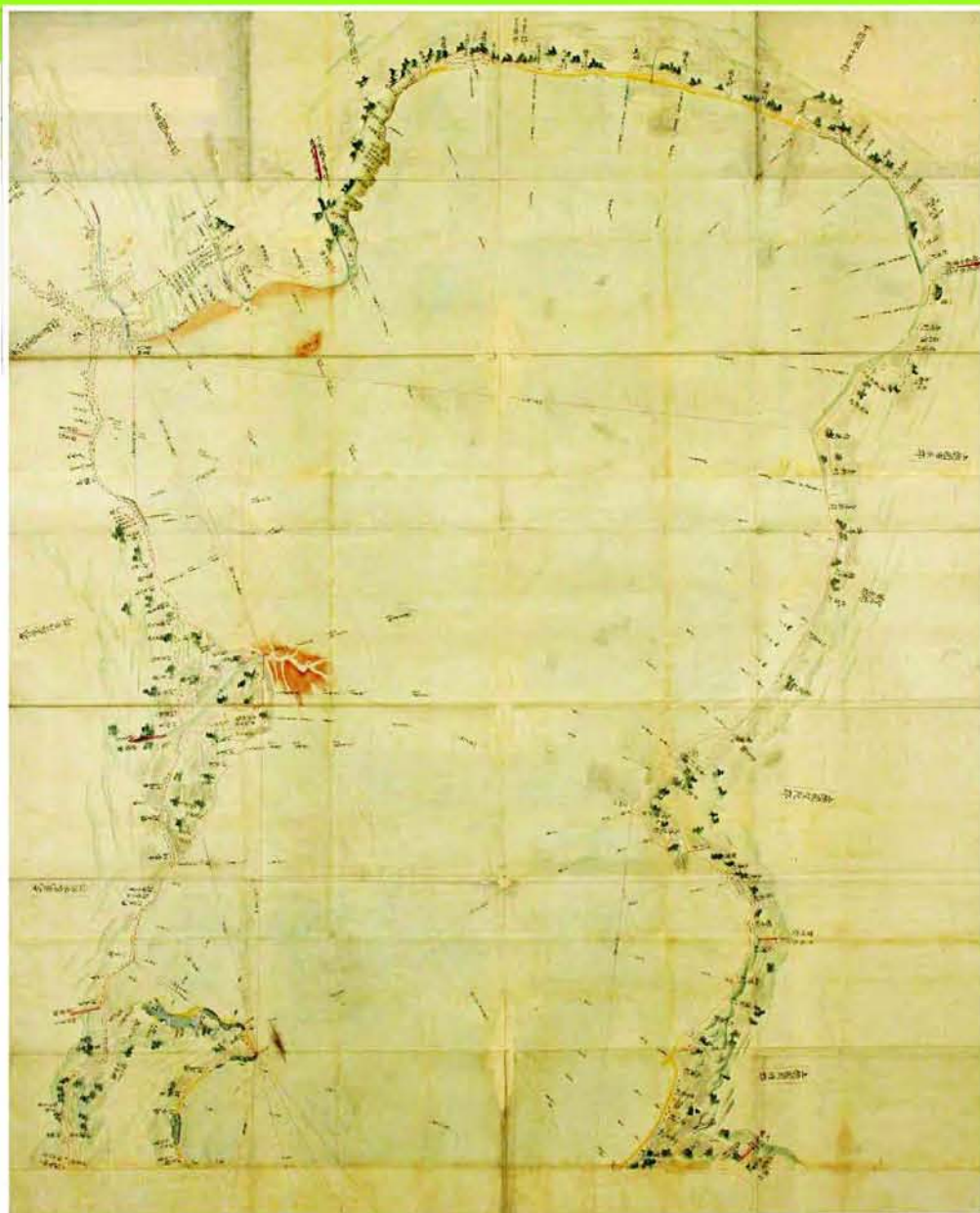
筆者らも一度この図を閲覧する機会を得ているものの、詳細な検討まではできていないが、それぞれの特色について簡単にふれておこう。①の測線および海岸線については伊能図の表現にならっており、墨、彩色であらためて描かれているとされる海岸は測線が内陸を通る部分や崖の部分などで、海岸線を通る測線は測線そのものが海岸線を表している。沿岸部に限られる描画もこの地域では文化元年図の特色である。地図の基盤である測線が伊能図のものであることは明らかであり、景観表現なども伊能図の様式を保っているが、原図をそっくり写しとることを第一の目的としたものではないようだ。⑤以下の特色は図の作成目的と結びついたものである。方位線についてはこの図にみられる朱の直線は伊能図本来の方位線ではなく、要地間の距離を表示するための見通し線で、方位の表示は距離だけが記されている。砲台、陣屋、湾内の水深記入など江戸湾防備の基本情報は本図の大きな特色であり、報告ではそれらをリスト化した上で、海防関連施設の配置は嘉永元年(一八四八)末ごろのものであるとし、伊能図がこれらの事実を投影させるための実用的な地図として使われているという点を指摘する。

寛政年間ごろにはじまる外国艦船に対する江戸湾の防備策は時期を追って変化する。弘化二年(一八四五)には、海防掛が設置され、防備体制は嘉永直前の弘化四年に、川越(相模側)、忍(房総側)の二藩による分担から、相模には彦根藩、房総には会津藩を加えた四藩体制へと強化された。幕府の海防政策にとつて、この種の図の必要性がとりわけ高まった時期といえる。

この時期の幕府海防関係のイベントに、嘉永三年(一八五〇)、勘定奉行石河政平(土佐守 海防掛)、目付本多隼之助・戸川中務小輔、鉄砲方井上左太夫・田付主計による巡察「近海御備向見分」がある(勝海舟 一八八九)。巡視役にはさらに西丸御留守居筒井

紀伊守、御留守居番次席吟味役御勘定吟味役佐々木循輔が追加された。各巡視役が配下を引き連れる大規模なものである。海岸の形勢、水路の浅深等に応じ、また砲撃の効果も勘案して砲台、屯所などの適正配備をするための調査が目的であった。本図の特色のひとつである海の浅深もかわっている。見分の進め方について鉄砲方の井上左太夫・田付主計が提起した協議事項とそれに対する回答(下げ札)に、絵図にかかわる部分がある。浅深測量の技術者や船、水主などの準備要請に対し、下げ札は「近海浅深の義は、先達て分間絵図面へ書き加へ、伊勢守殿へ差し上げ置き候間」とし、全域ではなく、新たな台場建設が必要などところのみ測量するようという。「右分間絵図面御有合わせの品御渡しこれありたく御写し取り、返却のつもり」に対しては「分間絵図面、勘定所扣の分、差し遣わし申すべく候」と、そして絵図引きのできるものを召し連れたいという提起には吟味方下役、普請役のなかで間にあわせるようにという。巡視の報告書中には「すべて海岸出崎々、または高台の様子、海底の浅深、その場所所にていちいち分間絵図面に引合わせ」などと、現場での地図利用もうかがえ、各備場の詳しい所見を記した上で、「これにより実測地図写、浦賀奉行差し越し候書付、絵図、誠丸家来差し出し候書付、絵図、富津洲先の絵図、ならびに大砲そのほか打方見分業書ども相添へ、この段申し上げ候。以上。/戊八月」と結ぶ。

「分間絵図」「実測地図写」などとしている地図は伊能図で、本図とかかわるものである。また、水深測量の例として富津洲先の記録もあるが、砂洲の名称は本図のものと一致する。藤原「報告」でも指摘される地名の異同部分の一例といえる糺谷と羽田の間の鈴木新田は「大森町打場」取建てとの関係で巡察対象になっ



ているなどの点からみても、本図が前記の復命書にそえられた「実測地図写」の写しである可能性は高い。

なお、石河土佐守の配下に御普請役見習石川忠之助という名がある。表紙の石川控という記載とつながるかどうかが確認できないが、存在だけ指摘しておく。

最近、国立国会図書館にもこの図と同じ範囲を描く『寛政度江戸近海測量全図』が所蔵されていることがわかった。題簽に「寛政度／江戸近海測量図／雅楽堂蔵」とある。早稲田の図が二枚組であるのに対し、この図は二枚を接着したL字型となっている。北東を上とし、相模は鵜沼、上総は花園村（早稲田図は江見村）辺までと、収録範囲もほぼ同じ、朱の測線、山地、村落などの表現も同様で、伊能図では鳥瞰図風に描かれ

た猿島に平面図の懸紙をする点も共通するが、砲台などの記入は猿島の大筒御備場、池臺・竹ヶ岡砲台、鶴崎の常夜灯、城が島の簀堂などごくわずかで、水深や見通し線の記入も全くなく、村名の村が省かれ、小判型の枠内に書かれているといった変形はあるものの、ほぼ伊能図どおりの写しであるが、地名については、

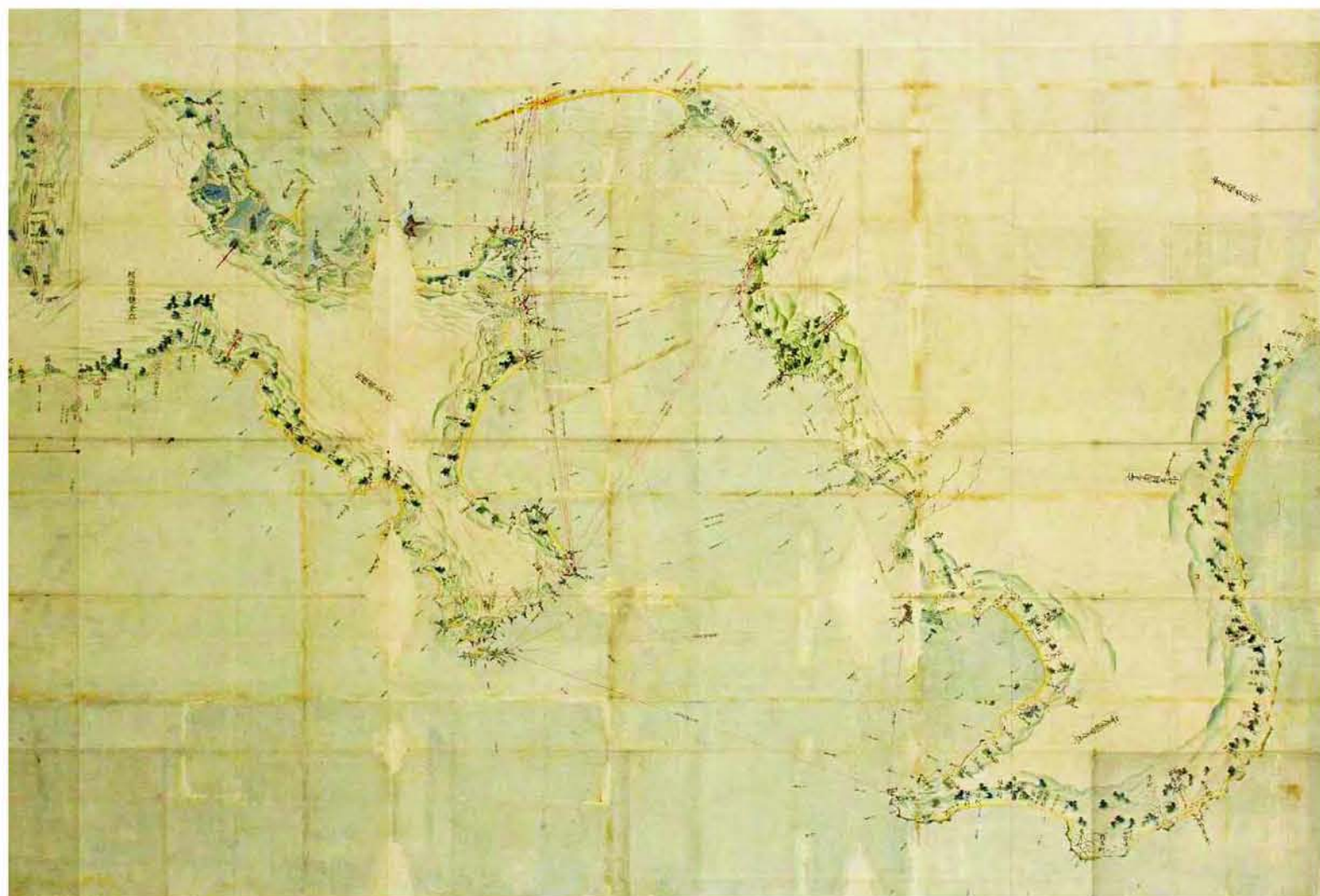


図5 海岸要地之図 甲（上）・乙（下）（早稲田大学図書館所蔵）

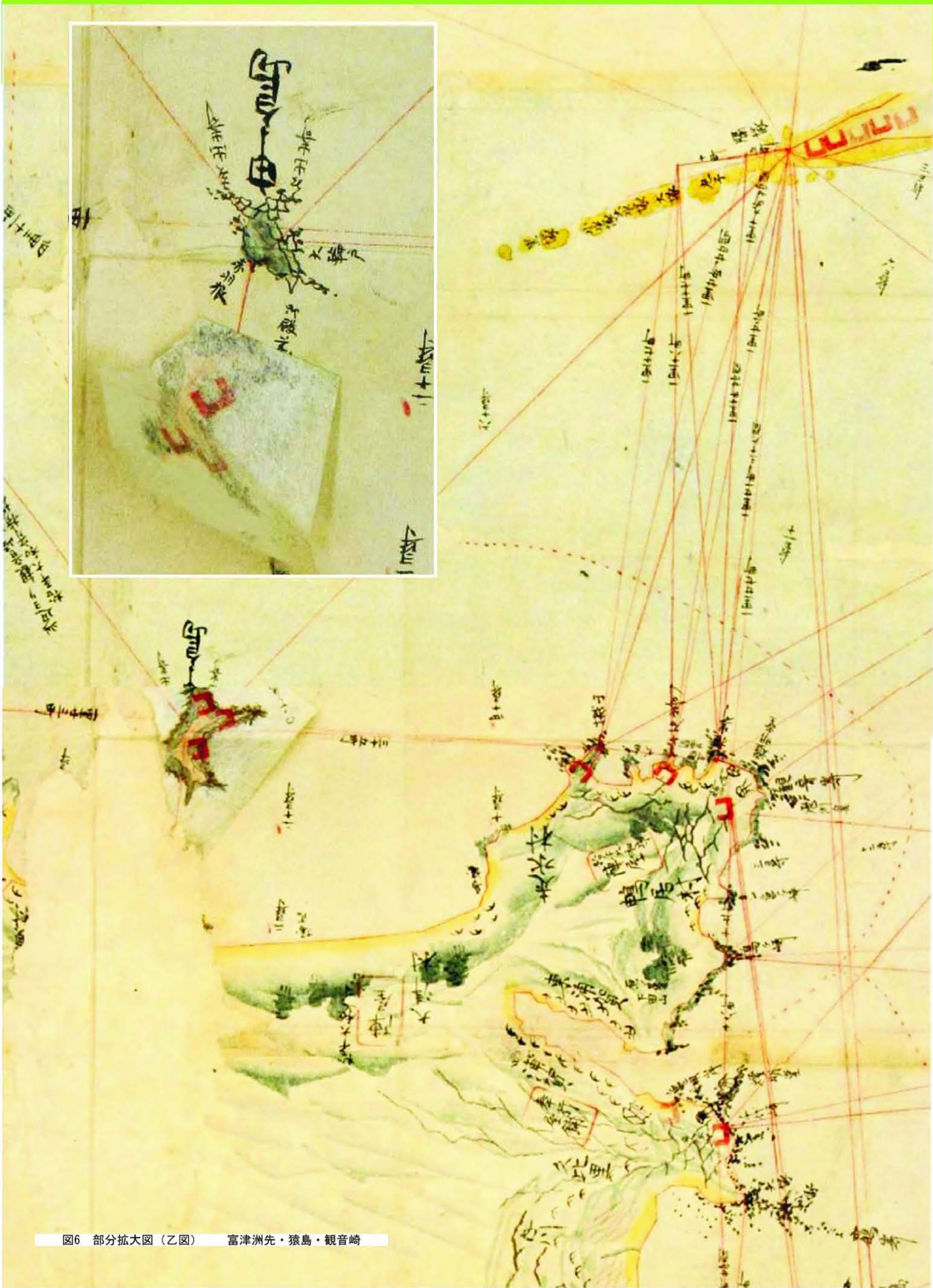


図6 部分拡大図（乙図） 富津洲先・猿島・観音崎

伊能図にはない旗山・十石崎・観音崎や、房総半島南端部州崎の岬の南岸、伊戸村、相濱村間の村名増補など、早稲田図とほぼ共通している。両図は共通する原図によるものと思われる。しかし、この図も明治三三年の購入資料で、作成の経緯につながる由緒は知らない。早稲田図には江戸市内に深川黒江町・厩局・浅草御門などの記載があるが、国会図にはない。旧蔵者雅楽堂は杉浦丘園か。杉浦丘園（三郎兵衛 一八七六、一九五八）は京都の大呉服商大黒屋第一六代、好古・蔵書家として知られる。

以上二図のほか、藤原（前掲）が言及する「豆相武房総沿海図」（筑波大学図書館所蔵）、「武相豆房総海傍之図」（文政二年、鷹見泉石写 明治大学図書館所蔵）の二図は大きさ、構図のほぼ共通する沿海地図中図の編集写本で、前者には後者にはない台場の記載があるという、既存の台場に加えて、弘化四年（一八四七）設置の相模国千駄崎、安房国大房崎台場が新設予定として記されているという。内容としては前記二図にやや先行する図ということになる。後者は測線や伊能図起源の方位線など伊能図の特色をもつが、房総半島内陸部の河川、村などが補記されている編集図である。海上の距離、航海上の注記、番所など湾内の記載事項が多い。いずれも海防とのかかわりを示している。鷹見泉石の写本には「文政二巳卯年春寫鷹見泉石」との識語があり、早い時期の写しである。

ここでみた図は、伊能図そのものを写し伝えることを目的としたというより、海防という時代の要請のなかで、主題の位置情報の確認や可視化のための基図として伊能図が利用されているという、すぐれて近代的な基本図利用の形態を想起させるケースとして注目される事例である。

五 開国期の小図写本

開国から明治維新に向かうこの時期には最終上呈小図の動きが目立つ。前の二件、佐渡、江戸湾での利用

がいずれも文化元年上呈の沿海地図であったのと対照的である。

安政二年（一八五五）、長崎に開設された海軍伝習所には、江戸から取りよせた小図があったという。佐野常民の東京地学協会における講演「伊能忠敬翁事蹟」（明治一五年九月）に、次のようなくだりがある。よく知られた部分ではあるが、保柳（前掲）から引用する。

「これより翁の測量図につき、余の實際感觸したところ、その功勞の死後にあらわれしものとを述べし。翁が測量図の大成は、前述のごとく六十年前なるも、幕府に上呈したる原図は、東京紅葉山の書庫に、その副図は勘定所に秘蔵して、かつて江湖に伝わらず。いまを距る約三十年前、オランダの軍艦崎陽に來航したるときにあたり、はじめ海軍伝習の挙ありて、永井尚志そのことを督し、勝麟太郎、矢田堀景藏等來學せり。當時、永井の請求によりて、わずかにその小図の写本を東京より送り來たり。時に余が旧藩鍋島家も、また航海術の必須なるを知り、藩士をしてこれを學ばしむ。余、このことに関わるをもつて永井等と往來し、偶々その図を一見するを得たり。因つて百方懇請してこれを借り、同藩の図手六、七名をして、日夜これを謄写せしめたり。爾後、余、藩命を承て海を航するにあたり、該図によつて近海の航路を定るに、島嶼の形状、岩礁の位置等を掲出すること、確實精詳にして、常にその力に頼り、暗夜燈火を得たるの思ひあり。深く翁が図の精なることに敬服し、その功の大なるに驚嘆せり。のち幕府これを刊行して世に公にするに及んで、内国の航海者、広くその恵みを被るにいたれり……」

佐野常民は旧佐賀藩士で、藩の近代技術育成にあたり、海軍伝習にも参加、維新後、大蔵卿、元老院議長など歴任、永井尚志は幕臣、海防掛などをへて、海軍伝習所では総監をつとめた。後年の口述ではあるが、江戸時代における伊能図利用の例であり、幕臣のひとりとしての永井が伊能図の存在と価値を十分に認識していたことともに、正本、副本のほかに小図の写本が

作られていた（または伝習所用に作られた？）こと、佐野の尽力により佐賀藩でもその写しを作ったことなど、重要な情報を含んでいる。

万延元年（一八六〇）には、蕃書調所（のち文久三年開成所と改称）出役絵図引が軍艦奉行の要請による「御国測量図」の写しを作成、ついで文久元年（一八六一）には、外国掛目付の要請による同図の写しを作成した（倉沢 一九八三）。

『開成所事務一』³⁾中に、外国掛目付から老中あての文久元年二月付の申出、

「御国測量図写取方之儀二付、昨年十二月廿六日申上候趣ハ、御国周海御警衛、又ハ、水陸遠近里程等取調候ニハ、測量図手許ニ差置不レ申候てハ時々差支有レ之候間御入用ハ御軍艦奉行取計候振合を以、右絵圖為二写取候様仕度段、申上置候儀之処、御軍艦奉行ハ、蕃書調所出役絵圖引江為二写取一候、同様にこちらの分二付、右振合を以為二写取一、私共江相廻し候様、古賀謹一郎江被二仰渡一被レ下度奉レ存候、依此段申上候、以上 二月 外国掛御目付」

があり、伝達された古賀から老中への承知の文書が残る。「御国測量図」とは伊能図のことである。図の種別については明示されていないが、同じ時期に始まった官板実測日本図（小図）出版に関する文書にも伊能忠敬沿海実測図、伊能勘解由実測図などあるなどの文脈から小図とみてよいだろう。

蕃書調所絵図引（のち画学局）は天文方詔官を務めていた柴田（新発田）収蔵が安政三年（一八五六）絵図調出役となり、同四年には川上万之丞（寛、冬崖）、同五年前田又五郎が加わっている。柴田は世界地理の知識と地図作成の技能を評価されて天文方に任用され、山路彰常の「重訂万国全図」（高橋景保「新訂万国全図」改訂版）編さんに参画した。川上には伊能図にもとづく「大日本地図」（明治四年）、前田には「亜西亜略圖全」（幕府陸軍所 慶応三年）といった地図作品が知られる。柴田の病死（安政六年）後には、宮崎（の

ち宮本）元道（文久年間の小笠原調査に参加「小笠原島真景図」）、さらに島霞谷などが加わった。現存が確認されている文政四年小図の写本はつぎのとおりである。

- ① 東京国立博物館所蔵の三枚セット
高橋景保が昌平坂学問所に献納
- ② 英国海事博物館所蔵の三枚セット
文久元年英国海軍測量艦長の要請（駐日公使オールコック経由）により幕府から進呈
- ③ 東京都立中央図書館所蔵の「本州東部」「西南日本」大槻如電旧蔵で裏面に「此者阿部勢州公執政時天文台に命じ写せしもの由、大槻先生より承り候俟記し置くもの也」との記載
- ④ 神戸市立博物館所蔵の「蝦夷」「西南日本」
- ⑤ 阿部正道氏所蔵の「蝦夷」

阿部家が蝦夷地経営に責任をもった時期の作成、明治になって返還された（所蔵者談）

一方、小図写本の存在をうかがわせる記録としては、前掲の長崎および佐賀の二セットと、万延元年、文久元年に軍艦奉行、外国奉行が蕃書調所出役絵図引に作成させた各一セット、都合四セットが知られる。

現存する小図の写本はいずれも精細で、幕府関係機関で作成された可能性が高い。しかし、①が伊能グループ（であろう）、③が天文方作成と伝えられるのは、成立の経緯は不明で、右の記録と現存図がどうつながるかはわかっていない。筆者なりに考えをめぐらせてはいるが、発表できるレベルには達していない。英国海軍測量艦への写本進呈への顛末については広く知られているのでここでは省略するが、当該写本の来歴についてはなお追究の余地があると考えている。対外関係を軸として激動する開国期、諸外国対日本という意識から国土の正しい認識、正しい地図、「実測図」への要求が高まり、コンパクトな小図が相次いで写されたことが特筆される。

文久元年八月一日には、オランダの総領事デ・ウィットからも幕府に対し、航海用としての伊能忠敬沿海実測図

附与が要請されている。（「維新史料綱要データベース」⁴⁾ 次章参照）

六 『官板実測日本地図』の刊行

『官板実測日本地図』は伊能小図をもとに、一部他の地図による増補を加えて、幕府開成所が編纂、刊行した木版刷の日本全図で、「畿内 東海 東山 北陸」「山陰 山陽 南海 西海」「蝦夷」および「北蝦夷」の四図からなる。刊記がないため刊行はあきらかでないが、慶応元年と推定されている（福井一九八五・高木二〇〇一・二〇〇二）。初版については書肆には出さず、開成所に願ひ出たものに払い下げるといふ方式がとられた。編纂過程における、北蝦夷（サハリン島）国境の取扱、伊能図に含まれない無人島（小笠原）、琉球などの増補をめぐる開成所頭取古賀謹一郎と幕閣のやり取りや、再版以降を含む書誌の変遷などについては本誌連載の高木（前掲）、また、同氏の近著『近世日本の北方図研究』に詳細に報告されているので、参照願いたい。

前章をデ・ウィットの要請で終わったが、維新史料綱要はこの件につき次のように記す。

「文久元年八月十一日蘭国総領事デ・ウィット、幕府に対し、航海用として伊能忠敬沿海実測図附与を請ふ。尋で「十七日」幕府翻刻してこれを贈るべきを答ふ」

ここからさらに「維新史料稿本」⁵⁾の記事（原本「続通信全覽」）にあたると、ウィットは英国海軍への地図（伊能図）贈与を引き合いにだして、自国にも必要であると贈与をもとめている。これに対する八月十七日の老中久世大和守・安藤対馬守の返書は、要求に理解を示しつつ、我国沿海測量図はイギリスに渡したもののほか余部がなく、速やかに写すこともできかねるので、「航海便利の爲め彫刻いたし候様此程其筋に命したれば右成功次第差贈り可申と存候」という。そして八月だけで日付はないが、この返書と連動する「和蘭コンシユルゼ子ラールより沿海實測圖御貸渡相願候儀に付申上候書付」が開板の必要を上申する。長くなるが

伊能図をめぐる当時の雰囲気をうかがわせる史料として引用する。

オランダ総領事からの伊能勘解由著述の沿海實測圖要求について、先に英国軍艦に渡した振合もあつて応えざるを得ないが、「一体右圖は精細緻密にて外国入共信用仕候より追々、御渡方之儀等相願候儀に可有之候間御国内おゐても繰練所は勿論諸国商船等近海渡航仕候もの共まで針路之遠近暗礁之有無等巨細相分り候へは難險覆没之憂も無之運轉輸送之便を得候儀に有之将前段之通以後外國々より英蘭同様願出候節御渡し方御都合にも相成可申に付此程御目付より申上候趣も有之候間早々御開版相成候様仕度依之御返簡案列紙の通り取調私共一同評議仕此段申上候以上 酉八月 外国立会役々 外国奉行」

そして、この年（文久元年・一八六一）の九月には、大久保伊勢守、古賀謹一郎、妻木田宮が、実測図官板について老中あて、「実測図官板被二仰付一板下絵図追々写方仕罷在候処、右絵図面ニハ蝦夷北地の分四十六度ヲ限り」という伺いを発している。幕府が官板図刊行をきめた時期は不明だが、右のオランダの要請がスプリングボードの役割をはたしたことは確かである。機は熟していたというべきか、一か月後には作業が開始されているという即決ぶりである。

しかし、第一三鋪の彫刻は完成したものの、樺太の扱いが決まらないために元治元年（一八六四）九月にいたっても全体の完成に至らず、軍事・航海方面で特に強かった「この正確、精密な近代的地図地図を利用したい」という状況下で、第一三鋪については「此程中、陸軍所、御軍艦操練所御目付方等江、追々御断下之趣を以、数十部摺立相渡候」と、とりあえず先行配布がおこなわれたようである。こうした事情のもとで、「先般仰付」られた「実地緊要」の「精詳明了」な実測図官板を急ぐべきだという林大学守らの伺書に比べて、年末に至ってようやく、分界、領分等は入れないカラフト嶋も含む全四鋪の刊行と、前記のとおり、刊行はするが書肆等へは出さず、開成所に願ひ出

たものに払い下げるといふ決定が下されるという紆余曲折があった(福井 一九八五)。

よく知られているように、『官板実測日本地図』は慶応三年(一八六七)のバリ万国博覧会に出品されている。「徳川民部大輔歐行一件附録 卷十」⁶⁾の「博覧会出品皇国地図一件は、小栗上野介等による、慶応二年正月廿三日付の地図出品に関する上申ではじまる。

「西暦千八百六十七年第五月一日佛国都府於て博覧會之節御差廻し相成候様いたし度旨申立候品々之内御國圖之義は開成所おいて開板相成候伊能勘解由編述之實測地圖御差廻し相成候様仕度右圖は先年英國測量船江寫圖に而御渡相成候義も有之彼方に而も精微之段は賞賛いたし居候趣に付御差出相成可然と奉存候右之趣可然被思召候は、兼而摺立置候内に而鮮明之分相撰仕立箱等別段念入五部程早々御出来共江相渡候様開成所江仰渡可被下候依之此段申上候以上」

幕府が公式に出品した最初の万国博覧会で、徳川昭武が將軍の名代として参加した。博覧会用の「別段念入五部程」については、表紙、題簽、箱、紐など二通りの見積が残る。ほかに昭武携行の土産用として、かねて外国人からの要望が強い品として「実測図十五部」⁷⁾が加えられている。都合二〇部がこの時ヨーロッパに渡ったことになる。

昭武が国書を携えてフランス皇帝ナポレオン三世に謁見した際の贈呈品五種中に「実測日本全図」が含まれる。土産の行方としてイギリス三部、イタリア国王・マルタ停泊中のイギリス軍艦船將一部・フロリヘラルド殿下(フランス側の接待役)各一部、またベルギー学校頭取一部が記録されている。博覧会用の五部は終了後三部をホテルに贈り、二部は他の品々とともに、欧州留学費用の補てん用として売却された。二部で八八フランという。なお、この五部の御買上代金は一九両余りであった。

七 その他

文久元年、英国海軍による日本沿海測量が行われた際、朝廷や伊勢神宮を擁する津藩から、外国艦船による伊勢海の測量に反対があり、これに応じた幕府は英国に対し、この海域の測量中止を申し入れるとともに、この部分については自国海軍による測量図を作成して提供するとし、英国の同意を得た。これにより、文久二年六月から慶応元年にかけて幕府海軍による勢志尾沿岸測量が行われた。その成果は全面的に明治期の海図にも用いられているが、その海岸線には伊能図の特色が見てとれる。これについては同図所蔵先経由での報告を予定している。

この測量にも参加した福岡金吾(久右衛門)は、慶応三年(一八六七)幕府の諮問に対し「沿海測量につき答申」を出し、全体の測量には莫大な手数と費用もかかるので、船繋りにならない海岸線は伊能勘解由の製図を利用し、必要な修正を加え、暗礁、浅瀬、海底深淺等を委しく量ることにより、早急な海図整備ができるとしている。

まとめ

江戸時代における伊能図利用の足跡を一覧してきた。これらの事実は、天文方測量図、精細細密な実測図などとしての伊能図の存在が、少なくとも関係者の間ではかなり広範に知られていたことを示している。海岸防備策の立案、諸外国との折衝など国土の正確な実態把握がもとめられた幕末期における利用はむしろめざましいと言えるだろう。シーボルト事件から三〇数年、幕府自体の判断により、小図の写本がイギリスに譲られ、同様の要請にこたえるための、印刷刊行にいたっている。

明治を迎え、新たな展開を示す伊能図の利用については、いずれ稿をあらためて追究したい。

- 1) この時期佐渡奉行は二人制で隔年で在府・在島を交替した。
- 2) 幕府の定めた国絵図の縮尺は六寸一里(1:21,600)、五寸六分云々の縮尺は下げ渡された実際の国絵図を計測して算出したものであろう。

- 3) 東京大学史料編纂所
- 4) 同右
- 5) 同右
- 6) 『徳川昭武滞欧記録』(復刻) 東京大学出版会 一九七三

【文献】

- 保柳睦美一九七四・『伊能忠敬の科学的業績』 古今書院 三八四
- 渡辺一郎一九九六・一九九七・諸侯の依頼による地図仕立て・二・『伊能忠敬研究』第九号 二一・第十号 二八
- 日本経済新聞二〇〇四・測量図の出版意図を示す書簡―揺らぐ「幕府の秘図」説・一月二五日文化欄(松岡資明同社編集委員) (『伊能忠敬研究』第三五号 五八・五九所収)
- 相川郷土博物館一九八〇・『昭和五十四年度特別展石井夏海・文海展図録』 二三・二四(資料一『相川町史』岩本廣編 昭和二年)
- 毎日新聞二〇〇六・伊能大図の写本発見―奉行所の絵図師作成、佐渡精巧に・一月二一日夕刊(佐藤由紀記者)
- 前田幸子二〇〇七・佐渡「伊能大図」の発見・『伊能忠敬研究』第四七号 六・九
- 藤原秀之二〇〇七・早稲田大学図書館所蔵伊能図(大図)について・『早稲田大学図書館紀要』第五四号 一・三七
- 勝海舟一八八九・『陸軍歴史』(『勝海舟全集12・13』講談社 一九七四)
- 倉沢剛一九八三・『幕末教育史の研究』一八五・一八六
- 福井保一九八五・『江戸幕府刊行物』 雄松堂 一九八五 二二二・二三六
- 高木崇世二〇〇一・二〇〇二・『官板実測日本地図』論考(一)・(三) 『伊能忠敬研究』第二七号 九・一五・第二八号 一五・二一 第二九号 一四・一九

長州藩毛利家の伊能測量記録 (一)

河島悦子
鈴木純子
伊藤栄一郎
渡辺

報告のあらまし

徳山毛利藩には測量御用意記（日本国際地図学会誌一四一号1998年、一四五号1999年で紹介、渡辺・伊藤）と称する詳細な記録が残されており、山口県文書館毛利文庫に収載されている。

支藩にこれほど詳細な記録が残されているのだから、毛利本藩にはさらに詳細な史料が伝えられているのではないかと河島、鈴木、渡辺の三名で調査をおこなった。調査期日は二〇〇九年八月一日、一九日の二日間である。目ぼしい発見がなかったので、報告が延々になつてしまったが、ひと通り報告をさせていただくとする。毛利家の伝世史料はよく残っているが、藩政史料は火災にあつたとかで、まことに不完全であつた。目録から探索できたのは、次のような史料にとどまつた。

- (一) 公儀諸事控 請求番号四一八（二五―四）文化二年四月、第五次測量関係の記録である。
- (二) 公儀諸事控 請求番号四一八（二五―一〇）文化六年、第七次測量関係の記録である。
- (三) 諸事小々之控三六八 請求番号三一―一九（四九―一五）文化三年
伊能測量について薩摩藩からの問い合わせなどを記す。少し面白い文書である。
- (四) 宰判文書に見る測量記録
①三田尻宰判本控九 両公伝資料三六〇 享和三年至文化八年

- ②上関宰判本控三 両公伝資料二九三 享和三年至文化四年
- ③小郡宰判本控九 両公伝資料四四七 文化三年至文化六年 寛
- ④船木宰判本控十一 両公伝資料四八四 文化三年至文化九年
- ⑤船木宰判本控十二 両公伝資料四八五 文化八年至文化十一年

毛利領では代官所の管轄区域を宰判と呼んでいる。別図の宰判区域図を眺めると、伊能測量に関係がある宰判はもつと多い筈であるが伊能測量関係の記述が見つかったのは、以上六点のみであつた。

これら宰判文書は原文書を楷書に書き直されたものである。内容は測量に提供した人足の賃金と米代の数字の羅列で、藩の勘定奉行に伺つて郡の経費で処理されたことを示している。内容に精粗があるが、分析すれば、測量支援に提供された船団規模、人足数などが明らかに become と思われる。

よつて、宰判文書は分析後発表することとし、とりあえず、(一) (二) 公儀諸事控を紹介する。

解説は伊藤栄子、全体整理と史料解説は、渡辺がおこなつたが、毛利藩の職制、人物、慣例などの調査が不十分なため、雑駁な議論になつてしまったことをお許し願いたい。大藩の公式文書にも、こんなことが出ているよ、というような理解がいただければ幸いである。

注 稿末の宰判区域図は、三田商学研究（二四巻第一号1981年1月）西川俊作「一八―一九世紀における長州藩の宰判別人口増加」から引用した。斜線部分は支藩の所領である。書き込まれた数字は無視してください。

山口県文書館蔵毛利文庫 公儀諸事控

文化二年四月より同三年寅年まで
請求番号四一八（二五―四）

注 幕府通達の測量順路は、例が多いので省略。

伊能測量について幕府から長州藩に宛てられた通達関係の記録で、今回はじめて活字化するものである。土井家文書もそうだったが、伊能関係の記録では幕府からの通達が初めに出てくることが多い。これを体系付けると次のようになる。

一、第五次測量以降、測量ルートの大名に対しては、幕府は勘定奉行の名前で、江戸藩邸の留守居の役人を勘定所に呼び出し、勘定組頭と勘定（役職名）が列座の上、老中からの指示を書面で渡した。受け取った留守居は領主便で国元に通報したので、その控が伝存していることが多い。本資料はその一つである。

二、測量隊員の旅行と測量機器運搬に必要な人馬を提供する沿道の宿、町、村に対しては勘定奉行連署の上、宿町村の年寄共宛てに、提供すべき人数、道順の太要を示した命令を流した。

この命令は、江戸伝馬町の伝馬役が伝達を担当し、添え状をつけて村継ぎで発信された。刻付け（こくつけ）という至急扱いで、受け取った宿町村では、受信時刻を請け書に記し、自分用の控えをとって次に廻す。昼夜を問わず通達されたから、測量隊到着の遙か前に現地に到着した。

三、忠敬本人には、御証文という老中発行の旅行命令

書が渡された。旅行順路の大略を示し、利用できる人馬の数量が記載されている。

御証文の発行権は老中のほか、勘定奉行にもあるが、第五次以降の伊能測量では老中から御証文が渡された。

忠敬は現場到着の一カ月くらい前になると、宿泊日程を示した先触れを、自分が発信人となって宿町村に流した。その際、老中発行の御証文の写しを添付したので、村方文書では老中御証文写しが一番先に書いてあることが多い。

以下、毛利家文書を追って老中指示を伝達された以降の毛利藩側の動きを眺めてみよう

文化二年分

丑三月

吉村久右衛門

天文方高橋作左衛門付之手付伊能勘解由
為測量御用順国之事

一、志道隼人より文化二年二月二十六日之書状を以御参勤御旅中へ申来候趣ハ、過ル十九日御勘定所へ御呼出ニ付、公儀所本メ役（もとじめやく）倉増十兵衛罷出候処、別紙之通御達有之候ニ付、此度差越申候間被仰上候様ニと存候由、端書ニ享和二年五月大坂町人、間五郎兵衛測量為御用長崎へ差越歸路之節、御国中通路之節吉川和三郎殿へも可申達由、御達御座候ニ付於爰元達相成候処、此度ハ達之御使無御座候ニ付、於爰元御達し不仕候間、左様心得候様ニと申来候ニ付別紙ニ奉令承：
コピー切れ、及御聞地方へ令沙汰候段及返答候口
：見えない、

幕府勘定所から呼び出されて老中から、このような指示が渡されたことを、参勤交代の旅行中の毛利の殿

様へ書状を差し立てて報告している。老中の指示は、これほど重かったのであろう。

あと吉川家（分家）への伝達をするよう命じられてはいないが、先年、大阪町人・間五郎兵衛が測量した時は伝達を命じられたので、どうするとか、というやりとりがある。

撮影が悪くて、よく読めない部分があるがご容赦ください。流れには関係ありません。

間重富の例が出てくるところが面白い。間は、寛政の改暦では天文方同格とされ、旗本待遇だったからそれが生きていたのであろうか。

以下は、他家にも例がある第五次測量にあたり老中戸田采女正より測量経路の大名あてに発せられた指令本文の控である。

通達の内容、道順はこれまでの史料と、少しも違くない。

*

天文方

高橋作左衛門手付

伊能勘解由

作左衛門弟

高橋善助

同下役 式人

同内弟子 四人

右は此度測量為御用、東海道通、中国筋、四国、九州、壱岐、対馬迄 罷越候ニ付、当二月下旬頃江戸出立

別紙道順書之通、国々相廻測量可致候間、其段可被相心得候

一、右二付他領并島々へ渡海之節は其所之領主より船を出し、差支無之様可被致候 尤測量道具為手入、止宿いたし候儀も可有之候間、是又差支無之様可被取計候

一、廻国先より江戸頒曆所へ御用状差出候儀も有之候ハ、御領主便を以被相届、且江戸表より廻国先へ御用状差出候節、心当之場所其領主役人中へ可相達候間、其所へ到着以前二候ハ、着之上被届成立後二候ハ、先々相届候様可被致候
右之趣可相達旨、戸（田）采女正殿被仰渡候間申達候

丑二月

西国筋測量御用

伊能勘解由道順

江戸出立、芝高輪より測量相始メ：以下略す

ついで、志道隼人から公儀の通達があつたとして、三月八日の書状で殿様の御旅中へ伝えてきた内容は次のとおりだった。

一、志道隼人并公儀中より三月八日之書状を以御旅中へ申来候趣ハ、去月二十九日御勘定奉行小笠原和泉守殿より御剪紙を以天文方測量廻国ニ付、吉川寛三郎へ相達候儀有之候間、明晦日四時御城中之口へ罷出候様ニと之儀御座候且又寛三郎家来をも御呼出有之候付、為心得御達有之候由をも被仰下候ニ付、六兵衛儀中ノ口へ罷出候岩国屋敷番有福新左衛門義罷出候付御勘定所へ新左衛門召連罷出候段六兵衛相届控居候処、

二月二十九日御勘定奉行小笠原和泉守殿より切紙で、天文方測量廻国に付いて、吉川寛三郎（分家吉川家当主）へ伝達することがあるので、翌三十日四つ時、御城の中之口へ罷り出るようにと通達があり、また吉川家家来も呼び出したので、心得として知らせるとの御達しがあり六兵衛（長州藩の聞き役か）が中ノ口へ罷り出ました。

支藩の岩国藩（吉川家）からは屋敷番有福新左衛門が罷り出ましたので、六兵衛は御勘定所へ、新左衛門

を召し連れ罷り出ましたと届け出て控えて居ましたところ、

追付御勘定所於椽通御勘定組頭添田定市殿支配御勘定前田平右衛門方列座にて、先達て被仰渡候天文方測量之儀二付致廻国候段、此御方へ被仰渡候節、吉川寛三郎方へ達落二付、猶又申達候との儀定市殿、六兵衛へ被仰聞、先達て遂御注進候通之御書付両通被相渡候二付、請取及相応候左候て新左衛門へハ天文方測量之儀、都合にて被仰聞候二付、罷歸屋敷番呼出被仰聞之趣申達候此段被仰上候様二と存候此度之被仰渡書も先達て差越候分と同様之儀二付、差越不申候間、左様可被成御承知候由申来候二付、令承知候段御着府之上申達候事

御勘定所の椽通で、御勘定組頭添田定市殿、支配御勘定前田平右衛門殿が出座して、先達て仰せ渡された天文方が測量のため廻国する件について、当藩へ仰せ渡された際、吉川家への通達が落ちていた。改めて申し達すと、定市殿が六兵衛へ仰せ聞かされ、先達て、御注進申し上げた通りの御書付二通を渡されましたので、受け取りました。

そうして（吉川家の）新左衛門へは天文方測量の事を仰せ聞かされたので、罷り帰り屋敷番を呼出して伝達するよう申し達しました。

以上の経過を（殿様に）言上いたしたく存じます。此度の仰渡書も（内容は）先達てお届けした分と同様なので、お届けしませんので、さよう承知するよう申し達しました。承知した旨、御着府の上、申し達しました。

いやはや大騒ぎである。分家への通達を勘定所が忘れて、分家用の通達を作ったが、本家も引き合いに呼び出し、並んで全く同じ通達を受け、その経過を旅先の殿様に報告している。吉川家は將軍直属の藩とは認

められていなかった。

三月十六日の書状之節、伊賀より福原豊前へ申越候趣ハ当二月十九日御勘定所より御呼出二付、公儀所元メ役倉増十兵衛差出候処、天文方高橋作左衛門殿手付伊能勘解由其外測量為御用、東海道通、中国筋、四国、九州、杵岐、対馬迄被差廻候付、其段相心得差支無之様御領主より被仰付候様二と戸田采女正様被仰渡之旨を以御達有之候廉々并道順書共委細別紙之通二付、御達書之趣二応し、諸事差支無之様沙汰可被仰付と之御事二付、御会釈旁の儀ハ因州芸州杯と之様子聞合被仰付、宜様御沙汰可被成候

その次は、多分江戸家老から国元の老職への伝達らしい。

三月十六日の書状にて伊賀（江戸詰めの老職か）から福原豊前（国元の老職か）へ伝えてきた内容。

当二月十九日御勘定所より御呼出があったので、公儀所元メ役（公儀所は留守居役か）倉増十兵衛を差し出したところ、天文方高橋作左衛門殿手付伊能勘解由其外が測量御用のため、東海道を通り、中国筋、四国、九州、杵岐、対馬まで廻られるので、承知の上、差し支えないよう、領主から指示するようにと、戸田采女正様（老中）から仰せ渡され、道順書など委細は別紙の通りです。

御達書の趣に従い諸事差し支え無いように手配するよう（殿様から）御指示が出ています。

御会釈（お扱い）などについては、因州芸州などの様子を聞き合わせ、しかるべくお取り扱いください。

近隣の諸藩と均衡を考えてやって欲しいと、恐らくこれだけが言いたかったのだろう。

端書ニ吉川寛三郎殿へ本文之趣相達候様二と追て去晦日御達有之二付、同日屋敷番へ公儀人より相達候由江戸より申来候御末家之儀ハ何共不申参候へ共、定て於江戸御達可有之候乍然、ケ様御国中へ一統之御沙汰事ハ於御国も猶亦御達有之筋共二て候無御座候哉於其元似寄候類例僉議被仰付御沙汰相加候様二と存候事

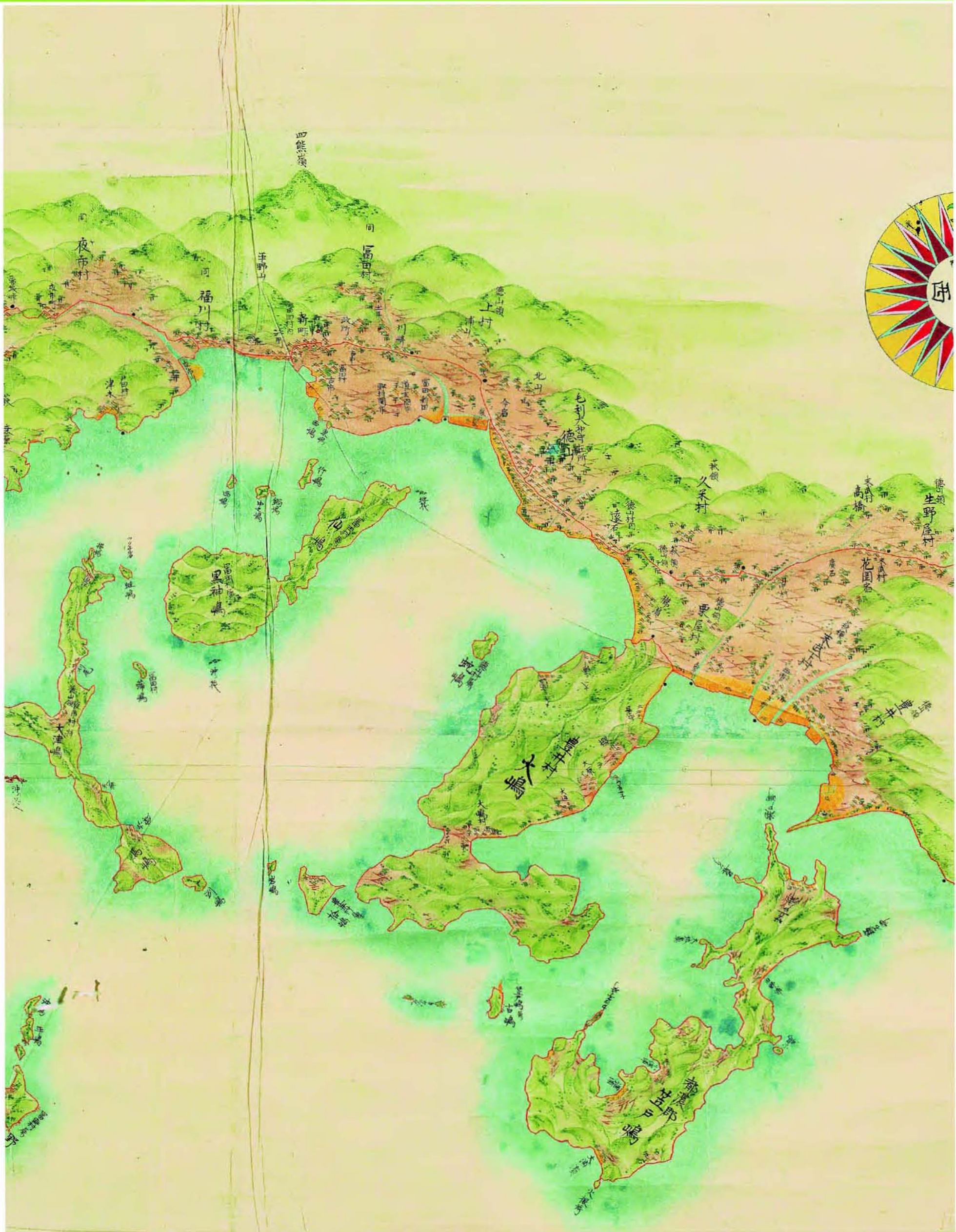
端書に（分家）吉川家へ本文の趣を通達するようにと、三十日にあと追いで御達しがありましたので、同日屋敷番へ公儀人より通達した旨、江戸より申し来ました。

御分家からは何もいつてきませんが、多分、江戸で御達しがあるのでしよう。然しながら、かように御国中一統への御沙汰事は、国表においても猶亦御達があるべき筋でしょう。そうではないでしょうか。そちらで、類例を御僉議の上、御沙汰をされるのが、よろしいかと存じます。

国元で、分家の諸藩一統に通達しなくていいだろうか、という江戸側の問題提起のようである。

一、先達て間五郎兵衛回歴之節も御城辺測量之儀書記も有之、当御発駕前二も御手子衆より城者手子衆迄相談之趣も有之由二候処、此度御達之趣二てハ、執候道一覽等々御断達候二相成、吉敷（よろしき）儀と相見候付、御城内へさえ入不申候ハ、近辺海辺之儀ハ無支測量二相成候ても可然候猶御僉議之上御沙汰相成候様二と存候、伊能勘解由と申人御旅下衆之由二候間、左様御心得候様二と申達候処、追て四月二十四日返書を以、委細因州、芸州杯聞合申付可致沙汰之通委曲申越候事

先般、（大阪町人）間五郎兵衛が回歴の節も御城辺を測量の事が記録にあり、今回の御発駕前にも御手子





山口県文書館毛利文庫蔵

御両国測量絵図 第三 (伊能大図175号) 部分 徳山・三田尻附近

長州藩毛利家旧蔵の大図で、御両国測量絵図という名前がついている。全7枚のうちの、第三図の徳山、三田尻部分である。針穴がある伊能隊制作の副本で、長州藩の希望で謹呈されたと思われるが、入手経緯は分かっていない。1970年代に川村博忠氏により始めて紹介された。

国界は黒色の|、郡界は黒色の○、村界は黒色の●で示している。国界、郡界の記号を黒で描く点と村界の表示がある点が他の大図と異なる。山景の緑は黄味が少ないが濃く鮮明。海岸の砂地は黄色、三田尻の塩田部が鮮やかで、伊能隊は外縁部を測っている。平野部では森林、田畑、沿道の家並を写生する。文字は達筆、書体は他の伊能図と類似する。接合記号はあるが、天測地点の記入はない。

衆（殿様側近の事務方）より城者手子衆（城付の事務方）まで相談の趣もあるようですが、此度の御達の趣では、執行順路一覧等々の御断りがあり宜敷き儀と見えますので、御城内へさえ入らなければ、（お城の）

近辺海辺は測量になっても差し支えありません。

猶、御僉議の上、御沙汰相成られるようにと存じます。伊能勘解由と申す人、御旅下衆（旗本ではない下役身分の意味か）のようなので、左様御心得なられるようにと申し達しました処、追て四月二十四日返書を以て委細は因州（因幡）、芸州（安芸）などに問い合

わせ沙汰をするといってきました。

城内に入らなければ何処を測つてよいとあるが、こんな議論がおこなわれたのは驚きである。

公儀事諸事控の一部
城内へ入らなければどこを測つてもよい・・・と見える。

山口県文書館蔵毛利文庫 公儀諸事控

文化六年

請求番号四一―八（二五―一〇）

本史料は、九州第一次（第七次測量）測量関係の記録である。形どおり幕府の通達から始まる。

幕府も同じ文言の通達を大藩には個別に渡すので大騒ぎだったろう。何十通も筆写しなければならぬ。洩れが出てもおかしくはない。

測量御用トして伊能勘解由諸国

被差廻候段御達之事

一、御達之儀有之候間、明後二十六日四時大手御番所後御勘定所へ可罷出旨、小笠原伊勢守殿より御切紙、只今到来仕候依之稲村小兵衛差出可申之段、已八月二十四日公儀人中より申出候付、及御聞候事

一、今日御勘定所へ御呼出二付、稲村小兵衛罷出候処、御勘定組頭加藤総兵衛殿、御勘定大島次郎太郎殿御列座ニて左之趣御国元早々被仰越候様被申聞候二付、請書印形：見えぬ相調差出候由、翌二十六日公儀人中口：見えぬ相調差出候由、御聞候事

天文方

高橋作左衛門手附

伊能勘解由

右順書之通国々相廻候 尤其所之様子ニて最前山々、城下街道等も相測候間、少々宛前後二も可相成事右御勘定所へ岩国屋敷番朝枝三平儀も御呼出二て罷出候二付、御用向内々小兵衛より根（カ）立長右衛門を以新見候処、此（カ）御方御同様之被仰渡有之趣二付、不捨置、猶亦長右衛門を以兼ての趣一通り申入候得ば、最初御呼出二て罷出候上之儀二付、不相捌此上致

方も無之、依て御大名様方への被仰渡相済候跡ニて、小兵衛、三平同被召出、可被仰渡之由二付、左候ハ、一同罷出候上小兵衛へ被仰渡御書面御渡も有之候ハ、此方へ御渡被下候様仕度段申入候処、其通可致之由二付夫ニて差置候

左候て御大名様方被仰渡相済候上、小兵衛、三平一同御席へ御呼出二て最前之通加藤殿小兵衛へ被申聞候付奉畏候

まず殿様に状況が言上される。

また、岩国藩への扱いでもめている。長州藩では支藩として認めず、毛利の家臣の扱いだったというから、大名と同列でなかった。

一方、ここでは「・・・依て御大名様方への被仰渡相済候跡ニて、小兵衛、三平同被召出、可被仰渡之由二付、」

とあるから、沿道の諸侯への通達は、一藩づつ呼び出すのではなく、沿道の大藩と小藩グループの触れ頭の藩を一度に呼び出し、次々に渡されたことが分かる。

幸之助へ可申聞段及請書、図請取退座、前段受書相認差出候直様八十吉小屋へ参候様三平へ申聞罷歸、前所（カ）之趣小兵衛より委曲申出候左候て写を以山添八十吉より朝枝三平へ相達候事

右之趣二付、御国毛利大蔵へ八月二十八日之書状を以□□三郎右衛門より過日二十六日御勘定所御呼出二付、公儀所本メ役稲村小兵衛被差出候処、天文方高橋作左衛門殿手附伊能勘解由其外測量為御用日光街道より木曾路通、西国筋九州迄被差廻候二付、其段相心得差支無之様との儀、牧野備前守様被仰渡候間、御国元早々可被越之由、御勘定組頭加藤総兵衛殿、御勘定大島次郎太郎殿御列座ニて被仰渡、御達之廉々并道順書は委細別紙：前々相見候：通御座候条、諸事過ル丑年巡行之節之趣を以、可被成御沙汰候

文化二年と同じような流れである。吉川幸之助は岩国領の当主。

端書ニ吉川幸之助殿へ御達候儀も、過ル二十六日屋敷番一同御呼出有之、諸家一統之被仰渡相済、亦々小兵衛并屋敷番朝枝三平被召出、最前之趣御兩人御列座之上総兵衛殿より小兵衛へ被申聞、此段幸之助殿へ申聞候様ニ之儀二付、及請罷帰即日兩通之写相調、三平呼寄公儀人山添八十吉より申渡候間、左様御承知於其元御末家岩国へ御達之儀は何も過ル丑年之通可被成御沙汰候、御細書別紙旁委曲令承知、御末家方定掛へ達之儀過ル丑年之趣を以、令其沙汰候由、九月二十八日之返書ニて申来候事

吉川家への通達があらためておこなわれたことも、御末家一同へ通達のこと文化二年と同じだった。次の文書は、国元の毛利大蔵から（江戸の）□□三郎右衛門へ日程経過の報告記録である。今回は山陽道を測ったが、文化六年二月一〇日から二六日まで一七日間で測りおえている。

大蔵より午正月八日之書状を以三郎右衛門へ天文方高橋作左衛門殿手附伊能勘解由手伝勤方坂部貞兵衛、下役下河辺政五郎青木勝次郎、永井要助事、測量為御用去十二月十日芸州より御国引移十二日呼坂（よびさか）泊、十三日都濃郡引移相成筈候処、雨天ニて測量不相成同所相滞、十四日充（カ）岡泊、十五日徳山御領引移、十七日宮市泊、十八日小郡泊、十九日山中泊、二十日船木市泊、二十一日吉田泊ニて順々測量相済、二十二日長府御領へ引移、二十四日赤間関、二十七日出立小倉渡海相済候由

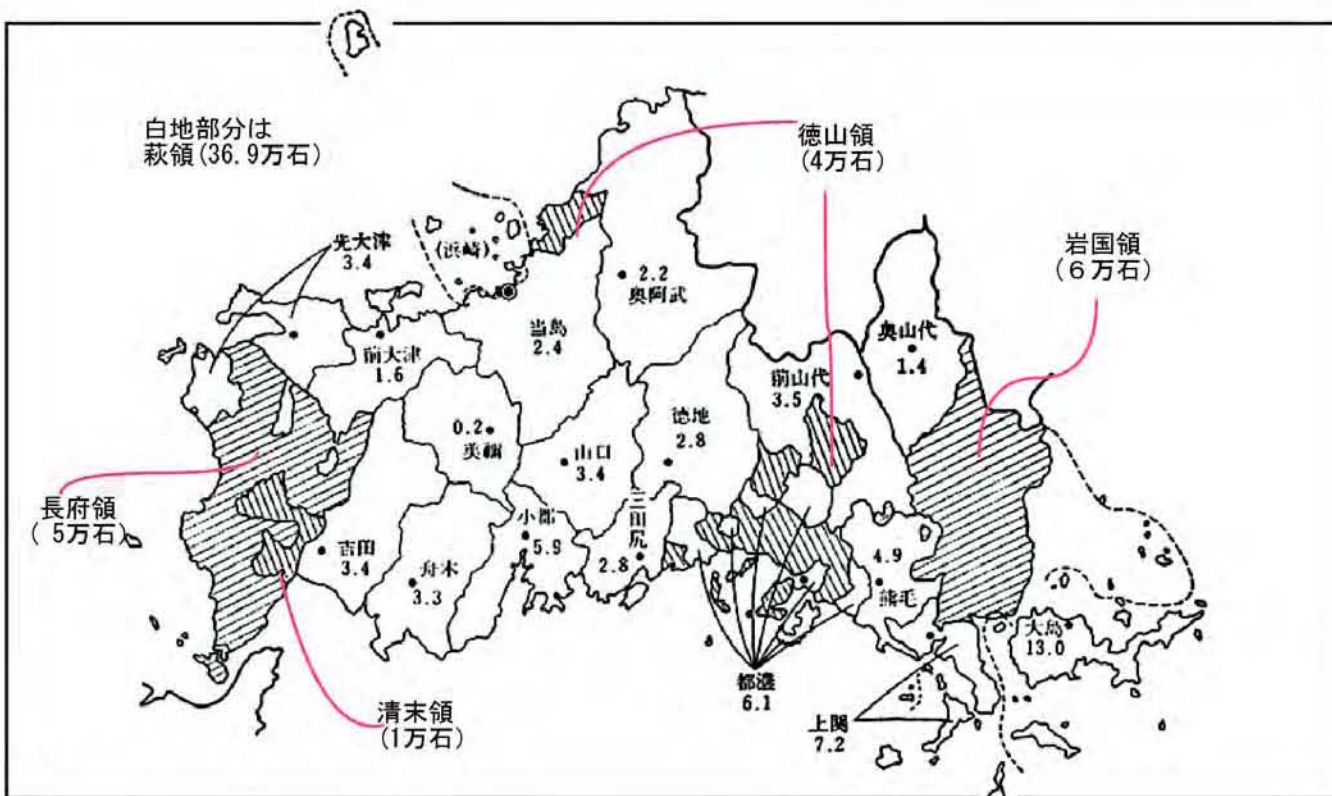
以下に出てくる接遇状況の記述は意外な感じがするので、そのまま意訳する。

御あしらい向之儀、去ル丑年之趣を以令沙汰候賄之儀聞繕之上、上筋用意之振を請、一汁三菜旅籠仕出、酒菓子等をも差出候処、翌朝より一汁壺菜ニして差出候様ニとの事ニて、其通令沙汰候酒、菓子之儀も一向相断候付差控候由、且亦米代木銭とメ相応払方相成ル由、前断之通御國中無滞測量相済候由、所之御代官中八幡方より届出候条、此段御序を以被及御聞候様存候由申来候二付、達御聞候趣二月六日及返答候事

接遇は、文化二年と同じように、周辺の扱いを調べ、上方の用意との振り合いを考え、旅宿は一汁三菜、酒・菓子なども差出ししましたが、翌朝から一汁一菜にするように言われ、その通りにしました。酒・菓子も断られたのでやめました。

木銭（宿泊代）、米代は相応の代金を払われましたがお国中滞りなく測量が済んだ旨、代官中から届がありました。この件を、おついでの方（殿様に）申し上げていただくようにしてきました。（殿様に）二月六日に申し上げたと、返事がありました。

末筆ながら、本稿執筆にあたり、金沢の河崎倫代さんに、お世話になり御教示いただきました。御礼申し上げます。



「二八一—一九世紀における長州藩の宰判別人口増加」

三田商学研究 二四卷一号 一九八四年四月

西川俊作

より

忠敬旧宅雜録 (二)

伊能 洋

忠敬旧宅は書齋と小野川に面した店舗が、広い板の間の台所で連結されていた。私が疎開していた昭和十八年当時、祖母の部屋があった店舗部分にはガラス戸が入っていたが、書齋部分は雨戸と障子だけで、私に与えられた東南角の六帖間は冬の暖房と言えれば小さな火鉢が一つ、今考えると信じられない厳しさだったが、当時は子ども心にも当然のこと受止めていた。

書齋の八帖間は常時開け放たれていて、毎日のように見える見学者（地図見と呼んでいた）に備えていた。床の間には忠敬先生日記が堆高く積まれ、家牒、旌門金鏡録などの家史、和数字の対数表などが置かれていた。常時お見せした量程車は、小学生の私にとっては格好の遊び道具で、回り廊下をまたがって走らせ、祖母に大目玉を喰らったりしていた。その量程車が現在では国宝の一点になり、白手袋で取扱われているのを見ると、何とも言えない思いである。肝心の地図は軸装の中図の二、三点を主に説明し、特に要望があると大図を文庫蔵から出して来ることもあった。

八帖間の東側の欄間には「山間名月江上清風」と書かれた横額の一幅が掲げられていたが、作者名までは記憶にない。

書齋廊下の南隅には洗面用の水屋があり、銅の金盥、塩の小皿（歯磨き用）などが置かれていた。夕方書齋南側、西側の雨戸を繰るのは私の仕事だった。東側には六帖の次の間があり、一間ほどの土間が続いて中庭に出られた。次の間の長押には槍、薙刀などが三、四本掛けられていたが、戦時中の金属供出で先端は切れ、長い柄だけが残されていた。商家だったが苗字帯刀を許されたことで、武器の保持も認められたのだろうか。そう言えば文庫蔵には青糸織しの鎧一輛も鎮座していて、五月の節句には着用に及んで写真を撮った記憶がある。その鎧は戦後あえなく貴重な食料になって消えたようである。書齋の北側には細長い茶の間があり、三度の食事はここであった。東側にはねむの木とつつじなどが植えられた坪庭があり、軒には釣忍が下げられていた。朝食の前には、何があっても一杯の日本茶と梅干しの一箇を摂るのが習わしだった。

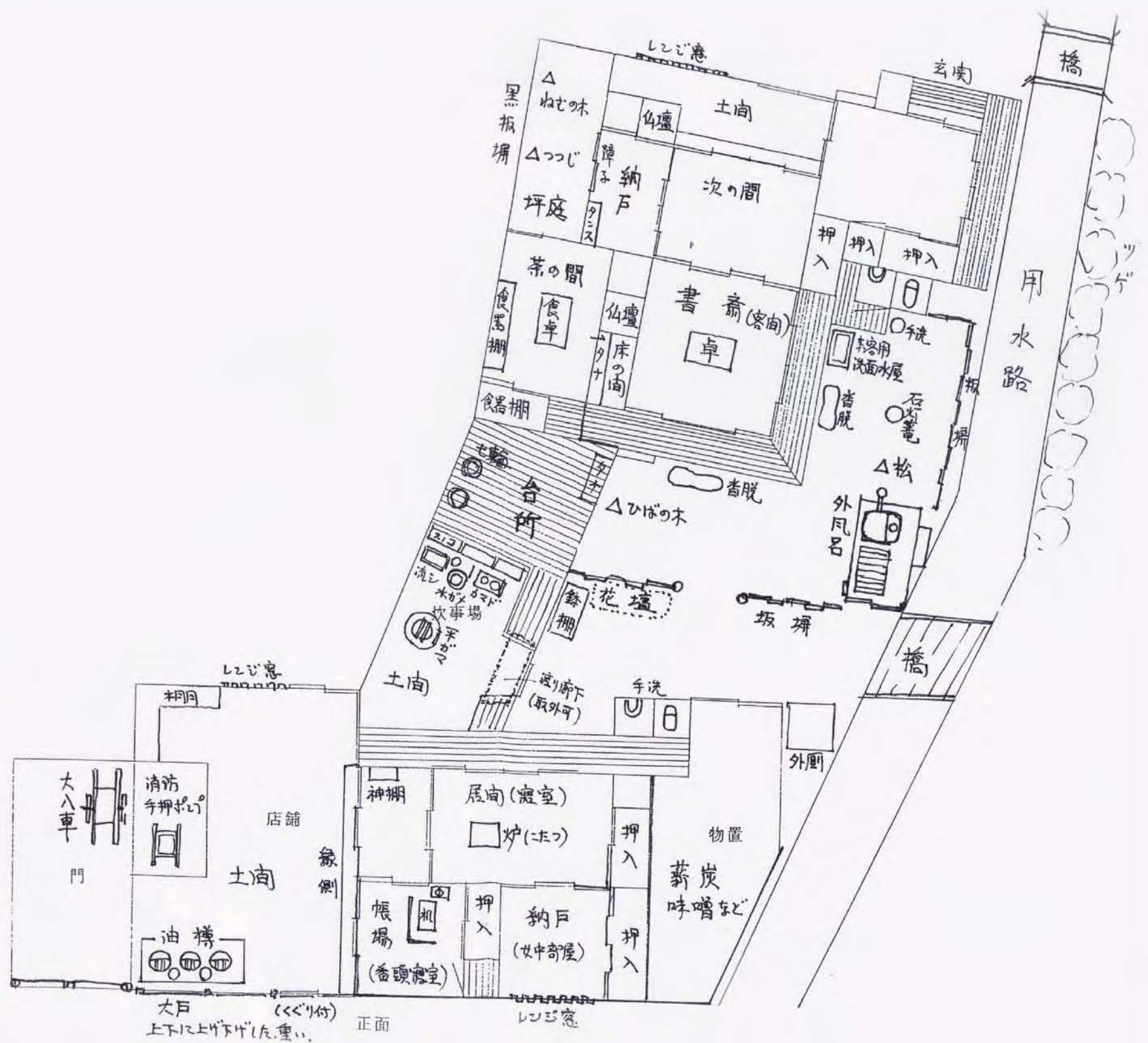
茶の間に続いて八帖ほどの板の間の台所と同じ位の広さを持った土間が、書齋と店舗を結んでいた。黒光りする台所は、奉公人の食堂であつただろう。流しの横には大きな水瓶が据えられ、文庫蔵の横にあった跳釣瓶の井戸から、地中に埋められた竹管の水道を通して水が送られる仕組になっていた。

天井には煙出しが設けられ、土間には大振りの平釜と銅製の竈、板の間の隅には七輪、火消壺などが並び、土間の隅には常時、枯松葉、薪、小枝などの燃料が積まれていた。板の間の何か処かは揚げ蓋になっていて、壺や瓶類の収納庫になっていた。（続く）



(原佐藤氏) 伊能忠敬翁書齋

伊能忠敬翁書齋



↑ 伊能忠敬旧宅平面図 1/100 伊能 洋氏による手書



← 伊能忠敬旧宅前を流れる小野川

伊能忠敬翁書齋 ⇒⇒

伊能忠敬記念館前のこの書齋は現存し、
店舗、正門、土蔵とともに、国指史跡に、
昭和5年4月25日、指定されている。

伊能三郎右衛門家を再興した伊能源六景文と海保家について

(編集部まきがき) 伊能三郎右衛門家を再興した伊能景文は、忠敬の実家神保家縁戚の屋形村(現横芝光町屋形)名主・海保長左衛門寿考(屋号千神)の三男だった。伊能茂左衛門景晴の娘・伊能イクと夫婦養子として迎えられた。(イクの没後、景文は大綱町板倉氏の娘ヒサと再婚)

伊能忠敬の孫忠誨(ただのり)の病没後、妻は実家に帰り、約三〇年間伊能家に空白が続いた。幕末になって、伊能家を再興しようということになり、伊能景晴(号は節軒)らの尽力で、安政四年(一八五七)養子縁組が成立したが、その理由・経緯などは史料的には明らかでない。そこで、景文と海保家について、海保家側の資料・伝承から解説していただいた。

海保景文は、伊能家に入夫後、伊能源六景文として家業の隆盛に努め、伊能家は景文の代に繁栄したと伝えられている。大正三年一月に八十歳で没した。墓は、伊能三郎右衛門家墓地の景敬の墓の右端にあり、戒名は「高章院徳教興居士」と記される。

土浦(茨城県)の醤油醸造を家業とする色川家に養子入りの弟の考八郎(色川英俊)とともに政治に志し、明治期最初の千葉県議会議員として活躍した。弟



伊能景文の墓
(香取市佐原観福寺境内)

海保英之

の考八郎は茨城県議会議員及び衆議院議員を務めたという。

景文の生家海保家の当主は代々長右衛門又は長左衛門と名乗り、九十九里地方きつての網主で、大地主でもあった。その規模を示す逸話のひとつとして、自分の家から海岸まで(約2キロ)全て自分の土地を通って行けたという言い伝えが残っている。

代々屋形村の名主を務めるとともに、九十九里地域の大名主も務め、九十九里浦千戸の上に立つというところから、屋号を千神と称したと伝えられる。

文人、墨客との交流も多く、特に幕末の剣豪中村一心斎、絵師の春木南湖、勤皇詩人梁川星巖、日本最初の農業協同組合の基礎を創った農学者大原幽学等は、海保家に長く逗留していたようである。

一族からは、主などところで、幕末の儒学者海保漁村、経済学者海保青稜、書家海保射村、剣豪海保帆平(北辰一刀流 坂本竜馬入門時の千葉道場師範代)、明治の衆議院議員色川佐太郎、地域の歌人海保瓜州(松尾芭蕉系)などの人物を輩出している。

海保家の先祖は清和天皇に始まり、当初は源氏を称し、次いで新田といい、その子孫が群馬県の里見地区に移り里見を名乗る。

結城城落城により安房(南房総)に逃れ、安房の城主となった。最初の城主里見義実(里見八犬伝の伏姫の父親)の弟・匠之介(氏義)が兄の義実と不仲になり、海保村(千葉県市原市海保地区)の海保城に移り、海保(海保大隈守氏義)と称したのが、海保姓の始まりである。

海保一族の始祖海保大隈守氏義は、里見家と対立する千葉氏の執権職となり、以来、大隈守から甲斐守(海保甲斐守氏次)までの九代にわたり、千葉氏の執権職を務め、戦の際には総大将等として里見氏等との戦を繰り返した。

大隈守はやがて佐倉城(元佐倉城、現千葉県酒々井町)に移り、やがて寺台城(現成田市寺台)、宝田城(同宝田)を居城とした。

海保一族最期の城主甲斐守の父丹波守は、小田原北条氏の奉行衆として一時小田原城にも参勤し、通行手形の発行などの職務を行い、一方では千葉氏の執権職として、千葉氏配下の諸将に対し丹波守名で命令書(横芝町史に収録)を発し、戦に際しては総大将として出陣することもあった。

伊能家も諸将の一員であったので、海保家と伊能家は、この頃から交流はあったろう。

また、寺台城最期の城主甲斐守は、成田山新勝寺のご本尊の不動明王を深く信仰し、成田の西方の小さなお堂に安置されていた不動様を、寺台城の一角(現在の成田山新勝寺の場所)に諸堂を建立して移したと伝えられる。

この間、甲斐守は、不動様に願をかけ、関東一の怪力を授かったという。徳川秀忠が真田昌幸親子が守る信州上田城を攻めた際には、難攻不落の上田城に一番乗りを果たしたり、里見氏との戦では、戦の最中に討ち死にしたが、お不動様の使いの背倣多加童子が現れ、たちまち傷を治し、生き返らせたと伝えられる。

これらの物語りは、成田山新勝寺の由来にも残っているほか、我家の伝承でもある。成田山の朱塗りのお不動様は、甲斐守が満願の日に怪力を授かった御礼として、朱の衣の代わりに赤く塗ったものと伝えられている。

しかし、豊臣秀吉の小田原攻めとともに、関東諸城は、秀吉の命を受けた徳川家康により次々に開城させられ、寺台城や宝田城も廃城となり、海保家は旧領地の屋形村に住みつき、屋形村の農業の草分けとなり、網主ともなった。

漁業家としての海保家は、地引網漁法に大地引の手法を九十九里では初めて導入するなど、鰯を中心とした地引網漁を行い、隆盛を極めたが、やがて不漁が続

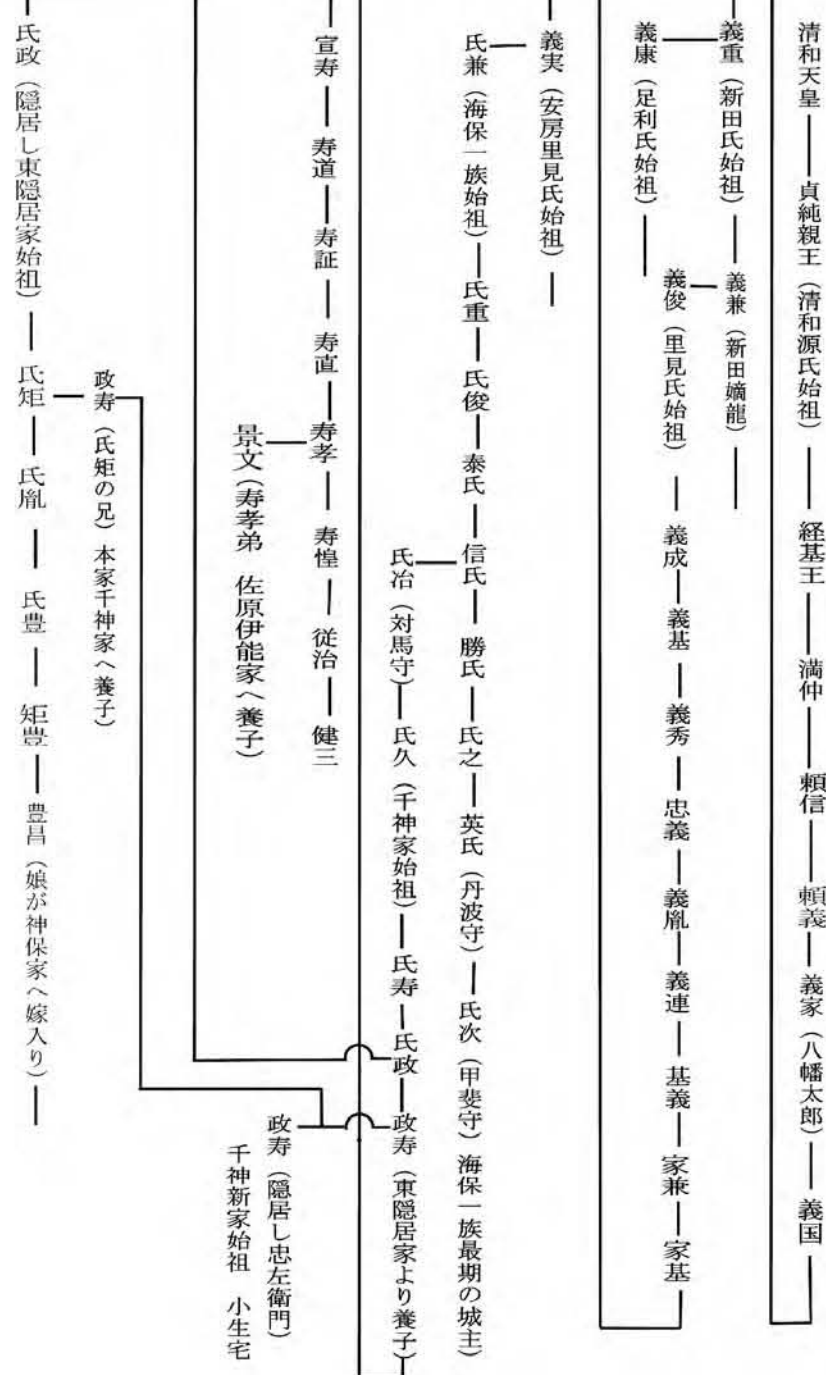


千神家代々の石塔（正光院無量寺境内）



愛宕神社（旧海保神社 千葉県山武郡横芝光町屋形）
網主であった千神家が船の火災予防祈願のために建立。
愛宕神社に改名（昭和20年）。祭神は「天之阿具土命」筆者管理

景文の生家千神海保家系譜



くようになり没落した。現存して、往時を忍ばせるものは、累代の墓地と神社（旧海保神社。終戦後に愛宕神社と改名、小生が管理）が残るのみとなった。海保家はかつて有力な諸家（名主層）との縁戚関係が多く、忠敬婿入りの際、親元となった平山家とも当時縁戚関係にあった。

小堤村の神保家とは、千神海保家の分家・海保兵右衛門家（屋号は東隠居）が縁戚関係にあり、忠敬の九十九里浜測量当時は、当主豊昌の娘富美が神保家の当

主信敬のもとに嫁いでいた。これ以前にも兵右衛門家と神保家は、信敬の父幸宗（伊能忠敬の従兄）の代から、俳諧の道を通じて親しい間柄であり、分家の中西家には、子供の頃の忠敬が遊びに来たと言伝えが残っている。

測量途上の忠敬が海保兵右衛門家に宿泊したのは、従来からの御縁と、当時兵右衛門家が本家の千神家に代わり名主であったためと思われる。

追記 伊能景文について 渡辺一郎

安藤由紀子・伊能陽子編 世田谷伊能家伝存「伊能忠敬関係文書目録」の年表によれば、忠誨の病没は文政十年（一八二七）、シーボルト事件の発生が文政十一年である。

このあと伊能家の事績は空白となって、神保家の縁戚海保家から景文が入夫して伊能家四代を継ぐのは安政四年となっている。この間は約三〇年である。

忠誨には子がなかったため、養継嗣として永沢氏から駒吉という者が入っているが、弘化二年（一八四五）に離縁になっている。入夫の時期は分らないが、忠誨の死去は二一歳くらいだから、生前の養子は考えられないだろう。

死後、ある時期に、親戚協議の上できまったのではなかろうか。もし、直ぐ決められたとすると、離縁まで十八年、養家における地位は安定するはずで、離縁は考え難い。

伊能家の伝承によれば、この長い期間、伊能家の営業は親戚管理のもとでおこなわれていたといわれる。

一八四〇年代になってから、何等かの理由で、伊能三郎右衛門家を再興しようという議論が親戚間で起こり、養継嗣として永沢家から駒吉を迎えた。ところが、駒吉に伊能家を継承する能力がないことが分かって、すぐ離縁された、と考えるとあり得ないこともないだろう。

そして安政四年（一八五七）頃に景文が入夫する。彼は伊能茂左衛門節軒の指導をうけて、三〇年間放置された伊能三郎右衛門家の立て直しをおこなった。

節軒の没年は明治十九年（一八八〇）、景文の没年は、大正三年（一九一四）であるから、伊能図が明治日本の表舞台に登場する経過はすべて景文の時代であつたということが出来る。

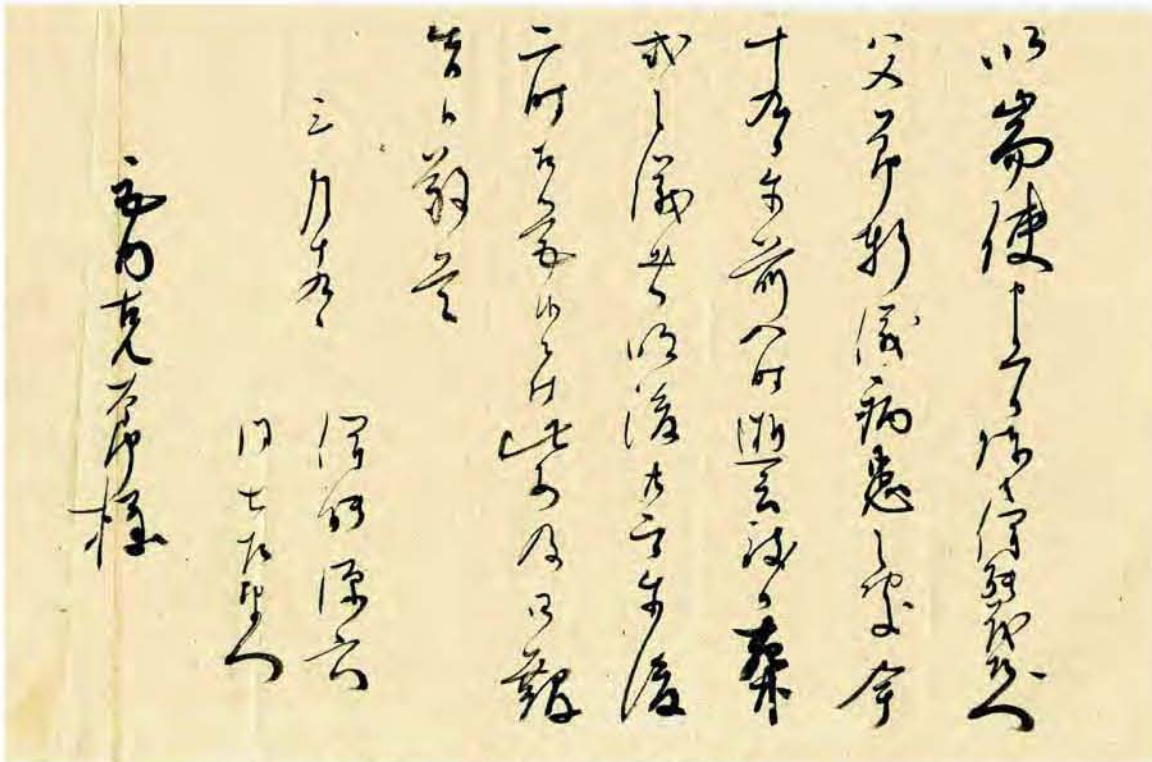
伊能家空白の三〇年と景文の入夫経緯について、研究が必要な気がする。伊能家と親戚関係との往復文

書などに手掛かりがあるかもしれない。

景文と関係があるかどうかは分らないが、伊能測量の影の功労者である桑原隆朝の書状が、これまでの調査では、伊能家から一通も出ていない。

周辺状況からは、考えられないことであるが、空白期間あるいは景文の時代に整理されてしまったのだろうか。これも大きな疑問である。

伊能節軒逝去連絡書簡（明治十九年三月十九日逝去）



伊能源六（景文）：伊能七左衛門書簡

書簡にみる人物関係

（伊能節軒・伊能源六・伊能七左衛門・宮内克太郎）

伊能源六（景文）の配は伊能茂左衛門節軒の次女（イク）で、節軒は源六の義父にあたる。

また、節軒の長女（ムラ）の婿（茂太郎）は野尻（現銚子市）の滑川家の四男で、その姉（滑川ヤス）は宮内克太郎の母親である。

伊能七左衛門成徳の配（海保やす）は源六と姉弟であり、克太郎の配（伊能多恵）の母親である。源六は多恵の叔父にあたる。多恵の弟（端美）は景文の長女（孝）の配となり三郎右衛門家を継いでいる。（宮内敏記）

解説 古文書研究家 伊藤栄子氏

以需使申上候 陳ば伊能茂左衛門

父節軒儀病患の処、今

十九日午前八時逝去致候 葬

式の儀は明後二十二日午後

二時相営候二付、此段及御報

告候 敬首（具）

三月十九日

伊能 源 六

同 七左衛門

宮内克太郎 様

*陳れば・・・のぶれば

*御報告二及び候

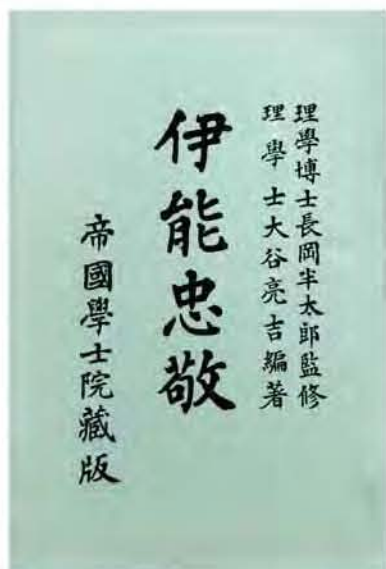
伊能忠敬関係基本図書紹介

渡辺 一郎

会員名簿を眺めると、当研究会のメンバーに、かなりの新人を迎えていることがわかる。伊能忠敬と伊能測量については、研究会発足の頃に比較すると、色々な出版社と様々な著者により相当な種類の出版物が出されている。

おそらく勉強しようと思っても選択に迷われるのではないかと思う。よって、浅学ではあるが、自身の勉強の跡をたどって、忠敬研究についての基本図書の紹介をしたいとおもう。多少なりと参考になれば幸いである。

・大谷亮吉「伊能忠敬」一九一七年 岩波書店



長岡半太郎監修により、明治末期に忠敬顕彰のため作りはじめられた著書。地球物理の専門家であった二〇余歳の大谷理学士が約一〇年かかって、完成した。七六六頁の大著。経緯は会報に前田幸子さんが詳細に発表されている。(大正六年初版)

内容については、永く伊能忠敬伝の決定版とされ、古典ともいわれてきたが、保柳睦美氏の研究および伊能研・諸兄姉の研究成果を踏まえると、そういう状況ではなくなっている(特に伊能図関係)ので、注意が必要である。

大谷氏の実家が秤屋さんだった関係かと思うが、測量器具の記述は詳細で、この章の記述については、本書を上回る著述は見当たらない。主要図書館はほとんど所蔵している

・千葉県史編纂審議会「伊能忠敬書状」一九七三年 千葉県

千葉県が編纂した伊能忠敬書簡集である。大部分が、第七次測量、第八次測量、測量終了後のものであり、年代の配置順がバラバラで、読みにくい欠点がある。国の重要文化財指定の際に、伊能家から記念館に寄付されたものを収載。

伊能忠敬書状は本書のほかにも各地に保存されている。

・保柳睦美編「伊能忠敬の科学的業績」一九七四年 古今書院



大谷批判の論文集といつていいだろう。大谷著書は成果物である地図に関する記述が不十分であり、添付資料にどうして伊能図をつけてくれなかったのかと疑問を呈する。

しかしながら、大谷著書と本書は、しっかり伊能忠敬を調査する場合は必須といつていいだろう。左記三点のような資料も掲載されており、参考となる記事も多い。

・佐藤一斉選「伊能忠敬墓碑銘」

最初に書かれた忠敬伝というべきであろうか。といっても佐藤一斉(昌平校の学頭)が忠敬を詳しく知っていたわけでもないだろう。当時の家族関係者からの聞き書きと考えられる。中にはおかしな話もはいっている。

・佐野常民述「伊能先生事蹟」

明治初期の忠敬顕彰活動のキッカケとなった東京地学協会における講演記録。伝記第二号といえるかもしれない。こちらも伝聞をまとめたらしく、顕彰の辞を除くと、理論的な研究成果とは言い難い面がある。

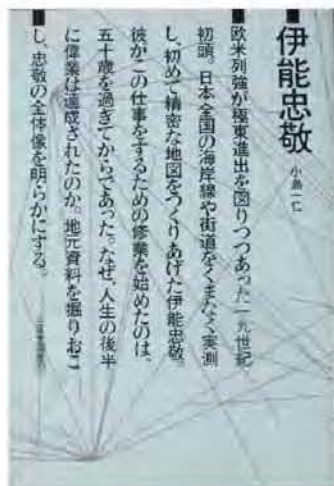
・渡辺 慎「伊能東河先生流量地伝習録」

伊能測量の方法を門弟の渡辺慎(尾形慶助の後身)が記した唯一の資料。各地に写本が数部残っているが、ここで活字化されているのは有難い。測量法に関する原典である。測量法を調べるときは、ぜひ参照して欲しい。

・有坂隆道「日本洋学史の研究」創元社一九六八年

師匠の高橋と間重富の間で交換された書簡集「星学手簡」の解説文が掲載されている。注釈もあり、大変参考になる。

・小島一仁「伊能忠敬」(三省堂選書)一九七八年



佐原における伊能忠敬について、原史料にあたり、きちんとまとめられた名著。分量もほどほどで、読みやすい文章である。

・松崎利雄「江戸時代の測量術」一九七九年
江戸期の測量術についてわかりやすく解説。

・渡辺敏夫「近世日本天文学史」恒星社厚生閣一九八六年
寛政の改暦の経緯、麻田天文学、高橋出府、など当時の暦学、天文ならこの本である。

・千葉県史料「伊能忠敬測量日記二」一九八八年
千葉県

伊能忠敬記念館に二種類ある測量日記のうち、伊能忠敬先生日記を底本として、千葉県で現代文に訳された日記。なぜか、第五次測量で終わっている。本資料と似たような資料として、各地で関係地域のみで測量日記を出版したものが、いくつか見られる。

・洞富雄「間宮林蔵」吉川弘文館一九九〇年
林蔵の研究書は沢山あるが、一つだけ挙げる。

・井上ひさし「四千万歩の男」一九九〇年 講談社



広く知られている小説である。必読書ではないが、私見を記しておく。

井上氏がオーストラリア旅行中に、伊能忠敬Ⅱ人生

二山説を思いつき、大河ドラマに、ということを書き始めたという。わけは知らないが、大河にならないことになって、途中で中断された。

無味乾燥な測量日記に同時代の面白い話をつけ加えて楽しく読ませてくれる。さすがに筆力である。ただ、本人がいつているのだが、昼間は日記があつて誤魔化せないで、事件は夜おこした。

昼間は史実だが、夜はフィクションなのでその積りで読んで欲しい。それから、カバーしている時期は、第二次測量の伊豆半島あたりまでなので、伊能測量全体の一〇分の一以下だろう。しかし、彼はこの本を書く為に事務用本棚二本分の資料を集めており、その中に測量日記原文の影印本も交じっていたので、ビックリしたことがある。勿論、ここまで述べた資料など全部揃っていた。

余滴（追悼 井上ひさしさん）

なぜ、そんなことを知っているかといえば、伊能ウオークを検討していた頃に、「忠敬が測量中に門弟に測量術を講義した講義録があつて、井上ひさしが古書店から二百万で買った」という話を聞いたからである。そんなものがあるなら大変と、早速、見せて貰おうと思い、秘書を通じて申し込んで、川西町のこまつ座まで家内と出かけたことがある。

結果は大発見ではなくて「測遠術問答」。富山の石黒信由との問答をまとめたもので、富山の高樹文庫にも伊能忠敬記念館にもある資料だった。

これが、二百万？ 資料に惜しみなく資金を投じるから面白い種が集まるのだな、と感心したのを覚えている。

こまつ座は川西町が作った文化施設で、駅のすぐ裏にあつて図書館も併設されていた。劇場では井上ひさしの作品が毎年上演されるが、数日興行すれば町民は全部見てしまうので、他の劇がかかっても、空いていることが多いとのこと。

図書館の方は、井上ひさしが蔵書七万冊を寄付して

始められたという。井上さん所蔵の図書も預けられていて、図書館の職員であり、井上さんの秘書でもある方がいて、管理しておられた。

井上さんが買った本は整理してしまっておき、必要に応じて指示がくるので、宅配便で送るのだという。川西町では井上さんは超有名な人だったが、すごく効率的な蔵書管理システムだと思った。

・渡辺一郎「伊能測量隊まかりとおる」一九九七年
N T T出版

一九九五年にフランスから伊能中図を佐原に招聘と決まったとき、日経新聞が最終頁の文化欄に大きくとりあげていただいたが、その文言の片隅に集めた資料で本を書きたいとおいたところ、古巣のN T Tの出版子会社の編集者から話があつて、生まれて始めて書いた本である。

伊能諸図の制作年代、特徴を整理して体系化を試みていたし、各地の村々の測量対応に関心を持って資料を集めており、また世田谷伊能家にあつた珍しい資料にも多く接していたので、これらをもとに執筆したら膨大なものになってしまった。

一般に書物は分量、定価、発行数など、出口戦略を決めてから作られるが、そんなことは少しも知らなかったし、依頼する方も、何が出来るか書かせて見てからというような、軽い気持ちだったのだろう。

頑張つて資料を整え、初版三〇〇〇部、三八〇〇円という、売れるかどうか分からない、とんでもない本が出来てしまった。

たまたま伊能ウオークを検討中だったので、氣勢を上げるために出版パーティが開かれたり、内容が珍しかったため、読売以外の全中央紙の書評欄でも取り上げられた。

幸運に恵まれて二カ月で再刷となり、六刷までおこなわれて約七〇〇冊を完売し絶版となった。残部はフロア展事務局保有分のみである。

・伊能忠敬研究会編「江戸東京博・伊能忠敬展図録」
伊能忠敬と伊能図 一九九八年

江戸博の担当者から「伊能忠敬展」ではお世話になっているが、研究会には法人格がないので、共催とか後援とか協力として名前を載せることはできないといわれる。いまなら、そんな失礼なことは、まず考えられないが、当時では致し方なかった。

それでは、図録に名前を残そうということになって、伊能忠敬研究会編として会員各位に分担執筆をお願いしたもの。制作者は、アワ・プランニングで、発行江戸東京博物館として一万部を会期中に完売した。現在流通している「忠敬と伊能図」は、同内容でアワ社が増刷した分である。



本書は、グラビヤで伊能図、測量機械などを紹介した初めての書物で大変注目された。

・渡辺一郎「伊能忠敬の歩いた日本」一九九九年

「伊能測量隊まかりとおる」はいいけど高すぎる、また、ボリュームが大きすぎる、御用とお急ぎなのだ、という意見があったので、ちくま新書として刊行した。「まかりとおる」の要点をまとめたもので、一万二千部刷ったがいまは完売して絶版。古書しか入手できない。

・佐久間達夫「伊能忠敬測量日記」全六巻、別巻一定価七五、〇〇〇円 一九九八年 大空社 絶版

私が日経文化欄で紹介されてから、誰か他の人を紹介してよ、といわれて佐久間氏を紹介したところ、伊能忠敬記念館の館長勤務の傍ら、タイプを購入して測量日記を現代語訳した話が掲載された。

それがキツカケで大空社から話があつて刊行されたと考えられる。佐久間氏の労作で全国の主要図書館に収蔵されている。千葉県史料の測量日記とちがいが、清書本を底本としている。

ただ、佐久間氏は古文書の専門家ではないので、多少誤読が見られるが、専門家が手を出さないことに取って挑戦して、全編完訳されたことに心から敬意を表している。

最近、私を中心とする有志で、イノ・ペディアをつくる会を結成し、国宝となつた伊能忠敬測量日記の原文をDVD化した。これと佐久間日記を対照して、完璧な訳本を作成し、注釈もつけて、DVD化できれば、素晴らしいと思っている。ライフワークともなる仕事です。御希望の方がおられたら、連絡をお待ちします。



・渡辺一郎・鈴木純子「伊能忠敬の地図をよむ」

二〇〇〇年 河出書房新社
伊能図のことだけを書いた唯一の書籍。グラビヤが多い。伊能図について体系的に知りたい方は本書をご覧ください。



約一〇年前に発売。三刷を重ねて、一万四千部完売したが、好評なので、鈴木純子さんに共著者になっていただき、最近の諸発見の経過を追記して六千部増刷した。

旧版をお持ちの方の追加購入が多いという。巻末の「現存伊能図一覧表」には全世界に散在する伊能図の所在と概要を明記している。

・伊藤一男「新考 伊能忠敬」二〇〇〇年 岩波書店出版

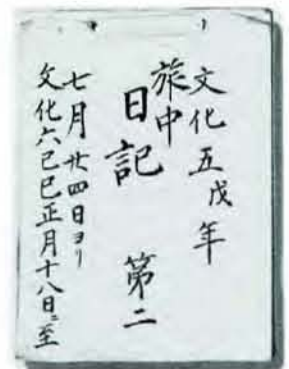


著者は故人になられたが、九十九里における史料をよく発掘しておられる。大谷氏がいい加減な伝承で片づけている部分について史料で検証されている貴重な研究である。

・安永純子「伊能測量隊員旅中日記について上下」

愛媛県歴史文化博物館研究紀要六号二〇〇一年
知られている唯一の測量隊員日記の紹介。柴山伝左

衛門作成の四国測量
の日記を解読し注釈
されている。



愛媛県歴史文化博物館所蔵

・渡辺、清水、長岡 編「東京国立博物館蔵 現寸複製
伊能中図」二〇〇二年 武揚堂



伊能図百科事典を兼ねた伊能中図の切り図集。東京国立博の中図を眺めるならこの本。

・渡辺一郎編「伊能忠敬測量隊」二〇〇三年 小学館
著者としては、これまでに作った本のなかでは一番よくまとめたつもりで、佐原から伊能図完成までを記述したが、不評で売れ行きは一番悪い。ネーミングが悪いという記者がいる。一部の読者から英訳本を出して、世界にPRしては、といわれたのが慰めである。

・アメリカ大図展実行委「アメリカにあった伊能大図とフランスの伊能中図」二〇〇〇四年
アメリカ大図展の図録。アメリカ大図の模様はこの一冊で充分。フランス中図の部分と全体も掲載する。渡辺、鈴木が中心となってまとめた。

・伊能忠敬研究会編「伊能忠敬未公開書簡集」
二〇〇四年



世田谷伊能家にあった忠敬の書状の下書き集である。現在は、大部分が国宝に指定されている。伊能図の出版企画を思わせる下書きがあり、歴史の通説に影響がありそうである。非売品、残部僅少。希望者は二千元同封し事務局へ。

・渡辺一郎監修「伊能大図総覧」上・下二〇〇六年
河出書房新社



アメリカ大図、国会図書館大図、海上保安庁大図等によって全伊能大図を復元した学術出版。重量二〇キロ、定価約四〇万の豪華本。個人向きでなく、図書館向き。限定三〇〇部。発売一カ月で完売したまぼろしの伊能図誌。渡辺、鈴木、星埜、西川の各会員執筆。

大谷「伊能忠敬」に対抗する現代の大著。日本国際地図学会から作品賞受賞。

・星埜由尚「伊能忠敬」(日本史リブレット057)
八八頁二〇一〇年 山川出版社
補助教材、副読本的な出版で、内容は正確を旨としている。



・星埜由尚「完全復元伊能図」二〇〇九年



完全復元伊能図フロア展の図録。アメリカ大図のなかで地形的に面白い部分を鮮明な画像として抜き出して解説している。

あとがき

思いつくままに基本資料を挙げてみた。伊能図に偏しているかも知れないが、伊能忠敬と伊能図については、ほぼ網羅していると思う。その他関係人物、同世代史についても定評ある研究書は存在するが、目を通していないので書かなかった。

京都大学図書蔵伊能大図稿本・天理大学図書蔵伊能中図の閲覧調査の報告

去る四月二十三（月）、二十四日（火）京都大学図書と天理大学図書館を訪問し伊能図の閲覧調査を行いました。

両図書館とも、研究目的による特別な利用ということで、人数が厳しく制限されていたことから、人数枠を限定した有志による調査となりました。

事前に各人が貴重資料閲覧願（京大）、特別本閲覧願（天理大）を提出し、閲覧許可書を持参しての閲覧となりました。

二十三日、十二時半に京都駅前に集合し、バスで京都大学に向かいました。

「京大総合博物館」のセミナー室を控え室として用意して頂き、そこから隣の「附属図書館」に移動しました。貴重図書閲覧許可書と身分証明書を提示して入館、貴重品を除くカメラや携帯などをロッカーに預け、係員の誘導で閲覧用の個室に向かいました。

閲覧は図書館の担当職員二人が終始立会いする中で十四時〇〇分〜十六時三十分の間行われました。資料撮影は禁止の為、出来るだけ頭に覚え込ませようと皆



京都大学図書館前で



調査後許可を得て閲覧室のみ撮影

さん真剣の様子でした。予定の二時間半はあつと言う間に過ぎてしまいました。

夕刻は、明治の元勲山縣有朋の別邸であった「がん



高瀬川源流庭園二条園

水する人工川で、この庭園が川の起点（源流）にあたります。

園内をぬけた木屋町二条には「一之船入」があり、森鷗外の『高瀬舟』の舞台でもあります。

二十四日は京都駅前の宿舎より、歩いて近鉄京都駅から乗車、新祝園で乗換えて天理駅到着。

早朝の閑散とした長い長いアーケード街を時々ハッピ姿の信者とすれ違いながら歩くと、ひととき大きな建物の天理教会本部前に出ました。ここから、人影まばらな広い道を歩くこと十分、重厚な天理大附属図書館に到着しました。



懇親会で

こ高瀬川源流庭園二条苑」の素晴らしい庭を散策ののち、邸内で会食、懇親を深めました。高瀬川は鴨川の分流「みそそぎ川」から取

天理大学図書館も、京大図書館とほぼ同様な手続きをした後、ロッカーに荷物を預け、手を洗い、入館したのは予定通りの九時二〇分でした。こちらも図書館員二名の立会い下の閲覧となりました。京大同様、天理大も、あつと言う間の二時間でした。

帰路はタクシーに分乗して天理駅まで行き、そこで自由解散となりました。

・参加者

渡辺 一郎
星 埜由尚
鈴木 純子
伊能 洋
高安 克己
高宮 勲
高宮 リヨ子
山本 公之
宮内 敏
竹村 基

・現地参加者

京大関係者
那須 たみ子
（見学懇親会）
岩村 哲
（懇親会）



伊能図を直接撮らない条件で1枚のみ撮影



天理大学附属図書館

閲覧調査報告

この報告書は参加された方々から頂いた資料を基にまとめたものです。資料撮影禁止のため、画像付で報告出来ないのが残念です。（京大図は同図書館Ⅲの貴重書画像で見られます）。

○京都大学所蔵資料

京都大学附属図書館では、中図、小図、合計9枚の伊能図稿本を閲覧しました。時間が限られていたため、十分な記録はとれませんでした。ひとまず簡略なメモを掲げます。

地図は折り畳み、袋に入れて保管されている。

袋の表・裏に下図のような墨書がある。袋表書きには対州全図始め合計九葉の図名が書かれている。

「四国淡州沿海地図」、「九州六箇国之内沿海図」は中図、その他は大図である。

袋裏書きには伊能三郎右衛門の親戚筋にあたる内田順信氏の由緒書があつて、本図群の来歴の確かさを示している。

① 袋書き(表)

一、対州全図

壹岐国図

四国淡州沿海地図

九州六箇国之内沿海図

大隅国 馭謨郡屋久島沿海図

全国 熊毛郡種子島沿海之図

肥前国（平戸島・生属島・黒・大島・高島）沿海之図

全 五島沿海上下式景之図

5-84
イ-1
貴別

袋書き(裏)

(内田 印)

下総佐原伊能三郎衛門忠敬君

従祖父佐左衛門義制分與ヲ受ケ

我家ニ伝リ居 今尚親戚伊能源六

君拙宅ニ遊ビ其図ヲ相見、祖父忠敬

之分間縮図ニシテ大中小之三部之内

中絵図則是也ト確言ス以テ内田家

之秘蔵トシテ世々相伝フ可キ物トス

内田順信 印

京都大学
109 119
図書

② 対州全図

大図（対馬部分）、稿本、332×101 cmサイズで折本。裏打ちナシ、針穴アリ、経緯線ナシ、方位線ナシ、虫食いナシ、傷ナシ、地名朱字、村名村界郡界（黒の極細）上から朱で大きく重ね書きしたもの多い、文字は達筆、測線 細い

壹岐国図など他の図に比してやや粗の感あり、対馬北端近く、鰐浦、佐須浦に「朝鮮国渡海港」と朱で表記あり

縮尺参考：南端の神崎から北端まで約160 cm

（メジャーを直接あてることが出来ないで概略値）

この計測値から縮尺を算出すると、約1:45,150となる。大図とされており、表現方法は大図相当であるが、この図は縮小された特殊な縮尺である。

③ 九州六箇国之内沿海図

中図（九州第一次）、稿本、186×141 cm、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、経緯線ナシ、方位線ナシ、方位図、接合子ナシ、虫食いナシ、傷ナシ、汚れアリ（二

ヶ所）読むに支障ナシ、文字は丁寧、色は対馬に同じ、接合子ナシ、境界ナシ

縮尺参考：大隅の先端から門司 150 cm

この値から概算した縮尺は約1:217,000で、中図縮尺とほぼ一致する

④ 大隅国馭謨郡屋久島沿海図

大図（屋久島）経緯線ナシ、方位線ナシ、接合記号ナシ、極めて精緻（描画壹岐に同じ）、中央に方位円記入アリ

縮尺参考：78（東西）×73（南北）cm

算出縮尺 約 1:35,897

⑤ 壹岐国図

大図（壹岐）、88×82 cm、大図、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、経緯線ナシ、方位線ナシ、方位円彩色ナシ、接合子ナシ、

控え図か試作図ではないか？

村名赤、界黒、赤の点何？、全部塗りつぶし、字は達筆。村名は黒字細い、神社：鳥居図と神社名を書く、極めて精緻、絵がきれいで精密、崖の様子（海岸海湾の岩などすべて写す）

縮尺参考：46（東西）×52（南北）cm

算出縮尺 約 1:34,615

⑥ 四国淡州沿海地図

中図（四国及び淡路島）稿本、下図 134×172 cm、折本、裏打ちナシ、針穴アリ、中図なのに方位線、経緯線ナシ、虫・傷ナシ、合印すべてナシ、国名、郡名ナシ、

最終版の中図より地名は詳しい。測線 地名 黒、図の左に九州の遠望を描く。

⑦ 肥前国松浦郡平戸領

大図（平戸嶋、生属嶋、其外小嶋、黒島、大島、度

嶋)、下図か、169×119 cm

折本、針穴アリ、裏打ちナシ、方位線ナシ、経緯線ナシ、方位円未完〇のみ、

図に切り張り箇所(平戸島南端および的山大島、修正部分をくりぬき、修正図を貼りこむ)アリ。

チェックと思われる朱の点が多数アリ

裏面墨書

自 調川村^①印 街道海辺巡りて 至江迎村字白岩^②印
附平戸嶋、生原嶋、其外小嶋、黒島、大島、度嶋

海付四 校合済(校合済は朱筆)

緑は青みをおびる。

紙 28×41 cm

縮尺参考：平戸島南端から

的山(アズチ) 大島まで 114 cm

算出縮尺 約 1:35,526

⑧ 五島沿海上下式景之図 上

大図、稿本、172×95 cm

裏打ちナシ、針穴アリ、

方位線ナシ、経緯線ナシ、方位円未完、全部着色測線部分を白く塗り残す。

宍岐と同じく地名小黒を大朱で訂正、チェック点アリ。測線は崖下の砂浜を走る。領分名朱で大きく追加。

中通島東方の相島(現在の地図では相ノ島)に「當島本圖可省」との朱書あり。

裏面墨書(二か所)

五島 上 校合済 / 肥前五島之上

⑨ 五島沿海上下式景之図 下

大図、稿本、117×161 cm 接合子ナシ、

朱の測線細い。

描画形式「上」に同じ、全部着色「上」に同じ

裏面墨書(二か所)

五島 下 校合済 / 肥前五島之二

⑩ 大隅国熊毛郡種子島沿海之図

157×178 cm

精緻、方位円未完〇のみ、切り張り箇所アリ。

浜津脇に「止宿」の記述アリ、「測処」記述アリ(島

間・国上浦田・国上村濱脇・川向村見弘・由久村熊

野)、合印は湊(記号の形は完成図と小異)、神社

○天理大学所蔵資料

天理大学附属天理図書館では「実測日本全図(伊能

中図)」の写本、一セット十枚を閲覧しました。通常

八枚で構成される中図ですが、このセットは「佐渡島」

「対馬・五島」を別図とする十枚構成を特色としています。

同図書館神崎順一氏による報告(注)から少し抜粋

すると、本図は昭和二六(1951)年に天理教二代真柱

中山正善氏より寄贈、中山氏の入手(反町弘文莊經由

もその頃であったと思われる。各図とも裏面に「伊能

中図写十枚ノ内口号」という標題・号数とそれぞれに

含まれる国名が列記されている。

地図は敷き写しで針穴はない。書外題に北海道とあ

るところから標題記載の時期は明治二年八月以降とい

えるが、地図の書写時期は不詳である。記号は国境

(縦の平行線またはその両端をとじた長方形)のみ。

ほかに方位線。経緯線の作図に特色がある、など。

また北海道西部の図の経度表示に一度分の誤りがあ

り、同じ誤りが北海道大学所蔵図にもあるといひます。

各葉ともにコンパスローズを欠いています。

① 第壹号(北海道東部)

号数は裏面の墨書による(各図共通の「伊能中図写

十枚ノ内」、およびそれぞれの国名は省略し、収録地

方名を付記した、以下同じ)(本図は北海道北部と記

した「北」の脇に東と書き入れている)

針穴ナシ、測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、合

印ナシ、裏打ちアリ、虫食いアリ。

地名など丁寧。鉛筆使用のあとアリ、経緯線描画に

コンパス使用のあとあり(陸軍写図「アメリカ大図」に

似ている)

② 第貳号(北海道西部)

測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、裏打ちアリ、

虫食いアリ。全体的に、きれいな写、川の名多く記載

亀田半島は伊能図の形を残すが、ぼかしではなく輪

郭線で描かれている。

渡島大島 放射のみ(到達点不記)の方位線アリ

(東四分、東五分半、東九分、東拾分半)

③ □□号(東北、□は欠損)

虫食いアリ、測線アリ、方位線アリ、経緯線アリ、

平地に点線の記載あり(平地を意味しているのか)他

になし珍しい。

丁寧な描写、測量出来ていないところ多く現代の地

図に比較して不正確。

④ 三号ノ附属(佐渡)

新潟の海岸一部と佐渡を描く。新潟海岸は地形のみ

で地名なし。通常の中図の構成では佐渡は③に含まれ

る。佐渡を別図にする方式はこのセットの特色の一つ。

佐渡は丁寧な写、虫食いアリ、方位線アリ、経緯線

アリ、裏打ちアリ、鉛筆使用あとアリ。

⑤ 四号(関東)

虫食いアリ、経緯線アリ、裏打ちアリ。上端部に矢

印・十字状の方位記号および尺度目盛アリ、山の表示

がやや単調。富士山方位線の一部（南西、北西部分）方位数値記載ナシ。

⑥ 五号（中部・近畿）

三河あたり中心、虫食いアリ、裏打ちアリ、経緯線アリ、中度アリ、鉛筆使用あとアリ。
丁寧な写

淀川デルタの河道、京都市内の川詳細（他の図も多分同等）

琵琶湖の文字注記：北東 ↓ 南西

⑦ 六号（中国・四国）

虫食いアリ、裏打ちアリ、経緯線アリ。

⑧ 七号（九州北部）

長門周防、対馬、平戸島あるが杓岐が書かれていない。

輪郭の青と測線の赤が重なって見づらいところがある。虫食いアリ、経緯線アリ。

⑨ 七号附属（対馬・五島）

杓岐も描く、虫食いアリ、方位線アリ、経緯線アリ
朝鮮半島に方位線、日本列島と大陸の位置関係を正確につなげて表現したのは伊能図がはじめて（星埜）
九州本土、平戸島は輪郭線のみ。

⑩ 八号（九州南部、種子島、屋久島）

虫食いひどい。経緯方位アリ、きれい、地名が少ない。

標本調査的に大隅半島南東岸（大寄〜早寄間）の地名を記録、ペイレ中図と比較する。

十二地名中、観音崎：観音岬、立崎：立神、島津加村：邊津加村、坂本村：上坂本村の異同あり。

両図書館のご厚意により、貴重な資料に集中的に接する充実した時間をもつことができた。しかし、限られた時間、限られたスペース、また、旅行先のことでもあって、対照したい資料の持ち合わせもないため、個別の詳細な検討はできていないが、今後、精査を行う際の着眼の参考となるよう、上記の観察結果をまとめておこう。

京大図は来歴のたしかな伊能図の稿本で、中図と大図よりなるが、大図のうち「対馬図」は1:36,000の大図縮尺ではなく、概算値であるが約1:55,000と縮小された図であることがわかった。

精粗は必ずしも均一ではないが、全体として精写図である。

大図各図と四国中図は最終成果としての「伊能図」にいたる経過を示す原稿図、まさしく稿本としての性格を示している。

切り張りによる丁寧な修正、校合済という朱書（裏面）、確認チェックと思われる朱点、村名の表記など、とくに地名表現について前半のメモを補足しておく。

伊能図では国、郡の境界と測線が交わる地点に、大図の場合は二つの国／郡名を並記、中図の場合は国を二重の長方形、郡を長方形の枠内に広域地名として表示し、国境、郡境は記号で示すが、この稿本群では記号はつかわず、境界部分は「界」としてその下に境界を接する二つの郡、村名などを並記する。別に正規の村名も記されるので、地図上の文字は完成図より多い。村名や界などの記載を含む小さな墨書に重ねて、一回り大きい朱文字が最終的な表記の選択を示すようだ。完成図との比較によって確認してみたいところである。完成図では村の境界は示されていないが、この図群では村境まで「界」として表されているところが特色である。四国中図も類似の表現がなされている。また種子島などに「止宿」「測処」と記された場所があり、記号化への道筋を示している。

天理中図は天測地等の記号を欠くが、全体として最

終版中図の精細な写本である。複数の手で写されているとみられる。書写年はわかっておらず、伝写の系統を含めての追究が必要であるが、経緯線の作図などに鉛筆が使われており、明治期の作業である可能性が高い。経緯線のうち経緯線の大部分は点線で表示されている。コンパスを用いた作図の痕跡などもあり、経緯線網作図に試行的なものがあつたのかもしれない。

京大図の場合は来歴も明らかで、地図の性格もわかりやすい。大図写本と照合することにより、伊能図作成の過程をより具体的に知ることができるだろう。一方、完成図の写本である天理図について、未知の来歴を推定することはなかなかの難題である。ある程度の手がかりを得るには他の現存図との地名などの照合も必要であろう。ちなみに、琵琶湖の文字注記は本図では北東から南西方向に記されており、後に確認したところでは、東大、成田山所蔵図が同方向で、東博およびペイレ図はその逆である。⑩に記した地名の比較は、地名（集落等）の少ない部分のため標本として適当ではないかもしれないが、地名表記についても詳細な検討が必要なことを示しているといえよう。

注・神崎順一「天理図書館所蔵『大日本沿海輿地全図』中図」『地図』34(2) 1996



伊能家家紋
違い鷹の羽

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【表中赤色文字は改訂増補部分】

【第二次測量】

(本州東海岸)

自 享和元年四月二日 至 享和元年十二月七日

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
享和元年四月	(1801)					
二	(5. 14) 昼食	品川	東京都品川区	料理茶屋村田	富岡八幡宮参詣	九十
三	(15)	同	同	茶屋新田屋平三郎	郡蔵外2名、大森より測量手分をなし羽田へ相回しける	九十
四	(16)	保土ヶ谷宿	横浜市保土ヶ谷区	鶴屋十右衛門	阿州候出立に付、宿替	九三
五	(17)	本郷村	横浜市保土ヶ谷区	桔梗屋利兵衛	六郷川幅を測り地図に初。恒星測定	九三
六	(18) 昼食	滝頭村	横浜市磯子区	組頭幸蔵	郡蔵外2名、川崎より大師河原へ測量手分	九三
七	(19)	富岡村	横浜市金沢区	十郎左衛門	雨天逗留、地図仕立	九三
八	(20)	同	同	同	雨天逗留、地図仕立	
九	(21) 昼食	町屋村	横浜市金沢区	五郎左衛門	船便で江戸表へ書状を出す。恒星測定	九三
十	(22) 昼食	浦郷村	横浜市金沢区	市左衛門	能見堂迄測量。柳筆山地蔵院にて所々測量	九三
十一	(23) 昼食	横須賀村	横須賀市	名主鈴木忠五郎	恒星測定	九三
十二	(24)	走水村	横須賀市	名主七左衛門	恒星測定	九三
十三	(25)	西浦賀	横須賀市	伊勢屋忠兵衛		九三
十四	(26)	上宮田村	三浦市	名主丹藏		九三
十五	(27)	三崎町	三浦市	浅屋与治右衛門	朝七ツ半頃大地震。城ヶ島役人来て測量を聞、城ヶ島の周囲を間に舟行も不成、又道も無之様を申すに付遠見遠測に成	九三
十六	(28)	下宮田村	三浦市	名主新三右衛門	先年白川候止宿にて白川侍従宿札あり	九三
十七	(29)	佐島村	横須賀市	名主青池儀兵衛	雨天逗留	九三
十八	(30)	同	同	同	雨天逗留、江戸書状出す	
十九	(31)	同	同	同	雨天逗留、江戸書状出す	
二十	(6. 1)	小坪村	逗子市	年寄十郎右衛門	恒星測定	九三

享和元年五月		(1801)				
一	(6, 11)	熱海村	静岡県熱海市	相模屋要右衛門	持病痰未快復。日金完山、十国五島眺望、測量を心掛 地図下書も少残	一〇一
二	(12)	同	同	同	雨天逗留、下絵図認、江戸へ届状相認出す	
三	(13)	同	同	同	雨天逗留、下画図認 名主所持の日金完山より十国、五島眺望の図を写す	
四	(14)	網代村	熱海市	名主古谷小八	網代観音に至り、中方位、小方位を以、所々を測量。 恒星測定	一〇一
五	(15)	和田村	伊東市	名主新左衛門		一〇一
六	(16)	八幡野村	伊東市	名主八兵衛		一〇一
七	(17)	同	同	同	雨天逗留、下画図認。恒星測定	一〇一
八	(18)	大川村	東伊豆町	名主四郎右衛門		一〇一
九	昼食 白田村	同	東伊豆町		堀川の海岸に穴切という所あり。岩石自然と洞と成広 し。舟を乗入みるに海水深く満、岩上にも洞穴あり空見 えて明るし。	一〇二
	(19)	稲取村	東伊豆町	名主善四郎		一〇二
十	(20)	浜村	河津町	名主幸左衛門		一〇二
十一	(21)	白浜村 長田	下田市	大蔵山長田寺		一〇二
十二	(22)	須崎村	下田市	名主七右衛門		一〇二
十三	(23)	下田町	下田市	長野庄左衛門	恒星測定	一〇二
十四	(24)	同	同	同	下地図認	
十五	(25)	同	同	同	午中太陽測定大浦灯明堂より所々測る。恒星測定	一〇二
十六	(26)	同	同	同		

二	(2)	江ノ島	同 藤沢市	夷屋吉右衛門	光明寺、浄土宗の大寺なり。鶴ヶ岡八幡宮へ参詣。無測 にて建長寺、円覚寺、大仏を回る	九三
二二	昼食 江ノ島	同	同 藤沢市	夷屋吉右衛門	江ノ島三弁天へ参詣	九三
	(3)	茅ヶ崎村南郷	同 茅ヶ崎市	江戸屋八郎左衛門		九三
二三	中食 大磯瀬師町	同	同 大磯町			九三
	(4)	山西村 梅沢	同 二宮町	鳥屋藤八	恒星測定	九三
二四	(5)	根府川村	同 小田原市	名主広井長十郎	上下6人酒匂川を運台で渡る。恒星測定	九三
二五	(6)	吉浜村	同 湯河原町	名主彦右衛門	根府川関所で関所役人に通行手形のこととがめられ る。恒星測定	一〇一
二六	(7)	熱海村	静岡県熱海市	相模屋要右衛門	雨天逗留地図下書認。恒星測定	一〇一
二七	(8)	同	同	同	地図下書認、持病の痰発病	
二八	(9)	同	同	同	雨天逗留地図下書認	
二九	(10)	同	同	同		

十四	十三	十二	十二	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	享和元年六月 (1801)	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
(24)	(23)	(22)	(21)	(20)	(19)	(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	中食 藤沢宿	昼食 梅沢	(7, 11)		(27)	(28)	(29)	(30)	(7, 1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
同	同	同	同	同	同	同	同	深川黒江町	川崎宿	戸塚宿	同	平塚宿	小田原城下	箱根宿	同	同	長津呂村	子浦村	岩地村	井田子村	同	宇久須村	土肥村	戸田村	江梨村	久連村	口野村	三島宿
同	同	同	同	同	同	同	同	東京都江東区	同 川崎市川崎区	同 横浜市戸塚区	同 藤沢市	同 平塚市	同 二宮町	神奈川県箱根町	同	同	南伊豆町	同 南伊豆町	同 松崎町	同 西伊豆町	同	同 西伊豆町	同 伊豆市	同 沼津市	同 沼津市	同 沼津市	同 沼津市	同 三島市
同	同	同	同	同	同	同	同	忠敬隠居宅	尾張屋半兵衛	信濃屋紋治郎		江戸屋勘兵衛	久野屋勘右衛門	山本屋喜右衛門	同	同	名主与右衛門	名主甚兵衛	名主幾右衛門	利右衛門	同	名主彦左衛門	名主源八	名主弥兵衛	名主平左衛門	名主久右衛門	名主武兵衛	喜兵衛
	恒星測定		恒星測定				桑原隆朝、高橋先生へ行。 蝦夷御会所へ帰府届も申上げる	町々量程車にて測量						箱根権現を拝謁し御閑所より宿まで測量。恒星測定	阿弥堂の岬より所々測る		吉佐美八幡参詣。石廊権現にて所々を測る。度々雨にて難儀す。此石廊権現は伊豆の国の極南にて岩石の岬なり、熊野崎という。			恒星測定		村上嶋之丞作る伊豆の国図を得る			恒星測定	高橋先生へ書状添出す。高橋先生送付の量程車請取		
								九〇	九〇	九三	九三	九九	九九	九九	一〇一	一〇一	一〇二	一〇二	一〇二	一〇二	一〇二	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一	一〇一

享和元年七月		(1801)				
一	(8, 9)	那古村	千葉県館山市	板東三十三番札所 那古観音	朝六ツ二・三分頃大地震。恒星測定	九二
二	(10)	洲崎村	同 館山市	名主仁右衛門		九二
三	(11)	同	同	同	恒星測定	
四	(12)	同	同	同	富士大島等不見故に逗留	
五	(13)	同	同	同	雨天逗留	
六	(14)	滝口村	同 南房総市	名主兼代官 福原庄兵衛	洲崎村より富士、大山、天城、大島等を測る	九二
七	(15)	北朝夷村	同 南房総市	名主十左衛門	恒星測定	九二
八	(16)	江見村	同 鴨川市	真言宗清水山浄照寺	恒星測定	九二
九	(17)	天津村	同 鴨川市	名主弥兵衛	恒星測定	九二
十	(18)	興津村	同 勝浦市	名主孫左衛門		九二
十一	(19)	勝浦村	同 勝浦市			九二
十二	(20)	岩和田村	同 御宿町	名主庄兵衛	恒星測定	九一
十三	(21)	小浜村	同 いすみ市		恒星測定	九一

十五	(25)	同	同	同	相川町火の見前より洲崎弁天それより海辺測量	
十六	(26)	同	同	同	阿波候臣関権治郎へ中方位盤、量程車、小方位盤を渡す	
十七	(27)	同	同	同	蝦夷御会所へ出立届を申入	
十八	(28)	同	同	同	浅草高橋先生へ御暇乞に行	
十九	(29)	行徳本村	千葉県市川市	名主惣右衛門		九九
二十	(30)	原木村	同 市川市		此村先年津波にて家流、崩数合58軒、でき死村方113名、外より40人、54軒	八九
二十一	(31)	検見川村	同 千葉市美浜区	清治郎		八九
二十二	(31)	五井村	同 市原市	本陣甚五左衛門	恒星測定	八九
二十三	(8, 1)	中島村	同 木更津市	惣七郎	恒星測定	九一
二十四	(2)	木更津町	同 木更津市	名主八左衛門	恒星測定	九一
二十五	(3)	富津村	同 富津市	名主嘉左衛門	人見村に妙見あり。登山所々測る。恒星測定	九一
二十六	(4)	湊村天神山	同 富津市	五郎右衛門	恒星測定	九一
二十七	(5)	金谷村	同 富津市	名主四郎左衛門	恒星測定	九一
二十八	(6)	吉浜村	同 鋸南町	名主久右衛門	恒星測定	九二
二十九	(7)	勝山村	同 鋸南町	名主又右衛門	鋸山へ登りて所々測量。大福山日本寺へ立寄。	九二
	(8)	岡本村	同 南房総市	浄土宗金池山西方寺	恒星測定	九二

享和元年八月		(1801)	
一	(9.8)	村松村	同 東海村
二	(9)	会瀬村	同 日立市
三	(10)	足洗村	同 北茨城市
四	(11)	平潟村	同 北茨城市
五	(12)	小名浜米野村	福島県いわき市
六	(13)	同	同
七	(14)	同	同
八	(15)	四倉村	同 いわき市
九	(16)	同	同
十	(17)	下北迫村	同 広野町
十一	(18)	小浜村	同 富岡町

十四	(22)	中里村	同	白子町	名主五左衛門	九一
十五	(23)	本須賀村	同	山武市	五左衛門	八九
十六	(24)	屋形村	同	横芝光町	名主海保兵右衛門	八九
十七	(25)	井戸野村	同	旭市	名主庄左衛門	五八
十八	(26)	飯沼村東町	同	銚子市	田中吉之丞	五八
十九	(27)	同	同	同	田中吉之丞	五八
二十	(28)	同	同	同	伊能忠敬病氣。佐原伊能三郎右衛門外4名遠路見舞に来	五八
二十一	(29)	同	同	同	雨天逗留	
二十二	(30)	同	同	同	雨天逗留	
二十三	(31)	同	同	同	今宮村川岸より東下村波崎へ利根川を渡り、方位、間敷を測る	五八
二十四	(91)	同	同	同	午中太陽測定 津宮久保木太郎右衛門に武州、相州、豆州、両総州房州の海辺地図の下書を頼置、佐原よりの見舞帰る	五八
二十五	(2)	同	同	同	午中太陽測定。筑波山、日光山等を測る	五八
二十六	(3)	同	同	同	日の出に犬若岬において慶助、富士山を測る 忠敬病氣全快	五八
二十七	(4)	矢田部村	茨城県	神栖市	名主安藤五郎左衛門	五八
二十八	(5)	国末村	同	鹿嶋市	名主利左衛門	五八
二十九	(6)	吸上村	同	銚田市	田舎旅館	五八
三十	(7)	成田村	同	大洗町	名主忠治郎	五七

享和元年九月 (1801)					
十一	(18)	同	同	同	雨天逗留
十	(17)	長面浜	同	清兵衛	恒星測定
九	(16)	大須浜	同	仲兵衛	恒星測定
八	(15)	分ヶ浜	同	秋山惣兵衛 (奥州松島遊覧の知人)	船中引縄海岸測量。恒星測定
七	(14)	女川浜	同	大肝入丹野勇吉	船中引縄海岸測量
六	(13)	野々浜	同	肝入久兵衛	船中引縄島を測る。恒星測定
五	(12)	鮫浦	同	肝入善兵衛	船中引縄海岸測量。恒星測定
四	(11)	新山浜	同	三右衛門	金華山へ舟で渡り登山曇て遠山遠岬不見
三	(10)	同	同	同	雨天逗留、恒星測定
二	(9)	鮎川浜	同	肝入勘四郎	船中引縄海岸測量。恒星測定
一	(10・8)	小淵浦	宮城県石巻市	惣左衛門	船中引縄海岸測量。恒星測定

三十	(7)	狐崎浜	同	石巻市	検断佐十郎	船中引縄海岸測量。恒星測定	四八
二十九	(6)	桃浦	同	石巻市	弥右衛門		四八
二八	(5)	同	同		同		
二七	(4)	門脇村	同	石巻市	彦四郎	恒星測定	四八
二六	(3)	同	同		同	大塚浜の山に登り島々を測る	
二五	(2)	同	同		同	雨天逗留	
二四	(10・1)	大塚浜	同	東松島市	新右衛門		五二
二三	(30)	同	同		同	船中引縄海岸測量	
二二	(29)	松島	同	塩竈市	棟右衛門	不残乗船、外に舟二艘を用いて方位を測る。海上長引縄を以、舟続に測る	五二
二一	(28)	塩釜村	同	塩竈市	甚助	船中引縄海岸測量。東河・郡蔵、塩釜明神道路方位を測	五二
二十	(27)	蒲生村	同	仙台市		大風、測量不成	五二
十九	(26)	荒浜	同	仙台市	新助	前大沼にては加末津可川という。大風雨	五二
十八	(25)	関上浜	同	名取市	金右衛門	関上浜入口に名取川落口、入海へ会して大河と成	五二
十七	(24)	吉田浜	宮城県亘理町	組頭善蔵			五三
十六	(23)	原釜村	同	相馬市	長左衛門		五三
十五	(22)	同	同		同	午中太陽測定	
十四	(21)	雁崎村	同	南相馬市	名主利兵衛	恒星測定	五四
十三	(20)	塚原村	同	南相馬市	百姓の隠居宅		五四
十二	(19)	受戸村	同	浪江町			五四

享和元年十月		(1801)	
九	(14)	角浜村	同 洋野町
八	(13)	中野村	同 洋野町
七	(12)	久慈湊	同 久慈市
六	(11)	野田村	同 野田村
五	(10)	黒崎村	同 普代村
四	(9)	田野畑村	同 田野畑村
三	(8)	小本村	同 岩泉町
二	(7)	田老村	同 宮古市
一	(11, 6)	宮古町 鰐ヶ崎	岩手県宮古市
		和泉屋民右衛門	恒星測定
		尾張屋伝右衛門	恒星測定
		李左衛門	恒星測定
		太右衛門	恒星測定
		金右衛門	恒星測定
		勘六	恒星測定
		忠右衛門	恒星測定
		清五郎	恒星測定
			四六

二九	(5)	津軽石村	同 宮古市	若狭屋孫八	船中引縄海岸測量	四六
二八	(4)	山田村	同 山田町		吉里々村に前川善兵衛なるものあり。富家にて世々知る所なり。立寄て一覽す。恒星測定	四六
二七	(3)	同	同	同	雨天逗留	
二六	(2)	大槌町 四日町	同 大槌町	藤屋伝兵衛	恒星測定	四七
二五	(11, 1)	釜石村	同 釜石市	肝入市兵衛		四七
二四	(31)	同	同	同	恒星測定	
二三	(30)	唐丹村	同 釜石市	西村善太郎	船中引縄海岸測量	四七
二二	(29)	越喜来村	同 大船渡市	肝入善左衛門	船中引縄海岸測量。恒星測定	四七
二一	(28)	綾里村 湊浜	岩手県大船渡市	肝入与平治	船中引縄海岸測量	四七
二十	(27)	同	同	同	雨天逗留	
十九	(26)	門ノ浜	同 大船渡市	肝入治五兵衛	船中引縄海岸測量	四七
十八	(25)	小友村	岩手県陸前高田市	肝入与兵衛	船中引縄海岸測量	四七
十七	(24)	大沢浜	同 気仙沼市	肝入十左衛門	船中引縄海岸測量	四七
十六	(23)	小館浦	同 気仙沼市	肝入人文左衛門	船中引縄海岸測量	四七
十五	(22)	気仙沼	同 気仙沼市	日除儀右衛門 (米交易で面識あり)		四七
十四	(21)	平磯村	同 南三陸町	庄蔵	船中引縄海岸測量	四八
十三	(20)	伊里米町	同 南三陸町		船中引縄海岸測量	四八
十二	(19)	水戸辺村	同 南三陸町	義内	船中引縄海岸測量	四八

享和元年十一月 (1801)						
一	(12, 6)	蟹田村	青森県外ヶ浜町	大治郎		三九
二	中食	平館村	同			三八
	(7)	母衣月村	同 外ヶ浜町			三八
三	(8)	三厩村	同 外ヶ浜町	工藤忠兵衛		三八
四	(9)	同	同	同	江戸浅草暦局迄帰府の先触れを出す。	
五	(10)	平館村	同 外ヶ浜町	久治郎	宗平病氣服薬成さしむ	三八
六	中食	蓬田村	同	対馬九郎兵衛		三八
	(11)	青森町米町	同 青森市	西沢善兵衛		三八

十	(15)	鮫村	青森県八戸市	甚太郎	恒星測定	四四
十一	(16)	市川村	同 八戸市	兵太		四四
十二	(17)	浜三沢村	同 三沢市	嘉茂助	恒星測定	四四
十三	(18)	平沼村	同 六ヶ所村	庄八	出立、直に雪降出し風強、大吹雪と成、雪と砂を吹散し、咫をも不弁、歩行成し難く長持を小楯となして大吹雪大風をしのぎ、風間風間に歩行す。道路不測量	四〇
十四	(19)	尾鯨村	同 六ヶ所村	沖之丞		四〇
十五	(20)	泊村	同 六ヶ所村	忠七	恒星測定	四〇
十六	(21)	小田野沢村	同 東通村	肝入甚四郎	恒星測定	四〇
十七	中食 (22)	尻谷村	同 東通村	小兵衛	恒星測定	四一
十八	(23)	大畑村	同 むつ市	宇右衛門		四一
十九	(24)	異国間村	同 風間浦村	市左衛門		四一
二十	(25)	佐井村	同 青森県佐井村			四一
二十一	(26)	下風呂村	同 風間浦村	長右衛門		四一
二十二	(27)	大畑町	同 むつ市		恒星測定	四一
二十三	(28)	田名部町	同 むつ市	菊池重右衛門	此所は奥北に稀なる所にて、寺院、医師、その外表立し人々学問を好み、詩歌等をもなる人あり。	四〇
二十四	(29)	同	同	同	出合の人々も押而止ぬるにより逗留	
二十五	(30)	有畑村	同 横浜町	佐治兵衛		四〇
二十六	(12, 1)	有戸村	同 野辺地町	新兵衛		四〇
二十七	(2)	野辺地町	同 野辺地町	野坂屋与治兵衛	恒星測定	四〇
二十八	(3)	小湊村	同 平内町	寺島屋六郎兵衛		三九
二十九	(4)	野内村	同 青森市			三九
三十	(5)	青森町	同 青森市	西沢伝兵衛		三九

享和元年十二月		(1802)					
一	(1. 4)	鍋掛	栃木県那須塩原市	源吾	恒星測定	六九	
二	(5)	喜連川 本町	同 さくら市	田丸屋利兵衛	恒星測定	六九	
三	(6)	雀宮	同 宇都宮市	脇本陣 小倉平治右衛門	恒星測定	六九	
四	(7)	間々田	同 小山市		恒星測定	八七	
五	(8)	幸手	埼玉県幸手 市		恒星測定	八七	
六	(9)	草加	同 草加市	直三郎	恒星測定	八七	
七	(10)	深川黒江町	東京都江東区	忠敬隠居宅	司天台へ立寄。黒江町へ出立より二百四十二日にして帰府せり。	九〇	
七	(12)	野辺地町	同 野辺地町	野坂屋与治兵衛	大吹雪のため引帰して逗留	四〇	
八	(13)	同	同	同			
九	(14)	七ノ戸	同 七戸町	江渡宇右衛門	宗平病苦に付逗留	四四	
十	(15)	同	同				
十一	(16)	五ノ戸	同 五戸町	野沢屋伊八	恒星測定	四四	
十二	(17)	三ノ戸	同 三戸町	山野辺源兵衛	恒星測定	四四	
十三	(18)	一ノ戸	同 岩手県一戸町	太郎兵衛	恒星測定	四九	
十四	(19)	沼宮内	同 岩手町	甚兵衛	御堂村、此辺より北上川初る	四九	
十五	(20)	盛岡城下 石町	同 盛岡市	平野屋八左衛門	盛岡候より目録を被下、御用先を以辞退す。	五〇	
十六	(21)	同	同	同	恒星測定		
十七	(22)	花巻 川口町	同 花巻市	養老屋治兵衛	恒星測定	五〇	
十八	(23)	水沢	同	本陣丈助	恒星測定	五一	
十九	(24)	一関	同 一関市	白土屋宮蔵	恒星測定	五一	
二十	(25)	築館	宮城県 栗原市		恒星測定	五一	
二十一	(26)	吉岡	同 大和町	笠原屋才兵衛		五二	
二十二	(27)	仙台城下 国分町	同 仙台市	岩井屋源之丞		五二	
二十三	(28)	同	同		恒星測定		
二十四	(29)	大河原	同 大河原町	長三郎	恒星測定	五三	
二十五	(30)	越河	同 白石市	泉屋周右衛門	恒星測定	五三	
二十六	(31)	福島城下	福島県福島市	本陣 黒沢六郎兵衛	恒星測定	五六	
二十七	(1802. 1. 1)	本宮	同 本宮 市	塩屋三四郎	恒星測定	五六	
二十八	(2)	須賀川	同 須賀川市	本陣 三沢源左衛門		五六	
二十九	(3)	白河城下	同 白河市	因幡屋茂兵衛	恒星測定	六八	



左から若泉制作局ドラマ番組部長、掛川制作局長、菅制作局制作主管、渡辺名誉代表。制作局長の前に広げているのは伊能忠敬図。右側の山積みが署名簿。黄表紙はこれから説明する伊能隊の日程一覧表。

NHKへの大河ドラマ要望書提出模様 渡辺一郎

三月二十七日、渡辺と伊能洋さんの二人で、香取の大河推進協議会の役員連二十数名とNHKについて要望書を提出しました。協議会では三三、〇〇〇名ばかりの署名と、木内志郎会長、香取市長、東金市長、横芝光町長、九十九里町長が自筆署名した要望書本文を会長から提出しました。

伊能忠敬研究会は、協議会と密接に協力しているし、共通の役員も多いのですが、大河推進協の下部組織ではないので、並行して、星望代表理事名で要望書二冊（正副）をお渡ししました。本文だけでは寂しいので、下記資料を添付しました。

- ① これまでの多岐にわたる伊能忠敬再発見活動の経過概要（各事業者の投入予算推測、主要報道発表項目を含む） 三頁
- ② 同上経過の詳細な年譜 十五頁

③ 関東南部の伊能忠敬 一枚

④ 伊能忠敬の足跡（伊能測量の宿泊地一覧表） 黄表紙一冊

さらに、別途まとめておいた次の資料をお渡ししました。

(一) 大河ドラマの参考

稿本 新説・伊能測量物語五十話

A4横の縦書き 二四七頁

製本済 渡辺一郎編著 二部

(二) 過去十七年間の主要中央紙の大きな記事のB4版カラーコピー収録 約四十頁 一冊

先方の出席者は、制作局長掛川治男、制作局制作主幹菅康弘、制作局ドラマ番組部長若泉久朗、の各氏で、案内は千葉放送局放送部長藤本徳明氏でした。

香取市から部長と課長が同行しました。

NHKのこのメンバーは大河ドラマの正式な担当ラインです。要望をキチント聞いていただいたと考えています。

時間は三十分ということでしたが、好意的で丁寧な対応でした。陳情は二十個もあって、それでは、というわけにはいかないの、検討させて下さいという返事でした。

私からの説明の割り当ては数分でしたが、経過資料より原資料に興味をもたれたようです。中図に対し、伊能図とはこういうものですかとか。宿泊一覧表では、ここまで出来ているんですねと言われ、新聞記事収録は、関心を持ってご覧になっていましたか、どうぞといいますと、これを戴けるんですかと、ビックリしていました。

県東

「忠敬の大河実現を」

香取 推進協議 NHKに要望書

江戸時代の測量家、伊能忠敬を主人公とした大河ドラマを制作するNHK大河ドラマ推進協議会（木内志郎会長）は、東京・渋谷のNHK放送センターを訪れ、NHKの幹部と要望書を提出した。



掛川制作局長（左）に要望書と署名簿を手渡す伊能忠敬大河ドラマ推進協議会の木内会長（中央、右）と、東京放送谷

ドラマ部長は、「稿本 新説・伊能測量物語五十話」を眺めていましたが、お答えのなかで、色々な方々から要望をいただいています、原作まで用意してお話は初めてなので驚いた、といっていました。

あと、研究会でもある事務局の木内信次さんが、伊能忠敬をとりあげて青少年教育に心棒を入れよう、と熱弁をふるいました。

NHK側は、これまでの伊能忠敬再発見活動の詳細な資料を提供し、あらすじまで提案していることに、非常に強い印象を持ったと考えます。香取市から出ている要望のなかにある災害復興の柱に（香取市は激甚災害地区に指定されている）という意見には局長が、いい着眼点だといっていました。また、これまで大河にとりあげられていないのは千葉の他一つか、二つだと伊能敏雄事務局長が指摘していました、これもポイントと思われます。

以上がNHKへの陳情模様の概略です。



要望書提出を終え揃って富岡八幡宮に参詣、伊能忠敬銅像の前で

正式に要望書を提出しましたので、あとはコネクションをお持ちの方々のお力で、お口添えいただくということではなからうかと思えます。

順序が後になりましたが、開会前に、伊能洋さんを、忠敬から七代目で、研究会役員として一緒にやってきましたと紹介したとき、NHK側の方々から姿勢をただして御挨拶がありました。要望書提出を終わって、一同揃って富岡八幡宮に参詣したのち、社務所に表敬訪問し、桜井権宮司さんのお話を伺いました。そのあと、銅像前で記念写真を撮って、香取へ戻られました。

要望書提出を報じる
千葉日報 3/28付

伊豆七島図売約される

地名は現存中国より詳細 岩場も明示 朱海岸線の途切れている所が針穴



「大日本沿海輿地全図」測量直後作成
 3 伊能忠図「伊豆七島図」原図
 文化12～13年成 1幅 ¥12,000,000
 149×47cm 僅か虫損 保存良 由来箱書。
 小田原より下田まで含む。幕府提出中国
 より地名詳細。針穴（写図作成）跡がある
 原図。第9次測量。熱海で作成か。



4 蘭船図 1 額 ¥250,000
 江戸中後期 長崎絵師筆 42.4×57.1cm
 広渡湖秀画「蘭船図」（長崎歴史文化博物館蔵）の構図に似ている。
 上質顔料。保存大体良。

会報第六三号 特報で「大谷亮吉旧蔵 伊豆七島特別中図競売」について、
 渡辺一郎名誉代表の詳細記事がありました。このたび、売約されました。

伊豆七島中図原図の売約について想う

無理ではないかと考えていた伊豆七島中図原図（大谷亮吉旧蔵）が、京都の古地図
 展で売約済になったと出展者から聞いたときは正直にいつて驚いた。もともと古地
 図は安いな、と思っていたし、この図に高い値がついてくれば、伊能図全体が見
 直され、行方不明の地図が市場に出てくるのでいいな、と思っていたが、こんなに
 早く嫁入り先が見つかるとは思わなかった。

名前は教えて貰えなかったが、国の機関に入ると聞いて、まだまだ、伊能イベン
 トは終わっていないな、というのが実感である。大谷家も然るべき機関に収納され
 ることを期待して放出したようなので、満足であろう。

渡辺一郎

先覚者・伊能忠敬と伊能測量に関する大河ドラマの要望書

伊能忠敬研究会は、一九九五年香取市（当時佐原市主催）で開催された「フランス伊能忠敬の里帰り
 展」の成功をきっかけに組織され、これまで一七年間、伊能忠敬再発見活動が続けております。

このたび香取市を中心に東金市、横芝光町、九十九里町が連携して、大河ドラマ推進協議会が発足し、
 要望書を提出することになりましたので、当研究会からも、ぜひお願いしたいと考え、要望書を提出し
 ます。よろしく願い申し上げます。

御参考に、これまで私が深く関わってきた各種伊能イベントの経過などをまとめましたので御覧い
 ただければ幸いです。また、ドラマの検討にあたり伊能忠敬と伊能測量の全貌を描いた文学作品が無い
 ことが問題であります。取り上げて頂きたいテーマ五〇話を「稿本 新説・伊能測量物語（第一次草稿）」
 としてまとめましたので御一覽をお願いします。

伊能忠敬研究会として大河ドラマを要望する狙いは次のとおりです。

一、伊能忠敬は、事業家として成功して隠居の後、一転して将来の日本のために地図作りを始め、一
 七年間の努力により華麗・精密な伊能図を残しました。伊能のことは誰でも知っていますが、伊能図の
 現物を知る人はごく僅かです。これを一覽すると業績の凄さに感銘します。伊能図の現物と地図作りの
 現場風景を紹介し理解を深めたいと考えます。

二、伊能が作った地図は幕府上呈五〇年後の明治初年から本格的に使われ始め、明治期の国土の基本
 図は伊能図を利用して制作されました。並行して三角測量により一枚づつ更改されましたが、全ての置
 き換えが終わったのは昭和四年でした。上呈の百八十年後まで利用されたのです。まさに国家百年の計を
 実践したといえるでしょう。

三、地図作りを言い出したのは忠敬です。初め私財を投じて始められましたが、幕府に認められ、通
 達が出されて、沿道の諸侯、町村の多大な協力を得て達成された国家事業でした。沿道町村民の協力の
 実像をリアルに紹介したいと考えます。

四、輝かしい成果の反面に周辺女性との深い絆がありました。彼は次々に妻に先立たれ、生涯に四人
 の妻を娶りましたが、最初の妻ミチの婿であったからこそ、伊能家当主として事業を成功させ、村政に
 も貢献できました。三人目の妻がお信であったから、お信の父・桑原隆朝という謎の人物の献身的な奔
 走で、高橋至時にめぐりあい、伊能測量が実現したのです。

よく知られる隠宅の若い内妻お栄の身元は最近明らかになりましたが有能な助手でした。若いお栄を
 相手に観測演習をしていた忠敬を師匠の至時は、忠敬は幸せ者だと羨んでいます。

後半の伊能測量で忠敬の心の支えとなったのは娘のお稲でした。一度勘当されましたが、詫言を入れ
 て佐原に戻り、老体の忠敬の身を案じ愚痴の聞き役を務め、若い隊員達を励ました。

規模雄大な伊能測量の実景描写と、支えた女性たちの働きを重ね合わせるなら、高齢男性ばかりでなく、
 多数の中青年女性の関心をよぶものと考えます。

二〇一二年三月二七日

伊能忠敬研究会 代表理事

星 梵由尚

伊能忠敬研究会 敬之印

日本放送協会 会長 松本正之 様

（日本国際地図学会 会長）

「江戸の天文観測三部作」シリーズ三冊を読んで

大沼 晃

小生は、伊能忠敬に関する伝記など関連書籍をいままでに数冊読んでいたが、会報第六一号四四頁の図書紹介の記事を見て、江戸時代の天文観測についてまったく知識がないことに気付き、また先達者たちの業績を時系列的に知るため、先ず、「月のえくぼを見た男

麻田剛立」を、次に「星空に魅せられた男 間重富」、最後に「天と地を測った男 伊能忠敬」の三冊を昨年五月に一気に読破した。

三部作は、書評に小学校高学年以上の読者を対象とした学童向けの本ではあるが、大人が読んでも楽しめる本で、特にイラストや貴重な写真が多数収録されているので、歴史教科書にない親しみがあると書かれていたが、まったくその通りである。また、大人でも判読しにくい漢字の地名や人名などに「ルビ」を振ってあるので大いに助かった。さらに、巻末に和暦・西暦・満年齢・主な出来事などが一覧できる年譜が掲載されているので、読みながら当時の様子や先達者たちの出会いの情景をイメージできるのが楽しい。三者の出会いを中心に以下のような感想などを記す。

麻田剛立は、江戸中期（将軍吉宗時代）の享保十九年（一七三四）豊後国杵築藩（現在の大分県杵築市）の藩士・綾部安正（儒学者）の四男として誕生。幼少の頃から父腕に抱かれながら天体

について何故何故問答をしたとのこと。早くも五歳ごろ、庭に竹を立てて影を測定し、その動きから太陽が動いていることに気付き、天体に興味を深めていったらしい。当時、世間で言われるような神童とし利発で聡明な子供であったが、反面、天体観測に熱中するあまり、母からきつく禁止されるといふエピソードもある大変ユニークな少年であった。

長じて独学で天文学や医学を学び、二八歳の時（宝暦十二年）、暦（宝暦五年に施行の宝暦暦のこと）に載っていない日食を予報し、翌年十三年九月一日、前年の日食予測が的中し一気に名声を高めた。また、三四歳の時、藩主松平親貞の侍医となり江戸に行ったり、三六歳の時に藩主の腹痛をたった一人で治療したなどで、周囲の嫉妬をかうようなこともあり、武家社会のわずらわしさを回避し、好きな学問を探究したいという願望が強まったためか、三八歳の時、杵築を出奔し大阪に出る。藩主の理解があったが、いわゆる脱藩であり追っ手の目を眩ますために麻田剛立と改名し、そこで町医者を生業としながら天文学の研究を続けた。四四歳の時、反射望遠鏡で月を観測し、日本最古の月面観測図を描いた。月の「クレター・アサダ」は、麻田剛立の名に由来する。

五三歳の時、間重富と高橋至時が入門。晩年、幕府から改暦の時、麻田剛立を抜擢しようと声がかかったが、高

齢を理由に辞退し、優秀なふたりの弟子・高橋至時（理論派）と間重富（実践派）を推挙し、弟子たちが成し遂げた寛政の改暦という大事業を目にした後の、翌年の寛政十一年（一七九九）六五歳の生涯を閉じた。

彼は、武士を捨て好きな学問を通して究極の自己実現を貫いた当時としては稀有な生涯であったのではなかろうか。最後に、江戸時代近代天文学の塾を開き、多くの門人たちを輩出した麻田剛立の名を我々は忘れてはいけないことを強調しておく。



「月のえくぼを見た男 麻田剛立」
鹿毛敏夫著 関屋敏隆画
くもん出版

間重富は、宝暦六年（一七五六、将軍家重時代）大阪の質屋「十一屋」を営む間重光の六男として生まれる。間家には「百足退治伝説」で有名な依藤太（藤原北家・魚名の末裔、藤原秀郷のこと）の流れを汲む家柄であるとの言い伝えがあり、幼少の時から両親より学問はもとより、諸事全般にわたり

厳しくしつけられて育ったようだ。家業が質屋であるため算術が必須であり、大阪から京都まで勉強に通っていたが、二七歳のとき、家業の合間の遠距離による勉強ははかどらないので、京都より師の平賀普民を呼んで大阪に住ませたり、天才数学者・坂正永について和算を学ぶ。それが出来るほど間家は財力があり、一代で蔵を一つ建てるといふ家訓により代々から引き継がれてきた沢山の蔵を有していたが、天明四年に大阪で大火があり、蔵一つ残して焼尽。その後、奮起して家を再興しながら勉学に励み、財を惜しまず人脈を広げていったのである。間重富の代で家業を再建する並々ならぬ力量と遠国ではあるが浅間山の大噴火や大飢饉、そして大阪でも火災が頻発する世相騒然の中、立派に危機管理ができたことは並大抵の人物ではない気がする。

天明七年、三一歳の時に天文塾・先事館を開いていた麻田剛立に正式に入門する。師の麻田剛立との年齢差は二二歳もあり、親と子のような差であった。同時期に大阪城警護御定番役同心・高橋至時も弟子入りする。高橋至時は、若干の二十二歳で間重富より九歳下であったが、両者は師の下で天文学を学ぶと言う崇高な目標に向かって切磋琢磨した間柄ではなかったか。寛政二年（将軍家斉時代、老中首座松平定信）三四歳の時、傘屋の奉公人・橋本宗吉（二七歳）を見出し、自費で江戸の塾

へオランダ語を学ばせに行かせたり、三六歳の時に江戸から大阪に遊学してき

た佐藤捨蔵（一斎）の面倒を見たりした。短期間ではあったが世話になった捨蔵は、後に大阪で見聞した天文学の最新情報を

老中首座・松平定信（現在の総理大臣）に伝え、改暦の必要性を感じていた幕府は若年寄勝手方・堀田正敦を通して極秘にその意向を間重富の師である麻田剛立に打診をしたといわれる。そもそも暦作

りの権利は古くから京都の名門・土御門家や加茂家が世襲しており、幕府が一方的に作ることに難しさがああり、間重富はその難しさを知るが故に、事前に京都の陰陽頭土御門家に入門し、私財を投じな

がら改暦に関する情報を収集していたのである。また、改暦にあたっては麻田学派に白羽の矢が当たったことも予期していたように、幕府側と麻田派、朝廷側と麻田派の縁を取り持つ重要な役目をした人物なのである。

寛政七年三九歳の時、幕府から改暦の命令が下り、高橋至時と共に江戸に出向く。同年八月、押しかけ女房に近い強引な形で間重富より九歳年上の伊能忠敬が

高橋至時のもとに入門してくる。伊能忠敬より年若であるが商売人であり苦勞人でもある間重富は、天体観測を指導しながら傍らで見ていた伊能忠敬の人物像を

精力的な弟子と表現しているが、反面、自信過剰・尊大・謙虚さに欠けると評した。そう評された性格が後年糸魚川事件

など引き起こす遠因になったかもしれない。

町人の間と新参者の高橋らは、権威をひけらかす幕府天文方の吉田や山路らの反感を克服し、またそれぞれ身内の不幸に見舞われながら困難を乗り越え、改暦御用に精進した。寛政八年八月、正式に改暦御用が天文方の高橋らに命じられ、吉田・山路らと共に京都へ出向き、西三条台に改暦御用所を設置し、陰陽頭土御門家と交渉に入る。

多分、高橋至時が出発する前に土御門家の門人としてどのように折衝したらよいか、いろいろと個人的に伝授したのではないだろうか。町人である間重富には幕府や朝廷という大きな壁があり、前面に出ることはかなわないことであつただろう。その間、間重富は江戸の留守を預かり伊能忠敬の面倒を見た。努力の甲斐があり約一年後の寛政

九年十月、光格天皇より改暦の宣下があり、暦号を「寛政暦」と賜る。翌十年より施行と決まる。幕府は、その努力を表して江戸城躰躑の間で高橋らに金子が下賜された。しかし、間重富は町人であるため町奉行所から銀子二十枚と大阪に屋敷（天神橋三百坪）を貰うという栄誉に浴した。そればかりではなく苗字の間を名乗ることを許され、寛政十年一月に大阪にて天文御用（五人扶持）を命じられ、高橋至時と別れの挨拶を交わし大阪へ戻る。翌十一年、師の麻田剛立が亡くなり（六十五歳）

間重富らが手厚く葬る。

文化元年四八歳の時、高橋至時が浅草天文台内の官舎で亡くなったために、幕府から至時の長男景保の後見人を命じられたり、文化三年には仙台藩の漂流民がもたらしたロシア製の世界図などの翻訳を若年寄・堀田正敦（仙台藩主伊達周宗の後見人でもあったためか）から依頼を受けたり、大黒屋光太夫がもたらした原図を元に、景保の「魯西亜新都ペテルブルク之図」作製に協力した。

文化十三年（一八一六）、六十歳の生涯を閉じる。息子の重新が父の天文御用を引き継ぐ。最後に、麻田剛立や伊能忠敬の業績は世に知られているが、地味な間重富は二者と比べても決して見劣りしない業績を上げていることを強調しておきたい。

「星空に魅せられた男 間重富」

鳴海風著 高山ケンタ画

くもん出版



「星空に魅せられた男 間重富」
鳴海風著 高山ケンタ画
くもん出版

岡崎ひでたか
高田勲画



「天と地を測った男 伊能忠敬」
岡崎ひでたか著 高田勲画
くもん出版

一方、伊能忠敬は寛政十二年から奥州街道や蝦夷地へ測量に出かけ、次々と輝かしい実績を重ねて行く。

文化元年、九年間にわたり苦楽を共にした師の高橋至時とのつらい別れを体験する。その直後に幕臣に取り立てられ、以後測量事業は幕府の御用となる。「大日本沿海輿地全図」など作成を続けるが体力が衰え、文政元年（一八一八）永遠の眠りにつく。

三年後の文政四年、合計二二五枚に及ぶ「大日本沿海輿地全図」が完成し、高橋景保が伊能忠敬の嫡孫忠誨を伴い幕府に上呈し、この事業は終結する。

（注）編集部で若干、加筆修正した。

忠敬談話室



○イノベディアで山島方位記の撮影と、DVD出版をすることになりました。八月に撮影を致します。

詳細はこれからですが、記念館の内諾をいただきました。あまり詳しく書くとは新聞発表できないので、ここまでにします。全六七冊、一冊の平均は五〇枚から六〇枚です。

○大河推進協議会にたのまれて「伊能忠敬と五人の女性たち」について佐原で講演をしました。全く不得意の分野なので、メモを作って読み上げ、私見をくわえただけなのですが、話しながら思いつきました。

大河に登場させたい女性と、活躍の舞台を考えて、これを次号あたりから二回ほど会報に掲載し、NHKの局長以下の関係者に参考として送りつけるのは名案ではないかと、思案中です。

○最近嫁入り先がきまった大谷亮吉旧蔵「伊豆七島図」の話です。会員の前田幸子さんに聞いた話ですが、約四年前に取材のため大谷家を訪問したときは同家にはもう無かったそうです。

出品書店の話では、最近入手したように言っていました。そういうことだと複数の古書店が介在したことになると思います。

○再来年の大河ドラマ番組は、この会報がお手元に渡るところには決定していると思います（外部にアナウンスされるかどうかは別として）が、私のドタ感では「伊能忠敬」は候補には入ったのではないか、という気がします。

候補は一〇個くらい挙がるので、一番でないとい

い番目でも駄目なんです。が、もし一番なら、もう当然匂いがしてきますから、一番ではないですね。しかし、一〇番以内には入ったのでは、という予感です。

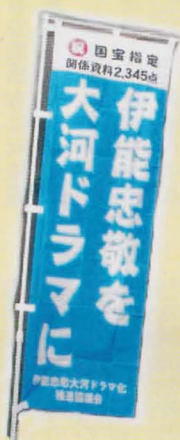
○その根拠は、六月八日にNHKから、二〇〇〇年十一月に放送した「そのとき歴史が動いた 伊能忠敬五六歳からの挑戦〜日本地図誕生のとき〜」を、二〇〇二年一〇月から「NHKオンデマンド特選ライブラリー」でオンライン配信したいと、出演者・撮影協力者の私に承諾要請（但し無料）があったからです。

○書面で承諾しましたが、この番組は、企画段階から相談にのり、東北の被災地 女川港で海上引き縄の実験をおこなったものです。昔の歌謡曲番組の司会をやっている小田切アナウンサーが、キャスターを務めました。

NHK第一のゴールデンタイムで四二分三〇秒。視聴率は十一〜十二%だったと記憶します。十年以上前の番組のことをいわれて驚きましたが、ここから大河の候補に名前が挙がったかな、という憶測です。

○二〇〇一年のお正月番組の後で、大河に出世できるかね、とプロデューサーに聞いたとき、「候補には挙がっている、但し九番目です」と言われたのを思いだしたが、今回の陳情の結果、十番以内に入ってもおかしくはない。陳情は二十数件あるというが、どの位の上位にいるのだろうか。

（渡辺一郎）



会員で「伊能忠敬」NHK大河ドラマ化を目指す推進協議会の
木内信次さん（香取市）からメッセージ

「伊能忠敬」大河ドラマ化に
研究会のご協力をいただき
ありがとうございます。

翁の生き方を現代の教訓として

子供Ⅱ目的を持ち勉強

大人Ⅱ家業に全力、そして人助け

老人Ⅱ子供の時から目的を達成

そして社会奉仕

現在

子供Ⅱ目的が無いⅡ親が定める、

大人Ⅱ自分の利益

老人Ⅱ天下り

全て教育が元点である。

暖かい社会を作ろう。

翁の生き方を現社会の鏡にしたい

「大河ドラマ」です

研究会の一層のご協力を

お願いいたします。



総会報告

六月十日（日）、東京・江東区深川の富岡八幡宮で、伊能忠敬研究会、二〇一二年（平成二十四年）度総会を開催しました。

北海道、青森、石川、兵庫、福岡、佐賀の各道県を含む各地からの参加者は四〇名（委任状九〇通）、高安克巳理事の司会のもと、星埜由尚代表理事の挨拶、つづいて議長に木内志郎会員を選出し、鈴木純子事務局長による前年度の経過、収支決算報告、二〇一二年度事業計画、年度予算の説明、清水靖夫監事による監査報告があり、経過・決算及び監査、事業計画及び予算案がそれぞれ承認されました。

フロア展の進捗と大河ドラマの要望書提出については、渡辺一郎名誉代表より報告がありました。

出席者から、とくに遠距離からの参加の場合、総会開催日は日曜日でなく土曜日のほうが好都合という発言があ



りました。今後検討いたします。終了後の懇親会にもほぼ全員が参加、初参加の新人会員、遠来の会員などのひとこと発言などで、盛り上がり、五時過ぎに散会しました。



朝から好天でしたが、終了時には土砂降り、しばし屋内にとどまってやり過ごしたことでした。有志はさらに二次会へ。
今年、参加出来なかった方々、来年はぜひご参加下さい。



2012 06 10



山根伸洋(のぶひろ)さん(福生市)

「交通史学会会員」明治初年代以降のインフラ整備事業の過程における地図の作成プロセスなどを調べております。近代の地図の淵源に伊能図が横たわっていることは常に意識しておりました。が、やはり正面から向き合ってみたいと思います。河島さまにご紹介を依頼した次第です。(以上入会案内を送付した際の返信より抜粋)

鈴木準二さん(東京都港区)

昭和十九年、山口県生まれです。伊能大図の中でも傑作といわれる毛利大図の「岩国」には、岩国城下の西十五キロに「玖珂村」とありますが、そこが私の生地です。

十八歳までここで過ごしました。大学時代は石田龍二郎先生の門下生でしたが、就職してからの四十年間は地理学とは無関係の仕事でした。わずかに趣味を通じて、地図と時刻表を生涯の親友として付き合った程度です。

平成二十年に引退してからは、ボランティアとして、ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトの日本事務所代表代行をしています。

これはアフリカのルワンダとブルンジで障害者のための義足を提供する事業です。現地で義足を誂え、また技術を伝えるのが主体ですが、資金源は日本の個人寄付金で、その名簿管理と会

計帳簿を担当しています。

新人生の伊能忠敬研究会でも、私に出来る範囲の仕事でお手伝いしたいと思っております。どうぞよろしくお願いします。

鈴木宣美(よしみ)さん(八王子市)

(三十七歳)



平山一族研究会発起人・日本家系図学会会員・経営コンサルタント会社(株)バイタルネットワーク役員。

母方(日色(ひいろ)家)先祖(千葉県出身)と武蔵七党西党・平山季重(ヒラヤマスエシゲ・鎌倉幕府將軍源氏三代に仕え、源平合戦における平家打倒の勇将・武蔵国日野の豪族(現京王線「平山城址公園」駅付近で栄えた)末裔の豪族・下総国多古平山氏と姻戚関係有。

昔からの歴史好きで、母方の大変珍しい「日色(ひいろ)」姓に興味を持ち、「日色氏」のルーツを調査していたところ、江戸時代初期において、平山季重末裔の豪族・多古平山氏「平山五軒党」との姻戚関係が判明。以来、中学生の頃より西党平山氏研

究が始まり、平山十五家系考察・研究活動に邁進。のちに多古平山本家と伊能忠敬の姻戚関係が判明。そんな中、現代社会において親族や一族のつながりの必然性の無さが浮き彫りになって

いる現状から、一族・研究者挙つての研究活動を通じて、平山一族の新しい一族ネットワーク(親族組織)ならびに研究者との友好的共同体を構築しようという強い胸中から、子孫数名と共に「平山研究会」設立を決意。さらに平成二十四年一月十九日において「平山一族研究会」を発足させました。

そうした中、平山一族にとって「西党平山氏研究」伊能忠敬研究」と位置づけられる最重要研究課題と認識する一方、将来の「平山一族研究会」と「伊能忠敬研究会」の交流が実現できればという思いから入会を希望致しました。伊能忠敬研究会会員の皆様方におかれましては、並行して、当「平山一族研究会」にご入会いただきたく存じます。ご入会希望の方は是非一報下さい。

〔連絡先〕

y-suzuki@khd.biglobe.ne.jp

平山一族研究会入会事務局まで。

島田泰枝さん(千葉県銚子市)

この度、伊能忠敬研究会に入会することになりました。

先日、銚子ジオパーク推進市民の会による現地研修会があり、会の代表で

伊能忠敬研究会会員の工藤先生から、伊能忠敬の銚子測量の話聞き、宮内先生を紹介していただきました。

後日、両先生が見えて伊能研究会の説明を受けました。この地から富士山の方位測量がなされたことを知りましたが、地元でもその事を知っている人は殆どいないと思います。

さて、私ごとですが、九年前逝去した夫が日頃、『我が家が現在商売できるのは町の人々のお陰』と云っていた歴史好きの主人の遺志を汲んで『外川ミニ郷土資料館』を平成十九年三月十八日、無料開館しました。

これは銚子電鉄の経営危機を支援することも兼ねています。

現在、館長として地域のお役に立てるよう頑張っております。

銚子の恵まれた自然遺産や文化遺産等を多くの人に知ってもらうための活動を続けていきたいと思っています。

会員の皆様、銚子についての節は是非お立ち寄り下さい。

展示品

漁具(魚網、網針、メンパ、浮球他)
漁師の晴れ着「万祝(まいわい)」
貝、石の標本
地域の歴史、民話、方言等の資料、
絵葉書や記念切符など。

市民のボランティアによる出前講座も好評です。

(一言)

偶然、私が資料館を訪れた時、研究



調査の為、来館されていた千葉大学生と引率の先生を前に、島田泰枝館長さんは地域・銚子外川の事を熱く語っていらつしやいました。

観光客だけでなく、博物館関係者や大学生等研究目的の方、地元小中学生の来館者が多いようです。

詳細は「外川ミニ郷土資料館」HP
<http://www.tokawa.jp/>
 をご覧ください。
 (宮内 記)



会員便り

— 会費納入・
総会返信などより —

会誌第六四号の地名標記について

中塚徹朗さんより
 いつも、会報をご送付くださりありがとうございます。

http://www.tokawa.jp/

今回も楽しみにして居りました。

「伊能忠敬研究」二〇一二年第六四号が届き、「伊能図の旅」をはじめ冊子の内容の充実に感動しました。

さて、資料「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第一回も貴重な御仕事とありがたく感謝申し上げます。

ただ、左記の地名標記が気になりましたので御確認頂ければ幸いです

《記》

四五頁 寛政一二年九月十六日の欄

？ 中食 一ノ瀬

↓ 中食 一ノ渡

【編集部より】

ご指摘のとおりです。間宮林蔵関連の有名な地名の校正洩れで、大変恐縮です。お詫びして訂正いたします。ありがとうございます。

村上 昭三さん(船橋市)

体調不良が続き会合に出席出来なく、残念に思っています。会報はいつも楽しく読ませてもらっています。

田野 圭子さん(千葉市)

一年もかかった家のリノベイトがようやく終わりそうです。

大西 道一さん(神戸市)

地図をあつかう雑誌は大きいほどよいと思います。

三木 敏明さん(姫路市)

「忠敬日記」の内、兵庫県通過八回分解読パソコン入力しました。入用でしたらメールで送ります。

及川 敏男さん(香取市)

友人五人と忠敬ゆかりのウォーキングを年一〜二回やっています。先日は八丁堀亀島町の地図御用所跡(忠敬終焉の地)を訪ねました。

秋間 実さん(逗子市)

年男(八四歳)なんとか生きのびております。総会がいまからの楽しみです。

安川 義巳さん(旭川市)

新版の会報、より立派になりました。各地の伊能関連史跡の紹介、ありがたく思っています。後世に受け継がれ、かつ、後継する技術者への啓発となることを願っています。コツコツと働く人達が、もう少し、高く評価される時代がきてほしいものです。

石川 清一さん(福岡市)

昨年からは福岡市の公民館長になり、勤務して今までより自由な時間がなくなり、年間で三万人近い利用者があり、緊張しながら出会を楽しんでいます。

山本 公之さん(小平市)

旅先へは伊能図が何よりの偲ぶよすがとなる。先日能登は仲代達矢の芝居を七尾市中島町にある演劇堂に行く。六四号の現地資料「中能登に行く」(三) 天測を希望し宿泊した中島村に

ある。帰京し改めて興味深く読み、力作と感謝する。

高宮 宏さん(東金市)

六四号の忠敬旧宅雑録(一) 興味深く読ませていただきました。特に、祖母孝様の見学者への五十年にわたる無償の奉仕に、重要文化財を守ってきた伊能家の御苦労が偲べ、感銘いたしました。伊能洋様のさりげない文章も心にしました。

河西 浩さん(甲府市)

黄金ウィークに佐原の一蘭荘さんのお世話になって記念館や小野川周辺を散策する予定です。前に雪で断念したのでゆつたり楽しみたいと思います。

伊能 二三代さん(札幌市)

大河ドラマ実現、願っています。小さな小さな力になれて、うれしいです。

石田 定雄さん(旭市)

行事等にあまり参加できず、申し訳ありません。今後ともよろしく。

石橋 輝樹さん(新潟市)

佐藤嘉尚氏の「伊能忠敬を歩いた」を楽しんでおります。

石嶋 博行さん(銚子市)

会誌を拝読していますが、カラー版となりびつくりしています。

伊能隆男さん(浦安市)

東日本大震災で液状化被害により被災し、街の自治会長として復旧と液状化再発防止に取り組んで参りました一年でした。

成家淑子さん(香取市)

完全復元伊能大図展(香取市民体育館)に渡辺名誉代表、星埜代表理事、

伊能洋・亮氏、鈴木事務局長（敬称略）、会員多数参加していただきありがとうございます。会場地として成功裏に終了できました。この大図展を機に地域の教育文化の発展に寄与できるよう努力したいと思います。



馬場良平さん（武雄市）

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」佐賀開催が決まり、いよいよ忙しくなりそうです。今年は当地伊能測量200年の節目の年でもあり、私の「塚崎・唐津往還を歩く会」では伊能忠敬測量隊の足跡をたどる歩く会を開催します。

山本公之さん（小平市）

此の間は、天理大、京大と大変貴重な体験をいたしました。次なる楽しみとなるものを願っております。

坂本 巍さん（藤沢市）

測量日記のワード化（ホームページ化）の作業を継続して行なっています。私の担当分は七次測量までで、すでに終わっているのですが、現在八次、九次測量分を実施しています。

小林順三さん（相模原市）

正月に心筋梗塞を手術致しまして現在は何とか元の状態にもどっておりです。小説『長明さんに逢いに行く』が完成、六月末に書店に並ぶ予定です。

新宿「紀伊国屋」、「三省堂」など、300店配本の予定となっております。

城野幹文さん（嬉野市）

昨年は入会させていただきありがとうございました。初めての総会出席、よろしく願います。富岡八幡は学生時代、仲間と音楽の練習を近くでやっていたので、とてもなつかしいです。

堀野正勝さん（土浦市）

「完全復元伊能図全国巡回フロア展」の全国催行を目指し、頑張っています。今年は、佐賀、呉、岡山を予定しています。

海保英之さん（千葉県横芝光町）

長らくご無沙汰致しまして、申し訳ございませんでした。体調も良くなってきましたので、また、お仲間に加えて頂きたいと思えます。よろしくお願い致します。

矢能 彰さん（さいたま市）

足を踏みはずして、接骨院通い。この二週間余り、サンダルで杖突き歩行です。総会までには健康を取り戻したく、日々努めます。

座間喜美さん（東京都中野区）

出席できたらどんなにか幸せに存じますが少し脚が不如意にて、ご盛会をお祈りしております。大変読み易くなり、次の号が待たれます。知り合いの方にもおすすめています。

西川 治さん（多摩市）

丑年生まれ、米寿が近付き、余命がいよいよ短くなりました。"うし"と見し世ぞ。皆さまのご活躍に期待しています。

久保木恒雄さん（柏市）
私、元気。

高宮 宏さん（東金市）

伊能忠敬の足跡が残る倉吉と八橋を結ぶ八橋往来、国の夢街道モデル地区にも認定されている道を歩いてみたいと計画しています。

直江泰子さん（筑西市）

欠席で失礼します。ご盛会をお祈りいたします。震災後、最近の竜巻の被害と、近くですので思い一入でございます。

松尾卓次さん（島原市）

今秋、伊能忠敬島原地方測量200年、伊能図展&講演会開催予定です。

伊藤栄子さん（練馬区）

脊柱管狭窄症の為に遠方まで歩けなくなりました。失礼させて頂きます。御盛会を祈念いたしております。

塚本倫正さん（成田市）

いつも立派な機関誌ありがとうございます。います。佐原の地図展好評でした。

河西 浩さん（甲府市）

四月二十九日に佐原に寄りました。伊能旧宅の被災の様子に驚きました。小野川沿いを歩いていると山車の人形を製作している方に話しかけられ、三・一一の被害の様子を聞くにつけ、大きな地震だったことを感じました。妻と娘で一蘭荘で一泊し、東薫の葉を味わいました。忠敬さんと町を盛り上げようとする意気込みを感じました。

守屋敏子さん（東京都世田谷区）

研究会が益々充実したものとなりますよう祈念しております。

川上 清さん（水戸市）
☆この日私が会長を務める水戸歩く会及び偕楽園公園を愛する市民の会、映画桜田門外の変支援の会との三者共催で『緑したたる偕楽園ウォーク』を開きます。残念ですが欠席です。

☆通常上記水戸歩く会の月例会開催に努め月3回（第1日曜日と適宜な平日2回が市民にも浸透してきました）。

平川定美さん（佐世保市）
「伊能忠敬記念碑建立にむけて奔走中」伊能忠敬全国測量第八次測量九州第二次で、佐世保市相模口を測量したのは文化十年一月四日（一八一三・一・四）から始めて約二週間滞在して測量しています。来年の一月四日（開始）が二百年になりますので、懸命に土地を物色しています。

原田照男（神戸市）

膝の痛みもあつてか最近とみに出不精になつて？

田中精夫さん（鳥取市）

小学校長退職後、地域研究に打ち込みたいと考えております。今、鎌倉時代に開かれたと思われる湖山池と佐治・陰所峠を結ぶ道の調査をしております。次回参加したいと思えます。ご盛会を祈ります。

大内惣之丞さん（習志野市）

益々の御発展をお祝い申し上げます。北見市に行つて居りますので欠席させていただきます。

松田昭二さん（京丹後市）

老齢にて出席ができません。盛会をお祈りします。

宮地 滋さん（伊万里市）

近頃は、加年の為すこし体調をくずしていますので、総会に出席したいのですが残念です。総会の盛会をお祈りいたします。九州支部

例会はぜひ出席して

御報告を賜りたい

と思っております、

支部会を楽しみに

しております。

白根貞夫さん（横浜市）

当日、約束の用件あり、欠席させていただきます。毎号機関誌楽しくよませて頂きます。もうお歳なので、遠出を差控えております。諸兄弟の御発展を祈ります。

平岡佳子さん（綾部市）

前回は佐原で皆さんにお目にかかれて嬉しいでしたが、今年は残念ながら出席できませんのでお許し下さい。先年北海道「別海」で記念碑は申請してから、許可まで二年かかるので、とりあえず記念柱にしておくという事でしたが碑は何時立ちますか。海は船としても二本の足で歩いて日本全国の地図！ただただ頭が下がります。見習って私ものがんばります。また、北海道行きたいです。

石川清一さん（福岡市）

昨年4月に就任した福岡市公民館長の所用と重なり、誠に申し訳ありませんが欠席いたします。次回は是非参加したいと思っております。

神保 誠さん（千葉県横芝光町）

出席できませんで申し訳あります。忠



敬大河ドラマ化を期待しております。

中尾 弘さん（草津市）

いつもありがとうございます。残念ですが今回も勝手ながらよろしくお願

増田健之助さん（匠瑳市）

ご無沙汰しておりますが、元気に毎日を過ごしております。これからもよろしくお願いたします。

川口富太郎さん（香取市）

五月二日 香取市民体育館における「完全復元伊能大図展」に行ってきました。

野田茂生さん（大野城市）

とりあえず元気で。

中塚徹郎さん（北海道福島町）

第一次測量蝦夷地上陸地点の町福島町に住んでいます。研究会入会後町内の忠敬の足跡を訪ねて楽しい発見をいくつか。内ひとつに、我が家の敷地内を測量（直線ですが）した可能性ありひそかに感動して居ります。

石嶋博行さん（銚子市）

会報「伊能忠敬研究」を拝読しています。二〇一一年第六三号の「富士山の方位に拘った銚子測量の検証「宮内敏」さんの研究がとても身近に感じることができました。

今崎仙也さん（呉市）

総会のご盛会をお祈りいたします。NHK大河ドラマ推進活動実現のため、第一次署名活動で四百名近くの署名を頂戴、推進協議会へ送り、第二次も四百名近くの署名を集めております。

二〇一四年の大河ドラマ決定をお祈りいたします。

安川義巳さん（旭川市）

伊能忠敬が広く知られる機会の多くなった事を喜ばしく思っています。会報の発行等をはじめ、役員の皆様にはご苦労をおかけしますが、今後共宜しくお願致します。北海道の今冬は豪雪となりましたが、四月下旬の猛暑で一気に雪が解け、桜も開花と同時に満開宣言とあわただしい春です。でも、

本日は一転して降雪の地もあります。

リラ野花が咲く前に「リラ冷え」となっています。ことしの春はあつと云う間に終って、急に夏になるかもと体調を心配しています。ご盛会をお祈りします。

金子和蔵さん（相模原市）

たまたま児童館の行事があり残念ですが欠席させていただきます。ご案内を戴き、四月二十九日に、香取市民体育館で、伊能大図展に参加させていただきました。大感激で素晴らしいものでした。その日は午後、星埜由尚先生の講義も拝聴でき、二重の喜びでした。伊能測量を地図史上、測量技術史上、科学文化史上、社会政治史上の位置づけからのお話でした。伊能測量に到るまでの地図作成の歴史がよくわかりました。ご案内に心より感謝申し上げます。

石田定雄さん（旭市）

ご案内いただきありがとうございます。諸用のため出席できませんが、御盛会を祈念いたします。

窪谷二郎さん（潮来市）

アヤマまつりの時期となりました。先週末で、漸く、母屋の修復が完了

し、職人の出入りも途絶えました。今後は、後始末に専念致すつもりです。会員の諸兄弟の皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

石井千壽子さん（須賀川市）

伊能忠敬研究会2012年度総会のお知らせありがとうございます。加齢の上、風邪を引いていて出席叶いませ

るので済みませんがよろしくお願

します。御盛会を祈ります。

江口俊子さん（山武市）

いつも大変お世話になっております。ここ千葉県山武市に移り住んで10年のどかな里山の暮らしですが、東日本大震災で一変。房総沖地震や、放射性物質の飛散などで落着かない日々となっております。

神戶利行さん（加東市）

なかなか会に参加できませんが、本年度の終わりに定年になり、みなさまと交流したいと思っております。研究会の冊子に伊能忠敬関係の本、会合等を知らせてもらおうと楽しみです。

藤田宏・藤田淑子さん（東京都文京区）

久しぶりお目にかかれる機会なのに残念ですが、二人で出席しなければならぬ行事と重なってしまいました。

計報

鶴飼 幸雄さん 二〇一二年二月

加藤 忠三さん 二〇一二年四月



謹んでお悔やみ申し上げ、ご冥福を祈ります。去る六月一〇日の総会にて、参会者で黙とうを捧げました。

会報に関するアンケート調査結果のお知らせ 会報編集部

今回伊能忠敬研究会会報に関するアンケート調査を
一一〇名の方々にお願いし、七三名の方から御回答を
頂きました。
御意見を寄せられた皆様、ありがとうございます。
今後の会報編集の参考にさせていただきます。



創刊第7（1996年）から第61号（2011年）伊能忠敬研究会誌
モノクロB5版縦

大項目別に、ご意見の概要と、編集部への対応、
投稿者へのお願いを以下に記します。

大項目別の回答状況は別図のとおりです。
カラー化、A4版化については大方の御賛成が頂
けたようで、編集部としてはまずまず思っております。

一、質問1〜3で悪いと答えた方々の意見は主に次の
ようなものでした。

◎B5版で揃えておいて欲しかった。

◎一五年記念特集号は、記念特集だから意味がある
が普通の会誌は大判になると扱いにくい。

分厚い美術全集などは大判ですが昔から小説は大
判でなく何巻あってもうまくきっちり本棚に並べら
れます。忠敬研究会の会報は（会誌）それほど分厚
くないし今迄のものが扱いやすいし、本棚にもきち
んと立てておけます。

◎今迄長らくB5であったものを、サイズを変更す
ると保存に困る。本棚はB5基準なので別の場所と
なる。サイズは守って頂きたい。

内容についてのクレームは一件で、サイズ変更は
具合が悪いというものが殆どでした。A4かB5か
については、編集部でも散々迷ったところです。

会誌のA4化は時の流れでし、費用は全く同じ
です。A4の掲載スペースは断然大きくて経済メリッ
トがあります。

特にカラーにする以上、地図・写真を鮮明に扱
いたいと思います。地図の場合は、大きさは大いに物
をいいます。

反対意見は思ったより少なく、かつ理由は主に
不揃いということのようです。御理解をお願いします。



特集号（右）と第64号（左）
カラー化、A4版



第62号と63号
カラー化 B5版

二、掲載内容についての希望の主なものは次のとおりでした。

- (一) 充実した内容ですので、特に申しあげることはありません。
 - (二) 伊能忠敬の人物像に関する話題も欲しい。
 - (三) 伊能忠敬の入門記事も掲載して欲しい。
 - (四) 地方のニュースを重視してほしい。
 - (五) 伊能忠敬関連人物も取り上げて欲しい。
 - (六) 伊能忠敬記念碑に関する記事を希望する。
 - (七) ブロック毎の話題や研究内容の掲載を希望する。
 - (八) 息抜きになる記事も載せて欲しい。
- 類いの希望を整理すると、このくらいになりました。伊能関連の全てを網羅せよ、といっているように感じます。地図の希望が余りないのは、すでに充分掲載されているからでしょうか。
- 編集の立場で考えますと、会員さんの層はつぎのようにわかれるかと思えます。
- ◎読者系の方々（執筆するお気持ちは無く、記事を読んで、何等かの参考にしたいとお考えの方々）
 - ◎勉強系の方々（記事も読むが、ご自身でも調査研究し発表をされる方々）
 - ◎イベント系の方々（忠敬イベントに興味があつて参考として目をとられる方々）
 - ◎応援団系（伊能忠敬普及活動の応援をするために会員となっておられる方々。大変ありがたい会員さんです。結構多いです）
- これら全ての会員さんにご満足いただくのは至難であります。予め謝っておきます。
- それでは会報に何を載せようとしているのか、といわれそうですので、カラー化後の編集部の方え方を整理しておきます。

1 カラー画面を生かしたい。わかり易くいえば、地図と写真を鮮明に紹介したい（写真、地図は少なくとも三五〇DPI以上の画像で投稿をお願いします。）

2 学会誌ではないので、平易な表現をお願いしますが、なるべく将来にも残る記事を書きたいと思っています。

いい記事を書いていただいた小島一仁、佐久間達夫、安藤由紀子、伊能陽子さんなどが故人になってしまったのは大変残念です。

跡をうめて、きちんと調査した記事を投稿していただける方の登場を期待しています。

3 伊能忠敬記念館収蔵資料の大部分が国宝になりましたが、これらにはあくまで、伊能側の史料であつて、大名家や地元には文書化された大量の伊能隊応援記録が残っています。これらは伊能測量一件記録としては一体をなすものと考えます。

次世代に間違いなく伝えるために、代表的な文書を作るべく取り上げたいと考えています。原史料の提供をお願いします。量が膨大なのが悩みの種です。

4 会員希望ならびに編集方針に沿って、ぜひ投稿をお願いします。小さなテーマでも結構です。調べてお書きくださるようお願いします。伊能本は結構多いので、適当に作られた本の孫引きや、丸写しは御遠慮願います。

5 新しい発見とか、新規の史料紹介は、どうしても読みにくいと思います。しかし、伊能忠敬に関する知見を広めるためにはぜひ必要です。

本誌は国内の有力な伊能資料保存機関には全て呈あるいは購読をお願いしています。多分、永久保管されるでしょう。また、ハーバード大学図書館は有料購入されています。この辺りを含めて御理解をお願いします。

6 伊能関係のホットニュースはなるべく載せるようにしています。伊能ニュースについて、我々は発信元そのものであつて、いつも早い機会から承知しています。

ただ、情報源ゆえに、発表に先立って掲載は出来

ません。なるべく早い機会に、少し詳しく、と心がけていることを御承知下さい。

7 会員便りは、なるべく、そのまま載せるよう心がけています。あの記事はよかったとか、こういう点をもう少し突っ込んでとか、会報記事その他について具体的感想を歓迎します。

8 第二項の掲載希望に戻りますが、ボールの投げ返しだけではいけませんので、入門記事掲載あるいは疑問点解決の対策として、Q & A頁を創設したいと思っています。

詳しいことは無理ですが、具体的な質問をお寄せ下さい。一問を一頁以内で説明するような形で試みてみたいと考えます。

三、会報に関する一般的な感想

◎高安さんの手腕に感服しています。

◎いつも楽しみにしております。素晴らしい資料として孫にも伝えます。

◎カラー化、A4判化ありがとうございます。とても見やすくなりました。

◎巻頭の伊能図は迫力がある。

◎新事実が次々分かつて驚きです。

◎伊能図と現代地形図をならべた「伊能図の旅」はたいへんおもしろいと思います。

◎文字及び写真（挿絵など）が鮮明になり見やすくなりました。

◎頁数はこれ以上増やさずとも今後も年4回の定期刊行を定着させて頂きたい

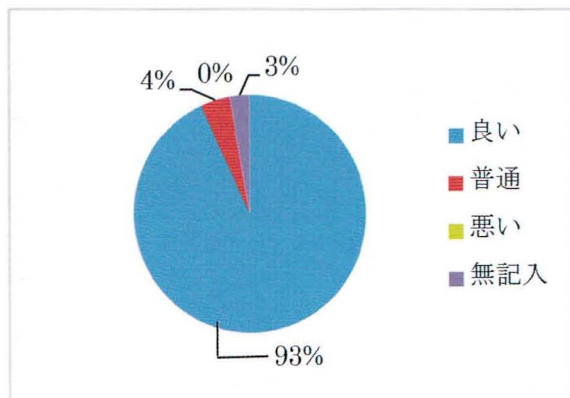
◎むずかしい言葉には説明つけてもらいたい

この辺はすべて、有難いお言葉です。編集部にとっては努力する甲斐があります。

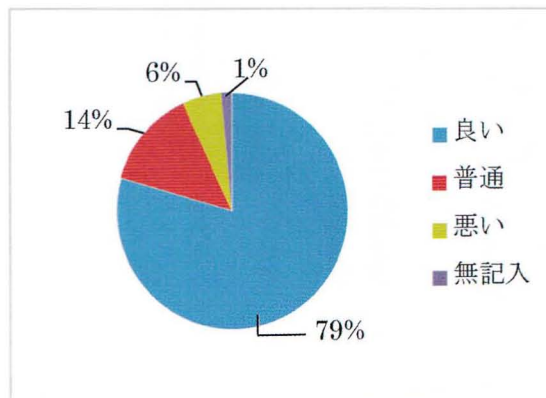
（渡辺一郎、高宮勲記）

質問項目別回答状況

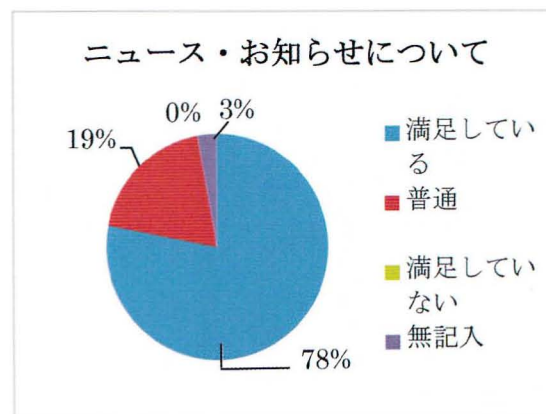
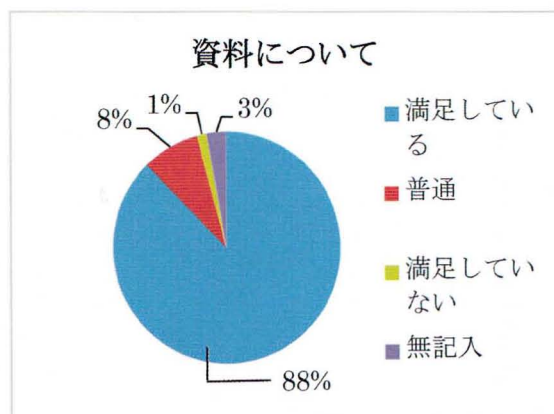
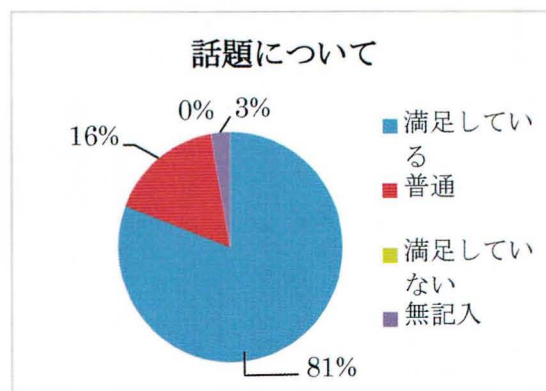
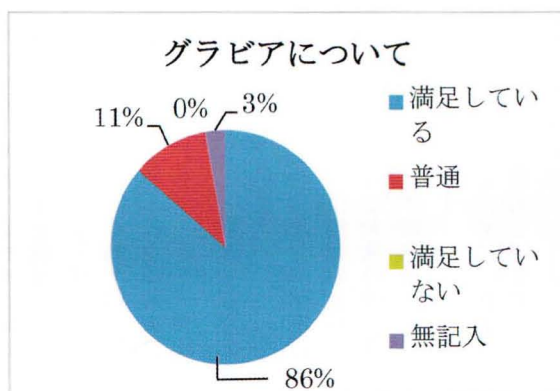
＜質問1＞ カラー化変更については如何ですか



＜質問2＞ A4判化変更については如何ですか



＜質問3＞ 掲載内容については如何ですか



アンケートにご協力頂き ありがとうございました

